

〈論文〉——「こどもの権利条約童話」創作を通して、世界課題を文学的に論ずる試み——

「月と太陽とこどもたち」

原子 修

——〈こどもの権利条約〉（児童の権利に関する条約）一九八九年、
国連総会で採択。一九九〇年、発効。〈日本は、一九九〇年、一〇
九番目の署名国となり、一九九四年に批准し、一五八番目の締約

国となる。〉中の、前文と第一部の四一条の計四二を、四二篇の
文学作品として、創作し、詩的共同的な意識を啓培する試み

目 次

前文	月と太陽とこどもたち
1	いのちのふるさと
2	月と太陽とビスサ
3	ミンガラバ（こんにちわ）！
4	月のおかあさんのねがい
5	太陽のおとうさんのねがい
6	水を……きれいな水を！
7	トマト、待てえ！
8	銀の笛
9	月のあわせ鏡
10	光の電話
11	潮騒
12	一万四千年後の拍手
13	ピアノの休戦
14	ハコボ

- 15 初出演
- 16 靴をはいた影ぼうし
- 17 秘密の贈りもの
- 18 ノルマンディの虹
- 19 夜空のプレイランド
- 20 月の子守唄
- 21 メリー・クリスマス
- 22 サラエボの月
- 23 かたいつぼうの靴下が……
- 24 ふたりのジヨモ
- 25 やすらかな寝床がありますように！
- 26 純金の汗
- 27 ふるさとは、いつまでも……
- 28 はじめての修学旅行
- 29 光のトロッコ
- 30 ムツクリ
- 31 オーロラの便り
- 32 月の学校
- 33 モステイクス（蚊）
- 34 オアシス

付	41	40	39	38	37	36	35
	月と太陽のねがい	夜空のおかあさん	空の焚火	少年兵	アルコルの少年	あわてんぼうのサンタ・クロース	太陽のなみだ

「こどもの権利条約」(「児童の権利に関する条約」)についての、ユニセフ(国連児童基金)の、各条項の非公式要約(本稿の前文と四一の作品は、条約の前文と、第一部の四一の各条の、計四二に、正確に対応して、創作された。)

前文 月と太陽とこどもたち

あつひぎしをさけてすわった大きな木のしたで、おばあちゃん、いったのです。

「でも、いたるところのおとうさんたちのきもちが、よりあつまつて、空にかがやくおひさまになったのだから、つらいめにあつて、そばに、おとうさんがいないときには、おひさまに、なぐさめてもらうんだよ」

また、べつの夜、庭の草むらで、おじいちゃんが、いったのです。

「せかいじゅうの、おかあさんたちのところが、みんなむすびあつて、夜道をてらすお月さまになったのだから、かなしくなつて、ちかくにおかあさんがみえないときには、おつきさまに、声をかけてみるんだよ」

でも、それは、つめたい雪のふりしきる、海のほとりでのことだったのかもしれないし、あるいは、夕やけの光がふりそそぐ、大きな都会の道ばたではなしたったのかも、しれません。

そして、それは、ふるさとのうつくしい地球で、みどりいろの若木となってそだとうとする、むすうのこどもたちが、いつか、どこかで、そつときいたはなしなのかも、しれません。

1 いのちのふるさと

——それにしても、どうして、こんなに、たくさんのこどもたちが、森のなかの泉のようにすみきつた目を、なげきのなみだでいっぱいしているのでしょうか。

くらく、ねしずまった夜の地球を、銀いろの光のまなざしで、いつくしみぶかくみまもりながら、月が、いいました。

地上のものには、月は、いつしか、西の空にしずんでいくようにみえましたけれど、いつぼう、月はといえ、地球上のすべてのまちや村の、夜から夜へと、やすみなく、わたりあるいは、空のおかあさんとしてのつとめを、はたしていたのです。

きのうも、きょうも、あすも……そう、もう、なんじゅうおく年のあいだ、月は、道ばたの草や、とびたつトンボや、うまれたばかりの赤ちゃんでいっぱい地球を、いとしいわが子として、いつくしんできたのです。

——ほんとうに、赤道ちかくの熱帯雨林でいまめばえようとしている木の芽も、北の海へとまいあがろうとしているエトピリカの幼鳥も、ユーラシア大陸の大地をふみしめてたちあがろうとしているあの男の子だって、みんな、わたしたちの、それはそれはいせつなこどもたちなのに、どうし

て、みんな、なにかに、おびえて、わなわな、ふるえているのでしょ。

あかるく、にぎやかな昼の地球を、金いろの光のまなざしで、めぐみぶかくてらしながら、太陽が、いいました。

そうだったのです。

月とおなじに、地上からは、太陽は、やがて、西の空にすがたをかくしていくようにみえましたけれど、太陽じしんは、地球上のどんな森や海の、昼から昼へと、やすみなく、めぐりあるいは、空のおとうさんとしてのつとめをはたしていたのです。

これから先、なんじゅうおく年だって、太陽は、月といっしょに、谷川のせせらぎ、あそびまわる雲、げんきにはしる女の子でいっばいの地球を、かわいいわが子として、はぐくんていくことでしょう。

——わたしたち、ずいぶん、ながいあいだ、地上をてらしてきた
 ましたけれど、ほんとうに、さいきは、いつたい、どう
 したというのでしょ。

月が、夜の時間のほうから、ともしんばいそうな声でいいますと、地球をとりまく大気的首巻きが、すこし、真珠いろに、ふるると、ゆれうごいたようでした。

——ほう、いま、わたしがてらしだしている、ヒマラヤ山脈の

ずっと北西のほう、バヤンカラ山脈のあたりでは、まえの年からの、夏のひどい干ばつと、秋からことしのはじめまでの、ひどいさむさと大雪のため、ごらんない、かわいそうなヤクたちが、たべる草もなく、かすしれない死がいとなつて、野にくちはてていつています。

そして、そのそばでは、おなかをすかしたこどもたちが、りょうてをまえにさしだし、手のひらをひらいて、道ゆく旅人に、たべものをください、と、哀願しています。

とおいくにからかけつけた、しんせつなボランティアのひとたちが、いっしょうけんめい、すくいの手をさしのべていますけれど、とても、おいつきそうにも、ありません。

太陽が、昼の時間のほうから、いたましげに、そういいますと、地球のおもてをふきめぐる風までが、うすバラいろのまぶたを、あついなみだで、ぬらしたようにおもわれたのです。

——それだけではありませんわ、太陽のおとうさん。

わたしの銀いろの光は、まちはなく、アフリカ大陸の、いたるまちや村で、夜もねむらずに射ちあい、ころしあうオトナたちの銃を、ぶきみに、てらしだしています。

あらそいをとめようとしておとずれたひとたちにも、ながれ弾がとんできて、とうとう、安全なくへと、のがれは

じめました。

ごらんなさい、太陽のおとうさん。

いのちからがら脱出してきたひとのむねにしつかりとだかれた、おさない男の子を。

射ちあいのおそろしきにおびえて、いまも、大きくみひらかれたままの、この子の、つぶらな目を。

いったい、地球上の、いちばんかしこいはずの人間の世界に、いま、なにか、おこっているのでしょうか。

銃をにぎりしめ、にくしみをこめて引き金をひくオトナたちが、どれだけ、たくさんの子どもたちを、ふしあわせにしているか、ああ、太陽のおとうさん、かんがえるだけで、わたしは、むねがいたくなります。

月が、なみだぐみながら、そういいますと、やはり、なみだ声で、太陽も、いいました。

——いくさにくるったオトナたちが、世界じゅうの、六〇以上ものくにぐににうめた、なんぜんまんもの地雷にふれて、きょうも、たくさんの子どもたちが、手足をふきとばされたり、いのちをうしなったりしています。

ほら、みてください、月のおかあさん、インドシナ半島のあるまちの、こころあたたかいひとたちがひらいているり

ハビリテーションセンターの入口へと、松葉杖をつきながらすすんでいく女の子を。

あの子の左足は、こころないオトナたちがうめていった対人用地雷で、うしなわれてしまったのです。

それをうめたオトナたちは、この女の子の、人生のかがやかしい未来のいちぶをも、ふきとばして、しまったのです。

昼の地球をみおろしながら、太陽がいますと、月も、また、夜の世界をみおろして、いいました。

——ねえ、太陽のおとうさん、わたしが、いま、銀いろの光を、できるだけあつめて、ひとときわ、あかるくてらしたさうとしているものが、なんだか、わかりますか。

靴の山なのです。

中部ヨーロッパの、シュプレー川とハーフェル川の合流するあたりのまちの、ブランデンブルグ門とよばれる門のまえに、地雷をうめることに抗議するひとたちが、そのしるしにおいていった、おびただしい靴の山なのです。

世界じゅうで、一カ月のあいだに、地雷にふれて、傷ついたり、死んだりしたひとたちの数だけの靴が、積みあげられていくのです。

たくさんのたくさんの靴が、足をうしなつて、もう、靴を

はけなくなった、たくさんのこどもたちの、かなしいおもいを、うったえているのです。

ふと、いままでに、地球上で、地雷の犠牲になった、一〇〇万人ものひとびとの靴をつみあげたら、いったい、どうなるのだろうか、とおもいながら、太陽は、いままでにみてきた、地球上の、たくさんのこどもたちの、ふしあわせなすがたを、おもいおこしました。

——ああ、きょうも、たべものがなく、病気になるって薬さえなしに、なんまん人ものこどもたちが、息絶えていきます。いっぽうでは、しあわせのあまり、たべすぎて病気になったり、いじめでみずからのいのちをたつこどもたちも、います。

きれいな水をのめず、学校にいつて文字をならうこともできないこどもたちのそばで、銃をにぎりしめ、射ちあいにあけくれるオトナたちが、あとをたちません。

ああ、月のおかあさん、地上は、いったい、どうなっているのでしょうか。

月も、太陽とまったくおなじ、地上の、おびただしいこどもたちの、かなしいすがたを、おもいおこしていたのです。

——ああ、ほんとうに、太陽のおとうさん、人間はいったい、

どうなってしまったのでしょうか。

まずしさのあまり、おさない弟をおぶって、まちかどで、道ゆくひとに、お金をちょうだいとよびかける、アジアの男の子や、伝染病にかかって病院にかつぎこまれても注射する薬もなくいたずらに死んでいくアラブの女の子の、くるしみの顔をおもいうかべて、月と太陽は、おもわず、ほっと、ふかいたため息をついたのです。

そのときでした。

まひるの地球をみおろしていた太陽に、こどもたちの、あかるい声が、たちのぼってきたのです。

おもわず、身をのりだして、太陽は、アフリカ大陸の一角を、みつめました。

戦争のため、ふるさとおわれた難民のキャンプの一角で、草むらにすわったこどもたちが、せかいじゅうからやってきたなまけぶかいひとたちのもとで、アルファベットの勉強をしていたのです。

ノートも、エンピツもありませんでしたので、じぶんの足のすねに、木の枝で、文字を書いては、いっしょうけんめいに、アルファベットを、おぼえこもうとしていたのです。

まずしいけれど、なんという、はれがましきでしょう。

青空の学校で、こどもたちが、未来の扉をノックしているのです。

ちいさな手で、じぶんのすねにえがかれた文字で、あたらしい世界を、よんでいるのです。

おもわず、アルファベットでいっばいのすねに、太陽は、めぐみの光をいっばいいっばい、ふりそそぎました。

——しっかりと、がんばってね！

そして、おなじころ、夜の地上をみつめていた月は、とおくきこえてくる、うつくしい歌声に、うっとり、耳をかたむけました。

南米大陸の、かろうじてきりのこされた熱帯雨林の村で、こどもたちが、声をそろえて、うたっていたのです。

いや、こどもたちばかりではありません。

バナナの木のこどもも、子犬も、木の枝のサルの子までが、声をあわせて、うたっていたのです。

月の、銀いろの光をあびて、うつくしくさざめく森が、川が、虫が、けものが、ひとが、いのちのよろこびを、うたっていたのです。

ささやかだけれど、大自然につつまれた、へいわな村のくらしのすばらしさを、こころゆくまで、うたっていたのです。

——しっかりと、いきていってね！

月は、銀いろの光のことばを、いっそう、キラキラと、ちりこぼしました。

そして、月と太陽は、顔をみあわせて、にっこりと、わらいました。

地球のいのちは、こどもたちのなかで、あたらしく、よみがえり、光りかがやいて、いくのです。

木とかたり、川とおはなしをし、小鳥といっしょにさえずることのできるこどもたちにこそ、地球という、いのちのふるさと、未来は、あるのです。

——ねえ、月のおかあさん。わたしたちも、このこどもたちを、はげまし、いっくしむ、しんせつなひとたちのこのころのなかで、いつまでも、光りかがやいていきましよう。

——ええ、太陽のおとうさん。昼も、夜も、こどもたちをいっくしむところを、光りかがやかせていきましよう。

月と太陽が、しんみりとはなしおえたとき、地球が、ほんのすこし、みどりいろにそまったように、おもわれました。

どんなに、つらく、くるしいことがあっても、きつと、いつか、地球は、いのちのふるさととしての、へいわな光にみちあふれる日を、むかえることが、できますように！

月と太陽のいのりが、空に、うつくしい虹をかけたように、おもわれたのです。

2 月と太陽とビササ

月と太陽は、ずっとむかしから、光のまなざしで、いつくしみぶかく、地球をみまもりつづけてきました。

月は、銀いろのものしずかなまなざしで、夜の地球を寝かしつける、うつくしいおおかあさんでした。

太陽は、金いろのあたたかいまなざしで、昼の地球をはげます、やさしいおとうさんでした。

こうして、もう、なんおく年以上もの大むかしから、月と太陽は、空にかがやくふた親として、みずみずしいいのちにあふれた地球を、「わが子」とよび、かわいがってきたのでした。

ですから、月と太陽にとつては、地球のいのちの一部としての、どんな草も小鳥も、そして、人間も、ひとしく、いとしいわが子だったのです。

しかも、ふしぎなことに、月も太陽も、彼らのなきけぶかい光をあびたものには、たとえ、それが、どんなにかぞえきれないほどの数の木や虫やこどもであっても、わけへだてなく、光の指で

なでさすつてあげたり、光の息をふきこんであげることができました。

そうだったのです。

空のたかみから地上をみまもる月と太陽には、照らしだされるいのちのかずだけの、光の目、光の耳、光の指、そして、光のところが、あつたのです。

そんなわけで、ラオスのジャール平原の一角に目をとめた太陽は、おもわず、東の空にのぼりはじめた月に、心配そうにはなしかけてしまったのでした。

——ねえ、月のおかあさん。シエンクアンのあたりに住む、ビササちゃんのことを、とても気にかかって、しかたないのですけれど……

すると、月も、うつすらとした銀いろの顔を、すこし、くもらせました。

——ええ、いつも、小学校の校庭の、シイの木の下にすわって、笛をふいたりしている、げんきな男の子でしょう。

——そうなのです。ビササちゃんのいつもすわる根もとのすぐそばには、おそろしい「ボンビー」が、うまっているのです。

ボンビー！

ビスサ少年がうまれるずっとまえの戦争で、おびただしい数の爆撃機が、このあたりにおとしたむすうの爆弾のうちの、不発弾です。

地面にもぐりこみ、あやまってふみつけたりしますと、爆弾が破裂して、なかにはいつている、たくさんの金属のボールなどが、あたり一帯にとびちり、いのちあるものを傷つけたり殺したりしてしまうのです。

——まあ、夜目には、よくみえませんでしたけれど、もし、ビスサちゃんが、ふみつけてもしたら、たいへんだわ。

月がいいおわるかおわらないうちに、小学校から、ひとりの男の子がでてきました。

ビスサです。

まっすぐ、シイの木の下のほうに、あるいていきます。

——ビスサちゃん、いつもの道から、あまり、それないで！

太陽が、金いろの光の声で、さけびました。

——ビスサちゃん、あまり、地面を、ちからいっばい、ふみつけないで！

月が、銀いろの光の声で、さけびました。

どうやら、ビスサは、ぶじに、いつもの根かたにたどりつきました。

腰をおろし、笛をとりだして、ふきはじめました。

どれほど、太陽と月は、ほっと、むねをなでおろしたことでしよう。

でも、ビスサが、笛をふきおわり、かえりかけようとしたとき、蝶がいちわ、ちょうど、ボンビーのうまっているあたりを、ひらりと舞いはじめました。

ビスサの笛の音にひかれて、やってきたのです。

ビスサが、蝶にきづき、そっちにむかって、たちあがるうとしました。

——あぶない！

太陽と月が、ほとんど、どうじに、さけびました。

その金いろの光と銀いろの光のまじりあった、ふしぎな声は、蝶には、よくきこえました。

びつくりした蝶が、そのまま、まっすぐに、シイの木の梢のほうに、まいあがりました。

目で、そのあとをおったビスサは、がっかりした様子で、いつもの道をたどり、家へとむかったのです。

——よかったわ、太陽のおとうさん。

——よかったねえ、月のおかあさん。

月と太陽は、ビスサの長い影が、ゆらゆらゆれて、校庭をとお

ざかつていくのをみおくりました。

——でも、月のおかあさん。このままでは、いつか、きっと、
 ビササちゃんが、あの、おそろしいボンビーを、ふみつけ
 てしまうにちがいありませんよ。

西にしみかけながらの太陽のことは、月は、だまって、う
 なずいたのでした。

なんとかしてあげなければ……

その夜、月は、ちかくのまちのホテルの一室の窓べに、光のま
 なざしを、むけました。

ちょうど、窓のかたわらのベッドには、ひとりの、金いろの髪
 のひとが、ねむっておりました。

ずっと西のほうの、とおいとおいくにから、ビササのくにの、
 ボンビーをさがしだして、危なくないように仕末するためにやつ
 てきた、ボランティアのおじさんだったのです。

——どうか、この、しんせつな男のひとの夢のなかに、わたし
 のメッセージが、とどきますように！

月は、いのりをこめて、その男のひとの夢のなかに、銀いろの
 光の画像をおくりこみました。

ビササの学校のまわりにうまった、ボンビーの映像だったので
 す。

つぎの朝、地平線から顔をだした太陽は、まちのホテルから、
 まっすぐに、ビササの小学校へとむかう、金いろの髪のおじさん
 一行を発見して、うれしさのあまり、胸があつくまりました。
 車には、ボンビーをさがしあてる、金属探知機までが、ちゃん
 と、つんであります。

——ありがとう、とおいくにからきた、なさけぶかいひとよ。

どうか、ビササが、あのボンビーをふまないうちに、かた
 づけてやってください。

なにしろ、あの男の子だって、わたしの、大切な大切なわ
 が子なのですから……

そう、ここにいとると、太陽は、できるだけはやく、そして、
 ぶじに、金いろの髪のおじさんと、ちからをかすラオスのおじさ
 んたちの一行が、ビササの小学校にたどりついて、仕事をはじめ
 られるよう、せいっぱいの朝の光を、道いっばいに、まきちら
 してあげたのです。

3 ミンガラバ（こんにちは）！

どんな空のたかみでてりかがやいてはいても、地球上のいたる
 ところでここの声をあげるいたいけなこどもたちへの、太陽のい

つくしみのおもいは、たくさんのオトナたちのところに、あたたかく、やどつて、かぞえきれないほどの、めだたないけれども、たしかなはたらきを、つまかさねていたのです。

そんなわけで、いちどに、おどろくほどむすうのオトナたちのころにはいりこむことのできる太陽が、象のながい鼻のようなマレー半島の根もとのあたりで、すいとはいりこんだのは、助産婦のルインさんだったのです。

ですから、もう、太陽は、ミャンマー一帯を雨雲でおおいかくしてしまふ雨季にだつて、ちゃんと、ルインさんのなかにやどつて、保健所からずつとはなれた村で、いまにもうまれようとしているメイちゃんのお産に、かけつけようとしていたのです。

——雨つづきで、道は、どろどろ。自転車だつて、けっして、つかえはしない。

でも、わたし、いくわ。

お産のための、いろいろな器具は、とつてもおもいけれど、でも、やがて地上にうまれようとしている、かわいい赤ちゃんのためですもの。

それをせおつて、わたし、どろんこ道を、あるいていくわ。

どんないのちにたいしてもめぐみの光をおしげもなくささげると太陽が、胸のなかであかるくてりかがやくのを感じて、もう、けっ

してわかいとはいえないルインさんは、また、勇気をふりおこしました。

はるか北、パトカイ山脈のほうからながれでるイラワジ川は、このあたりで、ゆたかな大地をひらくのでしたが、五月から一〇月までの雨季には、まいにち、スコールがおそいかかつて、すべを、水びたしにしてしまふのでした。

空いっぱいのだまをひっくりかえしたような、スコールの、はげしい雨脚がとおりすぎるのをまつて、ルインさんは、出発しました。

ところによつては、ひざまでしずむぬかるみの道を、おもいカバンをせおつたルインさんがすすんでいくすがたこそは、地上におりた太陽そのものでなくて、なんでしようか。

密林の雨しずくと汗で、ぜんしん、びしょぬれになり、はねあがる泥にまみれてあゆむルインさんこそは、地上のむすうのいたいけなこどもたちにつくしみの手をのべる太陽でなくて、なんでしょうか。

岩のように、肩にくいこんでくるカバン……よろよろとふらつく足もと……

なんど、途中で、道ばたにへたりこもうとしたかわかりません。でも、たすけをもとめているものにむかつて、歯をくいしばり、

ルインさんは、あるきとおしたのです……ちようど、太陽が、どんな雲や嵐の試練があらうと、わきめもふらず、確実に、東から西へとあるみきつていくように。

なん時間もかけて、やっと、密林をぬけたむこうに、めざす村があらわれたときの、ルインさんのよろこびが、どんなに大きかったかは、ですから、だれにでも想像できることだったのです。

——ミンガラバ（こんにちは）！

幼い声が、ルインさんを、歓迎しました。

村の入口で、首をながくしてまっていた、赤ちゃんがうまれる家の、男の子です。

木の葉のようにちいさなりようてをあわせて、ルインさんをおがむように、ごあいさつです。

——ミンガラバ、レイちゃん。

つかれも、いっぺんにふきとんだような、さわやかな気分で、ルインさんは、男の子の手をとり、あるきだしました。

——ねえ、レイちゃん。どろどろによごれた沼の水など、のんじゃあ、いけませんよ。

——うん。ぼく、ちゃんと、きれいな水、つかっている。

とつてもしんせつなおじちゃんやおばちゃんたちのおかげで、この村にも、水くみポンプができたんだ。

——世界じゅうの、あたたかいところをもったひとたちのおかげなのよ。

——それに、ぼく、予防接種のワクチンの注射だってしてもらったから、もう、だいじょうぶさ。

なんて、ありがたいことでしょう。

太陽は、いつくじみぶかい光を、世界じゅうの、たくさんのひとびとのところに、しっかりと、やどらせていたのです。

むこうに、床^{ゆか}をたかくあげた、竹づくりの家が、みえてきました。

ニッパヤシの葉で編んだ屋根が、しつとりと、いごちよさそうです。

夏草いろのロンジー（スカート）をひらめかして、男の子が、階段をかけのぼっていきます。

どこからあらわれたのか、子犬が、男の子の足にまつわるように、かけのぼります。

ルインさんも、よいしょと、おもいかばんをせおいなおし、階段を、一段一段、のぼりはじめました。

家のなかでは、お産まぎわのおかあさんが、いまかいまかと、ルインさんの到着を、まっています。

そのおかあさんのおなかの中では、女の子のメイちゃんが、こ

の世のはじめての光にふれようとして、生まれでるのを、まっています。

ルインさんのところにはいりこんだ太陽の光にふれようとして、ちいさなちいさな手を、ひらく寸前の、花のつぼみのようにして、まっています。

バサツと、羽音がしました。

いちわのカラスが、ルインさんの肩をかすめて、家のなかにとびこんだのです。

空から、メイちゃんに、どんなお手紙を、もってきたのでしょうか。

——さあ、この家のおかあさんには、げんきにうんでいただいて、こころづくしの母乳で、しっかりと、そだてていただいて、地上を、もつともつと、あかるくしてもらわなくっちゃあ！

そうつぶやいて、ふと、ふりかえったルインさんの目に、ついで、さいきん、できたばかりの、この村の、水をくみあげるポンプ場が、うつしだされました。

太陽のかぎりないつくしみの光をつかった、ソーラ式ポンプです。

世界じゅうの、太陽を胸にやどしたひとびとのおかげで、つく

られたのです。

ぐいと、こぶしで額の汗をぬぐうと、助産婦のルインさんは、もうすぐ生まれくるメイちゃんをとりあげるために、家のなかに、足をふみ入れました。

パツと、部屋じゅうに、雲のうえにかくれてみえないはずの太陽の光が、ちりこぼれました。

おかあさんのおなかのなかで、また、メイちゃんが、ことりとうごいて、その光のほうに、すこし、ちかづいたような気配です。

4 月のおかあさんのねがい

夜の地球に生きる、オトナのあなたよ、おねがいですから、ときには、空をみあげて、ほとんどの夜、しばしば雲のはれまから、じつと、あなたをみつめている、わたしのまなざしに、あなたのまなざしを、むすんでみてください。

そうすれば、わたしが、いま、地球上のどんな光景をみているのか、きつと、わかつていただけるとおもいます。

どうか、わたしの銀いろのまなざしにつながった、あなたのまなざしで、地球上の、いたるまちやむらの、あまりにも多くのこどもたちが、たべものもなく、飢えて、やすらかなねむりにつく

ことができずにいる、つらいありさまを、じつとみつめてくださ
い。

森や川のほとりのふるさとおわれた、たくさんのこどもたち
が、なかには、雨露をしのぐ家もなく、さむさから身をまもる毛
布もなしに、みじめな夜をおくっている、いいようもなくふしあ
わせなすがたから、目をそらさないでください。

いいえ、飢えばかりでは、ありません。

よごれた水をのんだりして、病いにかかった、かぞえきれない
ほどの、不運なこどもたちが、薬もなく、病院にもいけず、ただ、
ぜいぜいと、くるしい息をはきながら、死をまっている、あまり
に悲惨な様子を、どうか、しっかりとみさだめてください。

まずしさのあまり、いちにちじゅう、汗ぐっしよりになつては
たらき、わずかな収入を家族のもとにもちかえつて、泥のように
ねむりこける、かぞえきれないほどのこどもたちの、よごれた寝
顔から、目をそむけないでください。

そして、そして、夜もねむりにつけず、まちかどでからだを売っ
ている、たくさんの、女の子の、エイズにむしばまれていく、い
たいけな身の上から、けっして視線をそらさないでください。

学校にもいけず、文字も知らず、人間のこどもとしてのほこり
もうばわれた、むすうのこどもたちが、つらく、かなしく、さび

しく、そして、くるしい夜をおくっているすがたを、あまざず、
ごらんください。

そして、どうか、夜の地球に生きるオトナのあなたよ、これら
のこどもたちを、このような、かわいそうなすがたにおいこんだ、
ほとんどの責任が、あなたにある、という事実から、けっして、
目をそらさないでください。

そして、また、これらのこどもたちを、泥沼のようにみじめな
日々からすくいだして、ふつうの、人間らしいくらしにもどして
あげる責任も、また、あなたにある、という、のがれられない事
実を、しっかりと、みすえてください。

こどもは、あなたじしんの、やがてくる未来のすがたそのもの
です。

その、こどもをみすてる時、あなたの未来も、また、死にま
す。

どうか、夜の地球に生きるおとなのあなたよ、あなた自身の未
来をいつくしむ目で、これらのこどもたちの姿を、しっかりと、
みつめてください。

そして、いま、あなたが、ほんとうに、なにをなすべきか、を、
あなたじしんの目で、しっかりと、さぐりあててください。

かつては、いたいけなこどもであった、夜の地球に生きるオト

ナのアなたよ、どうか、これらのこどもたちをすくうためのはたらきで、あなたじしんの未来をすくってください……いま、あなたの目のまえにいる、非力なこどもこそは、やがてやってくるであろう、あたらしいあなたじしんの、あけぼのの光なのですから。

5 太陽のおとうさんのねがい

昼の地球に生きる、オトナのアなたよ、おねがいですから、ときには、空をみあげて、あけがたから夕方まで、ときおりは雲のあいだから、たえず、あなたに、おねがいのメッセージをおくりつづける、わたしの金いろの光に、耳をかたむけてください。

そうすれば、わたしの「いとしい星」地球のうえで、いま、なにごおこっているのが、きつと、わかっていただけとおもいます。

そうなのです。

いま、わたしは、たいへんに、こころをいためているのです。

どうか、昼の地球に生きる、オトナのひとよ、あなたのかたくななかんがえによって引き金をひかれる銃からのにくしみの銃弾が、どれだけの、なんのかかわりもないこどもたちのむねを射ちぬいてしまうのか、を、しっかりと、おもいおこしてください。

にくしみがにくしみをうみ、報復が報復をよびます、あなたの、際限のないころしあいのならわしが、ついには、大地のいたるところに、対人地雷をうずめ、小学校の校庭にまでも不発弾をばらまいて、それにふれたかざしれないこどもたちが、手足をふきとばされ、息たえていく、地獄の光景は、すべて、あなたのおくりだしたもののなのです。

まして、あなたが、もつとおそろしい核兵器を、あたかも、おもちやのようにふりまわすことの、いたいけなこどもたちの未来への、はかりしれない不安について、もういちど、頭をひやして、かんがえてみてください。

そればかりでは、ありません。

あなたが、大きな機械できりたおし、火をはなった森からは、みどりの木々たちのかなしみといかりの声が、灰いろの煙となつてたちのほり、わたしの目を、くらくおおっています。

どうか、昼の地球に生きる、オトナのアなたよ。

けむりが、目にしみて、わたしの瞼からあふれでるなみだが、どんなににがく、どんなにせつないものなのか、を、よくしってください。

そして、あなたがきりたおしていくのは、森であるとうじに、こどもたちの未来でもあるのだ、ということ、よく、わきま

てください。

目先のお金やもうけ仕事に目がくらみ、大地のみどりをほろぼして、砂漠にかえていく、オトナのあなたよ。

あとさきのかんがえもなく、ただ、そのときだけの欲望のままに、川をよごし、海をけがし、地球ぜんたいを、おそろしい化学物質で、とりかえしのつかないすがたにかえていく、オトナのあなたよ。

すみわたった空をにgoraせ、すきとおった風をくもらせ、かろうじて生きのこつてきた虫やけものや花を、ひたすら、絶滅へとおいこんでいく、オトナのあなたよ。

緑の大地も、きよらかな海も、うつくしい大気も、すべて、オトナのあなたが、かつて、こどもであったころに、あなたより先にうまれたオトナから、うけついで、かけがえのない財産なので、宝なのです。

それらは、けつして、いまオトナになったあなたが、おろかな生き方におぼれることによつて、ないがしろにし、つかいはたしていいものでは、ありません。

それらは、すべて、世界じゅうの、やがてオトナへと生長していく、こどもたちに、そつくりそのまま、ひきついでやるべきはずのものです。

おお、昼の地球に生きる、オトナのあなたよ。

おねがいですから、空をみあげて、わたしの、金いろの光のこぼに、耳をかたむけてください。

おのれをみうしない、血まよつたあなたは、いま、ずるずると、ほろびの断崖にちかづいていつていようようにみえます。

しかし、なんのかかわりもないこどもたちを、みちづれにする権利は、あなたには、ありません。

どうか、わたしをみつめると、まったくおなじきもちで、あなたのかたわらのこどもの目をみてください。

こどもの目は、太陽です。

それは、わたしが、世界じゅうのこどもたちに贈った、むすうの、ちいさな、わたしじしんです。

それは、あまりのまばゆさに、空のわたしを直視できないあなたのための、よくひえて、すんだ、わたしの分身です。

こどもの目には、空のわたしの、金いろの光のメッセージとおなじものが、よくひやされた宝石のように、しずんでいます。

それを、しっかりと、よみとってください。

そのメッセージは、じつは、むかしの、おさないこどもであつたあなたからのことばでもあります。

そして、オトナになったあなたが、もういちど、ういういしく、

わかがり、よみがえっていくための、未来のほうからやってくる、もうひとりの、こどものあなたからのことばでもあります。

ああ、昼の地球に生きる、オトナのあなたよ。

空のわたしをみるように、こどもの目を、みつめてください。

つぶらなひとみのおくへとつづく、まことの道を、どうか、みうしなわずに、かしいオトナとしての道を、まよわず、すすんでいってください。

こどもの目から、あなたの目をそらすとき、きつと、あなたは、おそろしいまよいの道にさまよいこみ、ついには、こどもを犠牲にし、いためつけることによって、あなたじしんの未来を、みずからの手でしめこころしてしまうことになりましょう。

6 水を……きれいな水を！

お陽さま、お陽さま。

いまにも、東のほう、アデン湾のかなたから、エチオピア高原の空に、のぼりてようとしている、お陽さま。

わたしは、もうすぐ、西のはて、スーダンの大湿原のむこうに
しずんでいこうとしている一一夜の月です。

どうか、わたしのおはなしを、おききください。

ちようど、午前二時をすこしまわったころのことでした。

そろそろ、アフリカ大地溝帯のまうえから、すこしずつ、西の空へとうつりはじめたわたしは、月の光にぬれた、ちいさなまじしい小屋からでてくる、ひとりの、やせほそった少女をみつめました。

ムセレットちゃんです。

一〇歳の、よわよわしそうな背に、しつかりと、土を焼いてつくった大きな壺が、くくりつけられております。

なんて、おもそうなのでしょう。

おまけに、石ころだらけの道をいく足は、はだしのままです。

ああ、まだ、夜があげないというのに……

エチオピアじゅうのこどもたちが、ぐつすり、ねむりこんでいる時刻だというのに……

——こんなにはやく、どこへ？

ムセレットちゃんの、ちいさな足が、道ばたの石ころの角にあたって、傷つかないようにと、いっしょうけんめい、足もとを月の光でてらしてやりながら、わたしは、たずねました。

すると、ムセレットちゃんは、たちどまりもせず、つぶやくようにいったのです。

——谷底の川へ、水をくみに……

そうだったのです。

雨水をためておく、村のため池は、もう、すっかりひあがって、いまは、行きだけで二時間はかかる、とおくの谷底まで、おもい壺をせおって、いかなければならなかったのです。

はじめは、おかあさんの仕事でしたが、一日に三回もはだしでかよううち、足を岩かどで傷つけ、それが、ぐじょぐじょにくさりはじめて、もう、あるけはしなかったのです。

——ムセレットちゃん、あなたの足は、だいじょうぶ？

とてもしんぱいになって、わたしは、たずねました。

——たいらな道には、草むらや、やわらかい土があって、なんとかなるけれど、谷底へとおりる、とつてもきりたつた崖の道は、もう、岩の角だらけで、とつても、いたくって、血がでて、たいへんなの。

ふと、たちどまって、ムセレットちゃんは、うつすらと汗のにじんだ顔を、中天にさしかかったわたしのほうにむけ、いったのです。

——でも、わたし、じつとがまんするの。だって、わたしが、

この壺で、水を家まではこぼなかったら、もうあるけないおかあさんや、八人ものちいさい弟や妹たちは、きつと、のどがかわいて、死んでしまうわ。

ああ、なんてけなげなムセレットちゃん。

おもわず、わたしは、いつかみた、サン・フランシスコやニースのまちの、水道の蛇口をひねるだけで、いきおいよくあふれでてくる水で、手をあらったり歯をみがいたりする、しあわせな家庭の、ジャン君やメリーちゃんのすがたを、おもいうかべました。でも、また、すたすたとあるきはじめてムセレットちゃんは、きつぱりとした口調で、いったのです。

——ほんとうは、わたし、とつても、ねむいの。ねむくって、ねむくって、いまにも、道ばたでねむりこけてしまいたいほどなの。だけど、内戦にまきこまれて死んだおとうさんは、こういったわ。「どんな生き方をしている、人としてのほこりだけは、けっして、うしなっちゃあいけない」って。すばらしいおとうさんだったわ。だから、わたし、けっして、くじけたりはしない。いつも、笑顔で生きていく。

おどろいたわたしは、つい、いつてしまったのです。

——ムセレットちゃん、まい日まい日、水くみだけのくらしで、つらくはないの？

すると、だんだん、谷底へとおりる断崖の道にさしかかったムセレットちゃんは、幼い声で、はつきりといいました。

——つらいわ。でも、つらくても生きぬいていくことに、とつ

ても、ほこりをもってているわ。

ああ、ムセレットちゃん！

つい、なみだぐんでしまったわたしは、そのために、月の光がよわまって、なん百メートルもの下の谷底へとおりる、急な崖の道で、ムセレットちゃんが、はだしの足を傷つけてしまっただいへんと、また、気をとりなおしました。

そして、もう、だいぶ西の空にかたむいて、うっすらとなった月の光で、いつしようにけんめいに、ムセレットちゃんの足もとを、てらしてあげたのです。

それにしても、なんてきりたった崖の道！

足をふみはずしたら、谷底へと、まっさかさまです。

むきだしの岩角は、ナイフの刃のように、するどく、とんがって、注意ぶかくそろそろとおりにいくムセレットちゃんの、はだしの足のうらに切りつけました。

そればかりではありません。

足もとがぐらつくたびに、おもわずしがみつく岩角も、また、包丁の先のように光って、ムセレットちゃんの、ちいさな指や手のひらを傷つけたのです。

——ああ、ポンプを……井戸を……ムセレットちゃんに！

どんなに、わたしは、地球上にくらす、たくさんの、しあわせ

な人々に、そう、よびかけたかったことでしょう。

こうして、やっと、ムセレットちゃんが、谷底におりたとき、わたしの、ほっとした気もちは、どんなことばでも、いいあらわすことができせん。

そして、谷底の道を、川へといそぐムセレットちゃんの、むきだしのはだしやす手に、きょうも、また、あたらしい傷口が血をにじませているのを、わたしは、みのがしはしませんでした。

——ああ、靴を……手袋を……ムセレットちゃんに！

いかほど、わたしは、世界じゅうの、かざしれない、みちたりてくらす人々に、そう、うったえたかったことか。

やがて、やつとのこと、ひあがった川底の、かろうじてたまっている水のありかたにたどりついたムセレットちゃんは、ほっとして、たちどまりました。

からだじゅう、汗でぐっしりです。

背なかの壺をおろし、汗をぬぐうムセレットちゃんに、わたしは、おもいつきり、つめたい月の光を送ってあげようと思いました。でも、なんということでしょう。

わたしは、もう、西の地平線に、しずんでいかなければならぬのです。

アフリカ大地溝帯のうがっ谷底には、もう、わたしの光は、と

どかなくなるのです。

わたしは、水たまりの水を、手ですくって、かわいたのどをうるおすムセレットちゃんに、いいました。

——さようなら、ムセレットちゃん。かえりも、がんばってね。すると、水たまりのどろどろの、にごってよごれ、虫のわいている水を、壺にくみながら、ムセレットちゃんは、空をみあげ、切りたつた崖のむこうにかくれようとしているわたしに、いったのです。

——ありがとう、お月さま。わたし、けっして、月の光で、わたしの足もとををらしてくれたあなたのこと、わすれないわ。

ああ、なんて心根のしつかりした、女の子なのでしょう。

おもわず、わたしは、地上の、すべての、めぐまれた人々に、こう、さげびそうになりました。

——水を……きれいな水を……ムセレットちゃんに！

お陽さま、お陽さま。

やがて、東のほう、アフリカの角とよばれるソマリアのほうから、エチオピア高原の空にさしのぼりはじめた、お陽さま。

どうか、あなたの、まばゆいまなざしを、アフリカ大地溝帯の底へと、さしむけてください。

そして、やがて、おもい壺いっぱい、よごれた水をなみなみとくみ、いつそうおもくなつて、肩にくいこむのをものともせず、こんどは、倍の時間をかけて、数百メートルの、きりたつた崖の道を、さらにあらたな傷を手足につけながら、のぼっていく、ムセレットちゃんに、どうぞ、あなたの、金いろに光りかがやくはげましのことばを、おくつてあげてください。

そして、わたしといっしょに、祈つてあげてください。

——岩角で、きずついた手足の傷が、いっこくもはやく、いやされますように！

よごれた水で、病気になる、いのちをおとしたりしませんように！

ああ、お陽さま。

もう、ほとんど、西の地平線にしずんでしまったわたしですけれども、きょうは、これから、あと二回も、谷底へと、水をくみにおりていかなければならないムセレットちゃんのために、どうか、いっしょに、ここから、いのつてあげてください……

7 トマト、待てえ！

大きなトマトがひとつ、リリちゃんのカゴから、ぼろりと、まっ

かな夕陽のように、こぼれおちました。

崖つぶちの、急な坂道を、ころころと、いきおいよく、ころがっていきます。

——あつ、トマト、待てえ！

亡くなつた、フィリピン人のおかあさんが、いつかおはなししていた、とおい海のむこうの、ニホンというくにのどこかにいるはずの、おとうさんの顔が、もしや、トマトのつやつやしたおもてにうつつてはいはすまいか、と、つい、おもつたのがいけなかつたのです。

——トマト、待てえ！

リリちゃんも、トマトをおつて、けわしい坂道を、ころころと、げんきよく、ころがっていきました。

ひとつぶでもなくしたら、トマトばたけのおじさんに、棒でなぐられてしまいます。

あと、もうすこし！

でも、トマトは、ポチャんと、マニラ湾の水におちると、あらあら、大きくてまっかな夕陽に早がわりし、そのまま、ずんずん、沖のほうへと、しずんでいきます。

——トマト、待てえ！

リリちゃんも、どぶんとマニラ湾の水にとびこみ、とうとう、

まっかな帆にまっかな風をいっばいはらんだまっかなヨットになつて、おとうさんの顔がうつつているかもしれない夕陽を、おいかけました。

——トマト、待てえ！

夜になり、朝になつて、まっかなヨットのリリちゃんは、やつと、みしらぬちいさな港に、たどりつきました。

——ああ、つかれた。

やつと岸にはいあがつたりリリちゃんは、まっかな屋根とまっかな窓のまっかなヨットハウスになつて、ぐっすりとねむりました。そして、とつてもかなしい夢をみたのです。

ニホン人の男のひとが、むこうむきのまま、あゆみさつていくのです。

——おとうさーん！

はりさけるような声で、リリちゃんがさけび、おいかけても、けつしてふりむかずに、そのひとは、とおぎかつていくのです。

——おとうさん。死んだおかあさんは、わたしが、まちがいなく、ニホンのあるまちでうまれた、といいました。

わたしのからだのなかには、フィリピン人とニホン人の血が、夕陽のあついしずくのように、音たててながれている、といいました。

でも、わたしには、国籍がありません。わたしは、フィリピン人でも、ニホン人でもありません。

おとうさん、おねがいですから、わたしのほうを、ふりむいてください。

そして、おしえてください、わたしは、ほんとうは、どこにのひとなのか。

でも、その男のひとは、手でかたく耳をふさぎ、小走りに、たちきつていくのです。

——おとうさん！

ついに、そのひとをみうしなつて、リリちゃんは、草ぼうぼうの道ばたにしゃがみこみ、肩をふるわして泣きました。

そのときです。

「トントントン」

だれかの、ノックの音で、リリちゃんは、夢からさめました。

なみだでぐしよぬれの目をあけたリリちゃんは、たちまち、げんきをとりのどし、こんどは、まっかな蒸気機関車になって、しゅーつと、いきおいよく、まっしろい煙をふきあげました。

——トマト、待てえ！

まっかな客車をひっぱったリリちゃんが、臨港線の、さびてまっかな線路をトコトコはしりはじめますと、カモメやネコやカエル

がのりこんできて、いつしよに、合唱しました。

——リリちゃんのおとうさん、待てえ！

風や魚や貝までが、まっかな客車のなかで、声をあわせました。

——リリちゃんの国籍、待てえ！

でも、すぐに、線路は、ゆきどまりです。

ヤツと、きあいをかけると、もう、リリちゃんは、まっかな馬つきのまっかな乗合馬車になって、カタカタ、はしりだしました。

——トマト、待てえ！

いつのまにか乗りこんできた、大工さんや赤ちゃんや小犬が、いつせいに、さけびました。

——リリちゃんのおとうさん、待てえ！

ネズミも、チョウも、モグラまでが、まっかな乗合馬車のなかで、声をはりあげました。

——リリちゃんの国籍、待てえ！

だけど、すぐに、馬車の車輪がはずれて、ガクンと、ストップです。

あつというまに、リリちゃんは、まっかなバスに早がわりして、でこぼこ道を、ガタゴト、かけだしました。

——トマト、待てえ！

満員バスのなかの、農家のおじいちゃんや魚売りのおばさんが、

くちぐちに、さげびました。

——リリちゃんのおとうさん、待てえ！

ニワトリも、ブタも、ヤギまでが、まっかなバスのなかで、合唱しました。

——リリちゃんの国籍、待てえ！

いつしか、夕ぐれです。

トマトばたけの主人が、棒をもって、みまわりにくる時間です。とうとう、大きくてまっかなトマトになったリリちゃんは、崖っぷちのトマトばたけまで、ころころと、ころがりました。

そして、ストーンと、トマトのカゴのなかに、おさまりました。やれやれ。

ふと気がつくと、もう、リリちゃんは、もとのリリちゃんのすがたにもどり、カゴをかかえて、たっておりました。

なんとまあ、カゴの中には、こぼれおちていったはずの、あの大きなトマトが、まっかな夕陽のように、光りかがやいていたのです。

マニラ灣のほうをみたりリリちゃんは、水平線にせずもうとする夕陽に、いいました。

——トマトをかえしてくれて、ほんとうにありがとう、夕陽さん。

でも、それをきいた夕陽は、ただ、だまっとうなずくばかりでした。

リリちゃんのおとうさんも、国籍も、かえしてあげられなかった夕陽は、とてもかなしそうに、水平線のむこうに、しずんでいったのです。

8 銀の鈴

雪のようなまっしろい肌の、その女のひとは、さらさらとした水いろの、質素なドレスに、ふくよかなからだをつつんで、ダツカのまちの、ゴミすて場ちかくのスラムに、すがたをあらわしましたが、その、どことなし、地上ばなれた、けだかい感じは、さながら、地上におりたった、ま昼の月のようにであった、といいます。

それにしても、そのあたりの、なんという悪臭！

レストランのたべのこしの料理や、ホテルの汚物、病院のゴミ袋や、お金持の家の台所の野菜くずが、車ではこびこまれ、うずたかい山をかたちづくっておりましたが、日中の暑さで、いちはやく、くさりはじめ、たえがたいにおいをはなつのでした。

でも、バングラディッシュをおそった大洪水におわれて、首都

のダツカににげこんできた、農村のまずしいひとびとにとっては、そこは、かろうじていのちをつなく、オアシスだったので。くさりかけの残飯は、飢えをいやす、なによりのごちそうでした。

つかいふるしの靴や服は、あかだらけの、よごれたすはだかやはだしをつつみかくす、かけがえのないものでしたが、ときには、それらは、まちかどの市場で、何タカかのお金とひきかえにできる、貴重な売り物ともなるのでした。

そんなわけで、飢えのため、ふるさとの村をおわれて、このまちにたどりついた、なん千、なん万という、よるべのないひとびとにとっては、この、ゴミの山ちかくのダンボールなどでつくった、急ごしらえの小屋が、地球上でもつことのできた、たった一つの、わが家だったのです。

じゅくじゅくとくさっていくゴミの山からながれでる、鼻のもげそうな悪臭のするどぶ川。

それにそって、どこまでもたちならぶ、ダンボールの家々。

トイレもなく、たれながしの、その家なみをぬけて、うつくしいほほえみをたやすことなく、女のひとは、すすみました。

いったい、だれなのでしょう。

どこにいこうとしているのでしょう。

ダツカのまちの、どんな慈悲ぶかいところをもったひとですら、あまりのひどいおいに、つい、気絶しそうになって、もう、にどと近づかない、この、ゴミすて場のスラムの、奥ふかくにあゆみいる、気品にあふれた女のひとは、ほんとうに、だれなのでしょう。

ひとりの男の子が、そつとちかづき、ゴミだめをあさった、汚物だらけの手を、おっかなびつくり、女のひとのほうに、さしおべました。

すると、たちどまった女のひとは、ゆつくりと、その子の手をとり、銀の鈴のようなうつくしい声で、いったのです。

——いっしょに、いきましょうねえ。

また、すこしいくと、こんどは、おなじようによごれた女の子が、手をのべました。

——いいわ。あなたも、いっしょよ。

こうして、いつしか、なんびやくにん、なんぜんにんもの、悪臭だらけの、はだかのこどもたちが、なんとふしぎにも、こどもの数だけある女のひとの手を、みんな、ひとりひとり、しっかりとにぎって、スラムをぬけ、ゴミの山を、のぼりはじめたのです。

みんな、ひとりひとり、女のひととおなじ、うつくしいほほえみを、飢えでこけた頬、下痢症状でやつれた顔、渴きでひからび

た表情いっぱいにかべ、鼻をかんだ紙や、するどいきりくちをさらすアキ罐、くさった野菜くずや、われたガラスビンのかけらでいっぱい、ゴミの山を、はだして、のぼっていったのです。

銀の鈴のようなうつくしい声でうたう女のひとといっしょに、みんな、ひとりひとり、銀の鈴のようなうつくしい声でうたいながら、じゅくじゅく、くさった水のわくゴミの山を、のぼっていったのです。

——ひかりの手……いつくしみの手

とうたいながら、のぼっていったのです。

すると、ゴミの山のいただきから、こだまが、かえってきました。

——ひかりの手……いつくしみの手

いいえ、それは、こだまでは、ありませんでした。

ゴミの山のでつぺんで、飢えのため、いまにも息をひきとろうとしている、やせこけた赤ちゃんが、もう、ぜんしん、銀いろの光につつまれながら、うたっていたのです。

——ひかりの手……いつくしみの手

女のひとが、かけより、また背からのびてきた、あたらしいにほんの手で、いまにも息たえようとしている赤ちゃんを、胸に、しっかりとだきあげ、頬ずりして、いいました。

——わたしの、たいせつな、かわいいこども！ さあ、いっしょに、いきましよう。

こうして、むすうの光の手をもった女のひとと、しっかりと手をつないだこどもたちは、ダツカのまちの、ゴミすて場の山のいただきから、はるかな空のたかみへと、銀の鈴の音ねとなって、きていきました。

そして、空には、ま昼の月が、いつくしみぶかいおかあさんのように、ひっそりと、うつくしくかかっていたということでした。

9 月のあわせ鏡

それは、ほんとうだったのです……この地球上に、たとえば、どんなにたくさんさんのひとがくらしていようと、まちがいなく、ひとりひとり、空に、じぶんだけの月をもっている、というのは。

えっ、でも、月は、宇宙に、たったひとつのはずですって！
それは、そうです。

でも、ルーマニアの、ブカレストのまちの、ふしあわせなこどもたちのための施設でくらすアンドレには、まちがいなく、彼だけの月がありましたし、いっぼう、月に見ても、やっぱり、月をじっとみつめるひとや小犬のかずだけのわたしが夜空にてり

かがやくのよ、と、ひそかにこころぎめしていたのです。

ですから、その夜、すっかりあかりのきえた施設の窓べに、ベッドからそつとぬけだしたアンドレのすがたがあらわれたとき、すかさず、月は、プラチナいろのなまざしをふりむけたのでした。

——どうしたの？ アンドレ。

月の光が、八つになったアンドレの、すみきった瞳の海に、キラキラとさざ波をたてました。

——ほく、やっぱり、おかあさんといっしょに、くらしたい。

月は、アンドレの目から、かなしみの海があふれでて、熱いなみだにかわるのを、みました。

——かわいいそうな、アンドレ！

そうつぶやいて、月も、おもわず、なみだぐみました。

やっと八歳になったばかりのアンドレは、つい、きのうも、施設からぬけだして、まずしいアパートでひとりぐらしのおかあさんのドアを、なんども、ノックしたのです。

やっとドアがあき、でてきたおかあさんは、でも、やつれはてた顔で、あおじろく、さげびました。

——はいっちゃあ、いけない。

そして、泣いてしがみつこうとするアンドレを、やせほそった手づきはなし、さげんだのです。

——ここには、おまえにたべさせるパンのひとつかけらも、のませるスープの一滴だって、ありはしない。

さあ、とつと、施設に、おかえり。

あすこが、おまえの家なんだから……

ついに、ドアにすがりついて泣きじゃくるアンドレを、おかあさんの、骨と皮だけの手が、ちからずくて、ひきずりだし、それでも、おかあさん、おかあさん、といつて泣きじゃくるアンドレを、まちじゅう、ひきずりまわして、施設の入口に、つきはなしたのです。

そして、あわててでてきた施設のひとに、かみつくようにいったのです。

——もう、にどと、かってにであるかしたりは、しないで！

ああ。

工場でいっしょけんめいにはたらいていた、アンドレのおとうさんは、数年前のとある日、とつぜん、黒光りする銃をもった秘密警察のひとたちにとらえられ、銃殺されてしまったのです。

だが、あの、まじめいっぼうの、家族おもしろいおとうさんを、秘密警察に、密告などしたのでしょう。

でも、のこされたおかあさんには、もう、どんな働きぐちも、ありはしませんでした。

やがて平和がおとずれ、秘密警察もなくなって、アンドレ一家のまずしさだけが、のこりました。

なんにちも、一家五人が、水だけでくらす日がつづいて、とうとう、おかあさんは、けつしんしたのです。

——施設でなら、飢え死にしないですむわ。

四人の子どもたちは、こうして、ブカレストの、さまざまな施設にあずけられ、いちばん年下のアンドレも、いまの施設に、泣く泣く、ひきとられたのです。

そして、たしかに、そこでは、こころやさしいひとびとが、テーブルにパンをならべ、ピアノをひき、いろいろなことをおしえてはくれるのですが、アンドレには、やっばり、おかあさんのそばが、いちばんだったのです。

——ほんとうに、かわいそうな、アンドレ！

月は、そう、ささやくと、あわい光の指で、そっと、アンドレの頬をつたう、なみだのしずくを、ぬぐってやりました。

——ありがとう、お月さま。ほんとうは、ぼく、おかあさんのつらさ、よく、わかっているんです。

おかあさん、きつと、はたらきぐちがみつからずに、きうだって、ひとかけらのパンすら、くちにはいりなかつたのです。

ああ、でも、ぼく、やっばり、おかあさんの、やさしい声が、ききたい。おかあさんの、あたたかいほほえみを、みたい。

あらたななみだが、アンドレの頬をぬらすのを見て、月は、とっさに、アンドレの月であるじぶんから、おかあさんの月であるじぶんへと、こころの画面をきりかえて、あまりのことに、はっとしました。

おなじ夜、おなじ時刻、おなじブカレストのまちの、まずしいアパートの窓で、おなじ月をみあげながら、アンドレのおかあさんが、こうささやき、なみだにくれていたのです。

——アンドレ！ わたしのアンドレ！

ああ、おかあさんだって、ほんとうは、どんなにか、すえつ子のアンドレを、胸にだきしめ、頬ずりしてあげたかったことか。

とうとう、月は、アンドレの月としてのじぶんと、おかあさんの月としてのじぶんを、にまいのあわせ鏡のようにつかって、アンドレとおかあさんとを、空のうえであわしてあげようと、おもいました。

——アンドレ、おかあさんとあえますよ。

月のことばをきいて、アンドレは、なみだを手の甲でぬぐい、にっこりしました。

—— おかあさん、息子のアンドレとあえますよ。

どんなに、おかあさんが、月のそのことばで、うれしそうに、ほほえんだことでしょう。

そして、もう、ふたりのその顔は、たがいの鏡に、はつきりとうつじだされて、空に、うかびでたのです。

—— おかあさん！

—— アンドレ！

鏡のなかのアンドレが、鏡のなかのおかあさんにだきつきまじった。

鏡のなかのおかあさんが、鏡のなかのアンドレをだきしめ、頬ざりしました。

—— アンドレ！

—— おかあさん！

よろこびのあまり、リンゴのように赤くもえあがる、アンドレの頬つぺた。

うれしさをおさえきれず、わらいの花びらをちりこぼしつばなしの、おかあさんの顔。

—— ああ、おかあさんは、きのう、どんなに、おまえを、へやに入れ、ぎゅっとだきしめたかったことか！

—— ごめんなさい、おかあさん。でも、ほく、もう一カ月もお

かあさんとはなれていて、とつても、つらかったんです。

そして、ひとだきあう、にまいのあわせ鏡のなかの、まずしい母と子の目に、またも、あらたななみだが、こみあげてくるのを、空でけんめいにじぶんのふたつのところをあやつる月は、はつきりと、みたのです。

ああ、たとえ、夜空での、ふたりのであいが、どんなに、はかなくついえさり、あすは、また、つらい、くるしい一日になろうとも、そして、いずれ、この施設をでなければならぬ年齢にたったアンドレのまえに、いかなる不安な日々がまちうけていようとも、じぶんの月を空にもっているかぎり、愛しあうものとは、かならず、かならず、めぐりあうことができますよ。

そう、月は、ことばにならないことばを、だんだんうすれていく光にこめながら、ゆっくりと、ルーマニアの夜のはてに、しずんでいったのです。

10 光の電話

そして、やつぱり、それは、ほんとうに、まちがいのないことだったのです……この地上に、よしんば、なんじゅうおく人ものひとびとがいようとも、ひとりのこらず、空に、じぶんじしんの

太陽をもっている、というのは。

えっ、しかし、太陽は、空に、たったひとつしかありませんって！

それは、そうです。

しかし、マレーシアの、バンギというちいさなまちの学校に、
ようアダムには、たしかに、彼だけの太陽がありましたし、また、
太陽にしてみても、やっぱり、太陽をおおぎみるひとや花のかず
だけのじぶんが空にもえさかっている、と、まちがいなく、そう、
ここにきめていたのです。

ですから、その日、マレーシア人の友だちといっしょに、小学
校をでて、公営住宅の家にむかう途中のアダムが、「ねえ、君の髪
の毛、どうして、トビ色なの？」とたずねられ、いっしゅん、こ
とばにつまんで、おもわず、赤道ちかくの空の、金いろの光りか
がやく太陽をふりあおいだとき、太陽も、すかさず、アダムに、
まばゆい光のことばを、そそぎかけたのです。

——おそれることはないよ、アダム。じぶんが、モスLEM人だ
ということに、ほこりをもちなさい。

そこで、アダムが、じぶんは、けっして、マレーシア人ではな
く、ずっと西のほう、アドリア海ちかくの、ボスニア・ヘルツェ
ゴビナといまはよばれる土地のうまれの、モスLEM人だ、という

ますと、友だちは、さらに、たずねたのです。

——でも、アダム、君は、けっして、マレー語しか、はなさな
いじゃあないか。

どうこたえたらいいのかわからずに、また、アダムは、太陽を
ふりあおぎました。

それは、ちょうど、六年まえのことだったので。

おなじ土地に住む、モスLEM人とセルビア人のあいだに、血な
まぐさいあらそいが、おこったのでした。

当時四歳だったアダムには、なぜ、きのうまではなかくくら
していたひとびとが、とつぜん、銃を手にして、おそろしい殺し
あいをはじめたのか……その理由が、よくわからなかったのです。
でも、アダムのうまれそだったブゴイノのまちにも、銃声がな
りひびき、朝食をとっている一家がおそわれて皆殺しになるよう
な、むごたらしいできごとが、つぎつぎにおこって、とうとう、
アダムのおかあさんは、アダムとふたりの姉をつれて、命からが
ら、となりのクロアチアに、のがれたのでした。

そして、ザグレブのまちに事務所をひらいて、難民をすくう活
動をはじめていた、マレーシアのしんせつなひとびとの手引きで、
やっと、平和なマレーシアに、ひきとられてきたのです。

——ほく、家では、うまれ故郷のセルビア・クロアチア語を、

ちゃんと、はなしている。

やっと、アダムがこたえるのをきいて、太陽が、だまっとうなずきました。

でも、マレーシアにきてもう六年、アダムの記憶から、ブゴイノのまちも、くらしの思いでもうすれ、いまは、すっかり、マレーシア人になりきっていたのです。

友だちとわかれ、ひとり、家への道をたどりながら、アダムは、つい、うつむいて、つぶやきました。

——ぼくは、ほんとうは、なにくくじんなんだろう。

たしかに、ぼくは、マレーシアの歌もじょうずだし、踊りだつてできる。

でも、ぼくの、ほんとうの歌や踊りは、いつたい、どこに
いけば、みつけだせるのだろうか。

アダムは、たちどまり、午後四時ちかくの、マラッカ海峡のほうにかたむいた太陽を、みあげました。

そして、ふと、六年まえ、ブゴイノのまちで、銃をもった男たちにつれさられたつぎりの、おとうさんのことをおもいおこし、
とつてもつらいきもちになりました。

——ねえ、お陽さま。おとうさん、いまごろ、どうしているの
だろう。

ああ、ぼく、ふるさとのことば、すっかりわすれてしまわ
ないうちに、いちど、おとうさんと、おはなしたいなあ。
だつて、おとうさん、けつして、マレー語、はなせないん
だから……

いつもは、とつてもあかるくつて、ひまわりの花のようにほが
らかなアダムの、ひどくかなしそうな顔をみて、太陽は、とつき
に、アダムの太陽であるじぶんから、アダムのおとうさんの太陽
であるじぶんへと、こころのチャンネルをきりかえて、おもわず、
あつと、声をあげそうになりました。

マレーシアから、はるか西、九〇〇〇料もへだたった、ポスニ
ア・ヘルツェゴビナの野で、お昼まえの太陽をふりあおぎながら、
ねらい射ちされて、血まみれになったおとうさんが、息たえだえ
の声で、よびかけていたのです。

——アダム、わたしの、かわいい息子！
なんということでしょう。

どうして、とうとい命をこの地上にさずかったひとを、ひとが、
射ちころしてしまつたりできるのでしょうか。

でも、太陽は、ひっしでした。
アダムの太陽としてのじぶんと、おとうさんの太陽としてのじ
ぶんとを、金いろのパラボラアンテナのようにむきあわせて、ア

ダムの声とおとうさんの声とを、光のケーブルで、つないでやろうとしたのです。

—— さあ、アダム、わたしの光の電話でなら、おとうさんと、おはなしできるよ。

太陽のことばをきいて、アダムが、うれしさのあまり、ぴよんと、ひとつ、地面から、とびはねました。

—— さあ、アダムのおとうさん、息子のアダムと、おはなしなさい。

うすれていく目で、太陽に、ありがとう、とウィンクすると、おとうさんが、くちをひらきました。

—— アダム……

おとうさんの声の、あまりのよわよわしさに、びっくりして、アダムが、たずねました。

—— どうしたの？ おとうさん。

—— ねらい射ちされたんだ。出血がひどくて……

—— ぼく、すぐ、薬と包帯もって、いってあげる！

—— ありがとう。でも、もう、ておくれだ。おかあさんを、たのむよ。

—— あっ、おとうさん。お姉ちゃんたち、すぐ、よんでくるよ。おかあさんとみんな、おとうさんを、たすけてあげる

よ！

—— ありがとう、アダム。マレーシアで、しあわせに、くらすんだよ。

—— おとうさん！ まって！ ぼく、すぐ、たすけにいく！

—— さようなら、アダム。どんな民族のひととでも、なかよく、へいわに、生きていっておくれ……

—— おとうさん！

—— アダム……

—— さいごの息といっしょに、おとうさんの声が、とだえました。

—— おとうさん！

アダムの、はらわたをしぼるような、悲痛な声をあとに、マレーシアの空から、マラッカ海峡のほうへと、しずかにかたむきなगर、太陽は、ここから、祈ったのです。

—— ああ、いちにちもはやく、マレーシアのバンギのまちと、

うまれ故郷のブゴイノのまちに、ひとのここるところをむすぶ九〇〇〇粒の虹が、うつくしいアーチをかけることができますように……そして、その虹をわたって、アダムが、うまれ故郷にもどることが、できますように……

そして、ふるさとのまちブゴイノの、なつかしいわが家のあとを、たずねあてることが、できますように……

そこで、モスレム人として、ほこりたかく、先祖からつたえられたことばや歌や踊りをたのしみながら、さまざまに民族のひとたちといっしょに、いつまでも、いつまでも、なかよく、手をとりあつて、生きていくことが、できますように……

11 潮騒

はてしれずひろがる、夜の、青びかる大海原をてらすほそい月が、どうしてもわすれることのできない、かなしい光景がありました。

世界のはてからふきおこったかのような、あまやかな風が、浜べの木の葉むらを、すきとおった指で梳すきますと、かすかにざわめく、いちまいいちまいの葉から、うつくしい楽ねの音が、銀のしずくのようにこぼれちる、そんな夜のことでした。

虚空にふわりとうかぶ雲と雲のすきまから、ふと、波うちぎわをみおろしたほそい月は、おもわず、はつと、身をかたくしました。

くろづくめの身なりをした男たちが、岩かげのボートに、大きなカゴをつみこんでいたのです。

しっかりとナワでくくられたカゴのなかには、いつたい、なにが、はいつているのでしょうか。

水ぎわにたつた男たちが、なぎさの砂に足をとられて、つい、ぐらりと、よろけ、カゴの底を、海の水にひたしました。

なかで、なにかが、ひっしにうごめき、ウウウツという、うめき声ともつかず、泣き声ともつかぬ声が、カゴの編み目から、もれてでました。

海の水といっしょに、かすかな銀いろの光を、カゴのすきまから、なかのくらがりにしのびこませたほそい月は、あまりのことくに、声をのみました。

女の子です。

六つか七つの女の子が、手足を麻なわでしばられ、口には、布きれのさるぐつわをはめられて、とじこめられていたのです。

ああ、なんということでしょう。

この子を、いつたい、どこに、つれていこうというのでしょうか。

おもわず、女の子のほうに、銀いろの光の手をさしのべようとしたとき、大きなシロナガスクジラのかたちをした雲が、ほそい月と海べとのあいだにまぎれこみました。

——ああ、ほんとうに、オトナたちは、あの女の子を、どうするつもりなのでしょう。

気が気でないほそい月が、ふたたび、雲のあいだから、みおろした海には、もう、二本の樫でこぎだしたボートの、沖へとむかうすがたが、ありました。

女の子のはいったカゴが、ときおり、身をよじって泣く女の子のうごきにあわせて、ぐらぐらと、ゆれます。

しかし、男たちの、闇いろの手が、カゴを、しっかりと、おさえこんだままです。

どうして、こんなことが、できるのでしょうか。

おなじ人間として、いのちのふるさと地球に生をうけたものが、なぜ、かわいい女の子に、このような仕打ちが、できるのでしょうか。

おどろきとかなしみにぬれたほそい月の、かすかな銀いろにぬれたまなざしは、ボートのむかう、はるかな沖あいに、ゆらりと浮かぶ、いつそうの、すこし大きめの、くろい船を、みたのです。

ああ。

もう、ほそい月には、すっかり、わかりました。

密輸船です。

このくにの、おさない子どもたちを、船底ふかく、つみこんでは、なん千軒もはなれた、みしらぬくにのひとびとに、たかい値で売りつける、暗黒の商人たちの船です。

果物をいれたカゴの積荷の山にまぎれて、女の子は、かどわかされ、売りはらわれるのです。

なんておそろしいはなしでしょう。

そのとき、また、こんどは、さつきより、もっと大きな、象のかたちをした雲が、ほそい月のおもてを、おおいました。

——なんとかして、あの女の子を、すくう道は、ないものかしら？

たいへんに、こころをいためた月が、また、ながれきった雲のあいだから、かすかな光のまなざしを、海にふりこぼしたときには、もう、ボートは、くろい密輸船によこづけになり、女の子をいれたカゴは、船底の倉庫に、かくされてしまっておりまして。

そして、ふと、目を岸べにうつした月は、海岸の林のかげで、じつと、沖のくろい船をみながら、なみだながらに、手をあわせている、男と女のかげを、みました。

——娘よ、ゆるしておくれ！

声にならない声で、泣きながら、沖へときえていく、くろい船のなかの女の子にゆるしをこう、まずしい父親と母親のすがたを、ほそい月の、うつすらとした光は、さめざめと、てらしだしました。

たくさんの子どもたちをかかえて、職もなく、くらししていけな

いりよう親が、こまりはてたすえ、わずかばかりのお金とひきかえに、女の子を、人さらにに、わたしてしまったのです。

ああ、なんとということでしょう。

沖あいの、くろい船が、音もなく、うごきだしました。

とうとう、なにもしてやれなかった、ほそい月も、やがて、女の子のむかうみしらぬ大陸のように、ぶあつく空をおおう雲にさえぎられてしまったのですが、くらいカゴのなかのあの女の子の、さるぐつわの布のあいだから、しほりだすようにしてさけんだ、すぐいをもとめる、ひっしの声は、いつまでも、いつまでも、月の耳に、潮騒のように、かなしく、ひびいていたのです。

12 一万四千年後の拍手

月は、トーキョーの空をのぼりつめて、ほこりや排気ガスが、うすよごれた雲のようにたちこめるまちなみを、しずかに、みおろしました。

——どうか、ひとりのこらず、しあわせな夜を、すごせますよう

うに……

そういのりながら、月が、ふと、とあるたかい建物の屋上に、うつすらと銀いろのままざしをむけて、はっとしました。

ひとりの少年が、屋上の手すりをこえ、いまにも、地上のアスファルトめがけて、とびおりようとして、いたのです。

——ケンちゃん、あぶない！

月は、ありったけの光をふりしぼって、さげびました。

ケンちゃんは、この建物のマンションの三階にすむ、小学校四年生の、男の子でした。

おとうさん、おかあさんと三人ぐらして、なんの不自由もないはずなのに……

でも、月は、ひっしでした。

ありったけの光の声で、さけんだのです。

——ケンちゃん、屋上に、もどつて！

わが子をいとおしむ、せかいじゅうのおかあさんたちのきもちを、白銀に光りかがやく、球のかたちこのころによせあつめて、

月は、よびかけたのです。

三万四千粒もはなれているとはいえ、その、はるかなへだたりをこえた、月の、けんめいなねがいが、つうじたのでしょうか。

ケンちゃんが、とびおりのをやめ、けぶるような空の、にじんでみえる月を、ふりあおぎました。

目には、なみだが、いっばいです。

——どうしたの？ ケンちゃん。

ほっとして、月が、たずねました。

——いくら、ぼくのくるしみをうちあげたって、だれひとり、耳をかしてくれない。

くちびるを、血のでるほど、かみしめて、ケンちゃんが、いいました。

月は、いつしゅん、いぶかりました。

でも、屋上の、ほんの数センチメートルしかないへりに、りょう足をかけただけのケンちゃんが、とても心配で、月は、すこし、せくように、いいました。

——はなしてごらん、ケンちゃん。

すると、ケンちゃんは、手すりを、ぎっしりにぎったまま、すすり泣くようにして、かたりはじめたのです。

——ぼく、とっても、蝶やトンボが、すきなんです。アリと、おはなしができるほどなんです。

ある日、学校の教室にはいりこんできたクモを、みんなでふみつぶそうとしたので、ぼくが、たずねました。

それからは、もう、みんなで、ぼくを、クモの子”といつて、仲間はずれにし、いじめるんです。

男のクラスメートは、”さあ、クモの子たいじだあ！”と
いっては、ぼくを、ぶちます。

女のクラスメートは、”きたなくって、きみのわるいクモ、ちかよっちゃ、いや”といつては、ぼくから、にげていくのです。

月は、やっと、わかりました。

夜空をながれる雲に、じぶんとケンちゃんのあいだにわりこんでこないように、とたのんでから、たずねたのです。

——でも、学校の先生は？

ケンちゃんが、首を、よこにふりました。

そのたびに、足が、屋上のへりから、すべりおちそうになるのが、月には、ともしんばいでした。

——それが、つらくって、ケンちゃん、ここから、とびおりようとしたの？

だまつて、ケンちゃんが、うなずきました。
手すりにつかまった手の指が、夜のさむさに、つめたくかじか

んで、ガラス細工の小枝のように、ふるえています。

——ねえ、ケンちゃん、まず、屋上にもどって、それから、ゆっくり、おはなししましょう。

月は、できるかぎり、おちついて、そういいましたが、胸のうちは、ケンちゃんの、だんだん感覚をうしなっていく手足のことをおもって、はりきけそうだったので。

すると、ケンちゃんが、右手を手すりから、はなしました。

——あぶない！

月は、せいっぱいの、光の声で、さげびました。

でも、ケンちゃんは、右手で、北斗七星の柄のしたのほうをゆびさし、いったのです。

——お月さん。あの、ヒヤクタクすい星は、きつと、この方角ですか？

すこし安心して、月が、こたえました。

——ええ、そうよ。八千年ぶりに、わたしたちの空に、かえってきてくれたのよ。

——ぼく、とつても待つていたのに、トーキョーの空は、どんより、にごつていて、はつきり、みえやしない。

月は、できるだけ、しずかな口調で、いいました。

——そのすい星なら、いま、わたしとケンちゃんとの距離の八倍ものながさの尾をひいて、太陽にむかっているのよ。

ケンちゃんが、宇宙でいちばんあたらしい、うまれたての双子星のような目を、キラリと、かがやかせました。

——ぼく、きつき、とつてもふしぎな声を、きいたんだ。まぢがいなく、あのすい星のほうからつたわつてくる、それはやさしい声を、きいたんだ。

月は、もう、じつとしていられないきもちを、いつしんにおさえて、いいました。

——ねえ、ケンちゃん。それは、きつと、ヒヤクタクすい星のはなつた、電磁波の声かもしれないわ。

でも、そのこととか、わたしの目にはいまもはつきりみえるすい星の、すばらしいすがたのことなどを、もつと、ゆつくりとおはなしましょう。

さあ、もういちど、手すりをこえて、屋上に、もどつて、いらつしゃい。

ケンちゃんが、右手を、手すりにもどして、いいました。

——ぼく、そうするよ。でも、ぼく、たしかに、あの、すい星の声を、きいたんだ。ああ、ぼく、あのすい星ののつて、

もう、いじめもなにもない、みんなが、ホタルのように発光しあうせかいに、いつてしまいたいなあ。

月が、ひつしにさげびました。

——さあ、ケンちゃん。しつかり、手すりをにぎつて、足を、注意ぶかく、屋上のへりから、もちあげるのよ。

——ありがとう、お月さん。ぼく、きつと、そうするよ。ケンちゃんが、ここえきつたりよう手ににぎりしめた手すりは、風の柱のように、もう、なんのてごたえも、ありませんでした。

——ケンちゃん！

月が、光の声をふりしぼってさげぶのと、ケンちゃんのように足が、屋上のへりから、すべりおちるのと、ほとんど同時でした。

——あつ！

とつさに、月は、そこいらじゅうの、あおじろいじぶんの光をかきあつめ、ゆりかごのかたちになると、その、やわらかい光の床に、おちてくるケンちゃんをうけとめ、あらんかぎりのちからをふりしぼって、空に、つりあげました。

——ケンちゃん。一万四千年たったら、また、このすい星のつて、地球にもどってくるのよ。

そういつて、月は、ケンちゃんのゆりかごを、ヒヤクタクすい星のダイヤモンドの宮殿に、そつとおろしてあげながら、ここから、いのつたのです。

——どうか、そのときには、おともだちみんなで、かわいそうなくモをたすけたケンちゃんに、よく、やったわ！”と
いつて、拍手してあげることができますように！

13 ピアノの休戦

三日月は、ほっそりとやさしい目をみひらいて、グロズヌイの

まちのほうを、みやりました。

ひまわりの花のように、あでやかに咲いていた、あのまちは、いつたい、どこにすがたをけしてしまったのでしょうか。

やけくずれた建物……道ばたになげすてられた戦車の残がい……ぶきみな穴をうがつ空爆のあと……

でも、三日月は、はげしい射ちあいでへしおられた雑木林の枝をすかして、いくつかのくろい影が、腹ばいのまま、じりじりと、落葉をしきつめた空地のほうへと移動するのを、みつめました。

にぎりしめた自動小銃の銃身に、かすかな月の光が、さざ波のように、はねおどりました。

チェチェンのゲリラ兵の一隊です。

つめたい風が吹きおこつて、はだかの梢を、さむざむと、ゆさぶりました。

ゲリラ兵の一人が、顔をあげて、ふるえおののく枝ごしに、月を、みました。

——グレーブ！

おどろきのあまり、三日月は、あやうく、声をあげそうになつたのです。

一五歳の誕生日の夜、へやの窓をあけ、三日月のかすかな光をたよりに、チャイコフスキーのピアノコンチェルトを、オーケス

トラの伴奏を頭におもいえがきながら、つかれたように弾いていた、ものやさしい少年！

音楽会で、まちのオーケストラとの共演をめざして、いつしうけんめいに総譜すこあをそらんじ、練習に余念のなかった、ピアノスト志望のグレーブ！

それが、どうして、ピアノの象牙の鍵盤からダイヤモンドのしずくのようにうつくしい音をよびさましていた、あのおおやかな指に、いまは、自動小銃のつめたい銃身をにぎりしめて、殺しあいの恐怖におののくゲリラ兵の一員として、戦場にいるのでしよう。

そして、三日月には、みえたのです……空地のむこうの、べつ林からは、もつと精能のいい自動小銃をにぎりしめたロシア兵の一隊が、腰をひくくかがめながら、こちらに、ちかづいてくるのを。

——グレーブ、気をつけて！

三日月は、そっと、こ声でいいました。

でも、そのことばは、かすかな銀いろの光となって、グレーブの、泥だらけの髪の毛にふりかかったただけだったのです。

そのとき、やっと、林のはずれにたどりついたグレーブは、あつと、声をあげました。

ピアノです。

落葉のしとねのうえに、一台の古ぼけたアプライトのピアノが、しつとりと、月の光にぬれて、たつていたのです。

だれがおきざりにしていったのでしょうか。

空地の、ちょうどまんなかのあたりに、そのピアノは、すこし黒光りをはなちながら、かすかな威厳をみせて、たつていたのです。

——ピアノだ！

おもわず、上半身をおこして、グレーブは、さけびました。

ああ、オトナたちによって、ちからずくで、ゲリラの一隊にひきずりこまれてから、ずっと、グレーブがねがいつづけたのは、たつたひとつ、ピアノを弾くことだったのです。

頭のなかは、チャイコフスキーのピアノ・コンチェルトの総譜すこあで、いっぱいでした。

どんなはげしい射ちあいのときも、うちくだかれたレンガの建物のかげにつつぶしながら、耳に鳴りひびいていたのは、けつして、銃弾のとびかう音ではなく、あの、すばらしい作曲家のうみだした、月の光のようにうつくしい旋律だったのです。

指は、自動小銃の、つめたい引き金にふれているときですら、ピアノの鍵盤にふれるかふれないかの感じですべていく、あの、

演奏のときの、蝶のようにかろやかな指づかいを舞っていたので
す。

——あぶない！ 伏せろ！

うしろで、ゲリラの隊長が、声にならない声を、風のようにき
しませて、ひっしに、命じました。

ロシア兵に発見されれば、たちまち、皆殺しにされてしまうか
もしれなかったのです。しかし、つらく、さむい戦場の、着のみ
着のまま、廃虚となった建物のかげで眠る夜も、グレーブには、
嵐のようにはげしくピアノを弾きまくる夢のひとつにすぎな
かったのです。

——ピアノだ！

絶叫して、グレーブは、たちあがりました。

そして、三日月は、たしかに、みたのです。

空地をはさんだ、むこうがわのロシア兵の一隊が、グレーブの
声に、さっと身を伏せ、自動小銃のねらいを、グレーブにむけて、
ぴたりとつけたのを。

——グレーブ！

三日月も、声にならない声で、ひっしにさげびましたが、それ
も、やっぱり、青水晶の光のさざ波となって、砲煙にすすけたグ
レーブの頬を、そっと、なでさするだけだったのです。

——グレーブ！

自動小銃の引き金に指をかけた、ゲリラの隊長が、もういちど、
しのび風のような声で、ひくく、するどく、いいました。

でも、銃をすて、りょう手をまえにさしのべ、ただ、ひたすら、
ピアノにむかって、ひとあし、ひとあし、夢遊病者のようにすす
みはじめたグレーブには、もう、だれの声も、きこえはしなかつ
たのです。

いいえ。

グレーブの耳には、はや、彼のピアノ・コンチエルトをききに
やってきた聴衆のざわめきが、コンサート・ホールいっぱい吹
きめぐるそよ風のように、甘く、そして、どこかすこし不安な感
じで、ひたひたとよせてきていたのです。

——グレーブ！

三日月は、もういちど、林をぬけようとするグレーブに、声
をかけましたが、それは、かすかな銀のしずくとなって、しっか
りつつむられたグレーブの両のまぶたをぬらすばかりだったので
す。

空地の枯葉に、グレーブの足がふれ、カサッと、鳴りました。
すっきり姿をあらわした少年にむかって、自動小銃の引き金を
ひこうとしたロシア兵たちは、いっしゅん、たじろぎました。

目をつむり、りよう手をまえにのべ、ピアノにむかつてすすんでいく、かぎざきだらけの服装の少年から、なにか、ふしぎな音が鳴りひびいてくるようにおもえて、ロシア兵のひとりひとりとは、じつと、こおりついたように、グレーブを、みつめました。

カサツ　カサツ

枯葉が鳴り、死の緊張は、薄明の大気を、いまにもひきさきささうです。

三日月は、いっしゅんつぶった目を、また、あおじろく、みひらきました。

一発の銃声が、すべてを終らしてしまうのを、三日月は、みるにしのびなかつたのです。

でも、ロシア兵の一隊は、しーんと、水をうったように、沈黙したままでした。

応射しようと、引き金にかけた、ゲリラ隊の指も、緊張のあまり、氷の鈴の音のように、ふるえました。

ついに、枯葉をふむ音がやみ、グレーブが、ピアノに、たどりつきました。

椅子をひきよせ、目をつむったまま、頭をたかくあげました。

幻のオーケストラへと、敬意をおくり、幻の指揮者に、合図をおくりました。

幻のタクトがひるがえり、幻のシンフォニーが、鳴りだしました。

第一楽章のはじまりです。

グレーブの指が、砲煙にけぶった鍵盤にふれ、ピアノが、うたいはじめました。

調律もされていない、野ざらしのピアノが……戦火をくぐって、かろうじて生きのびてきたピアノが、とうとう、すすり泣くような、むせび泣くような声で、うたいだしました。

しかし、三日月には、わかつたのです……古ぼけて、ろくに音のでない、うちすてられたピアノが、グレーブの指といっしょに、いや、グレーブの心とひとつになって、偉大な作曲家の魂のうつくしい声を、かなではじめたのを。

そして、ピアノの演奏につれて、しぜんに、自動小銃の引き金から指をはなしはじめたロシア兵のひとりひとりにも、たしかに、きこえてきたのです……ふるさとの森のざわめき、川のせせらぎ、教会の鐘、わが家の朝食の皿の音が。

そして、第二楽章にすすむころには、チエチェンのゲリラ隊のひとりひとりも、すっかり、自動小銃の引き金から指をはなし、ピアノのしらべにのって、平和なまちの街路樹の蔭をぬい、恋人とほほえみをかわし、年老いたおかあさんのしわだらけの手のぬ

くもりにふれていったのです。

そして、とうとう、三日月は、木の枝をすかして、みてしまったのです……銃をすててたちあがろうとしたわかいロシア兵の目にも、そして、彼をひっしにおしとどめた隊長の目にも、なみだがダイヤモンドのしずくのように、きらめくのを。

いいえ。

林の草むらにうち伏したロシア兵たちの目にも、反対側の林の草むらにうち伏したチェチェンのゲリラ兵たちの目にも、おなじなみだが、ダイヤモンドのしずくのように、きらめくのを、三日月は、みました。

ああ、いくさの場で、たがいにころしあわねばならないもの同志の、かなしみ。

三日月も、ついなみだぐみ、ひとりひとりの男たちの涙を、銀いろのうつくしい光にかえてやっただのです。

演奏がやみ、ピアノはうたいおえました。

どんなふかい海よりもつとふかい沈黙の底で、なおも目をつぶったままのグレーブが、顔だけを、三日月にむけました。

さざ波のような拍手が、ひくく、しずかに、ロシア兵の一隊からおこり、すぐ、それにこたえて、チェチェンのゲリラ隊も、そよ風のような拍手を、おくりました。

ついに、グレーブ少年の、うまれてはじめての、ピアノ協奏曲のコンサートは、成功したのです。

ああ、戦場と化した落葉の空地での、幻のオーケストラとの共演！

りょうがわの林からの拍手は、しだいにたかまり、エメラルドいろの海のうねりのようにつづき、やがて、ゆっくりと鳴りやみました。

そして、いまは、もう、ピアノの一部になってしまったかのように、じつとうごかない、地上のグレーブと、彼をいつくしみぶかいまなざしで見まもる、空の三日月を、そつこのこしたまま、ロシア兵の一隊と、チェチェンのゲリラ隊は、しずかにあとずさりして、それぞれの林のおくへと、すがたをけしていったのです。

14 ハコボ

おさない男の子のハコボよ、はるかカリブ海のほうから、きみのはたらくコーヒー農園のほうへとぼっていくわたしの陽ざしが、火のようにあつくもえているのは、ちいさいころから家族のくらしのたすけになってきたきみが、天のいただきにとどいきおいでのびていく森の木とおなじように、たくましいわかものに

そだつていつてほしい、という、わたしのねがいのあらわれなのです。

コーヒー園の仕事が、どんなにつらくとも、ぐちひとつこぼさず、くちびるをかみしめ、齒をくいしばってはたらく、おさない男の子のハコボよ、きみが、どんなに、いっしょにはたらいいたおにいさんと妹の死を、いたみかなしんでいるか、わたしには、よく、わかります。

わずかばかりのたべものと、おどろくほどやすい賃金で、いちにちじゅう、奴隷のようにはたらかされたのが、ふたりの死の原因だ、ということも、わたしは、よく、しっています。

学校にかようこともできず、コーヒー農園からコーヒー農園へと、川をよぎり、シエラ・マドレ山脈あたりの高原をわたっていく、季節労働者の、おさない男の子のハコボよ、きみが、たまさかの休日には、森のはずれや湖のほとりにぼつんとたっているカトリック教会をおとずれ、謙虚に頭をたれて、神にいのるすがつも、わたしは、教会の窓からのぞきみています。

そして、きみを教会にみちびいてくれた、きみの最愛の父と母が、つい、このあいだ、武器をもった男たちにとらえられ、にげおくれた二人の兄といっしょに、むごたらしい拷問のすえ、銃殺されてしまったのも、わたしは、ひとつのこらず、しっています。

熱心なカトリック教徒であった、きみのりよう親が、この土地に、ずっとずっとむかしから住んでいる、マヤ系の先住民族で、先祖からつたえられたことばや踊りや、自然とともに生きていくくらしぶりをまもりそだてていこうと、ひとびとによびかけたのが、銃殺の理由だった、ということも、わたしは、あまさず、しっています。

おお、いまは、ひとりぼっちになつて、コーヒー農園からコーヒー農園へと、わたりあるいていく、おさない男の子のハコボよ。でも、わたしは、たしかに、しっています、黙々と、汗にまみれてはたらく、きみのこころのなかには、いまでも、なお、教会でつちかつた、どんなひとをもわけへだてなく愛してくれる神への信頼が、きえることのない火のように、もえつづけているのを。そして、また、わたしは、ほんとうに、しっています、いつも、いのりをたやさない、きみのむねには、いつまでも、けつして、わすれることなく、先祖ののこしてくれたくらしの知恵が、いきつづけているのを。

ああ、つらい労働のひとつとき、額の汗をぬぐった、そのうごきのまま、ふと、空のわたしをみあげた、おさない男の子のハコボよ。さあ、いっしゅんの時をいかして、わたしと、踊りましよう。右の目と、左の目を、順番に、みひらいたりつむったりする、

まなぎしの踊りを、ふたりで、いっしょに、おどりましょう。

鼻を、ぴくんと、うごかしたりとめたりする、鼻の踊りを、ふたりで、いっしょに、おどりましょう。

くちびるを、いろいろなかたちに、まげたりのぼしたりして、ふたりで、いっしょに、くちびるの踊りを、おどりましょう。

いまでも、武器をもった男たちによって、村がほろぼされ、かぞえきれないほどの命がうばわれている、先住民の血を、からだじゅうに、あつくながしている、おさない男の子のハコボよ。

いつか、きつと、どんなくらしぶりのひとたちも、おたがいをみとめあつて、たのしく、ともに生きていく日が、やってくる。それを信じて、さあ、家族をうしない、家もない、おさない男の子のハコボよ、わたしといっしょに、しっかり、生きていきましよう。

わたしは、どんな武器をもった男たちも、けっして銃殺できない太陽……きみを、一生懸命、みまもり、はげまし、ときに、秘密の踊りを、いっしょに踊ることのできる、おとうさん……金いろの光のことばで、まいにちまいにち、一日もかかさず、きみにかたりかける、きみの、空のおとうさんなのですから、けっして未来への希望をうしないことのない、おさない男の子のハコボよ、もう、ひとりぼっちではない、おさない男の子のハコボよ、つら

い、くるしい時代を、わたしといっしょに、しっかり、生きぬいていきましょう。がんばり屋の、おさない男の子のハコボよ、やがて、かならず、おもしろい若木のように、たくましいわかものになっていくであろう、おさない男の子のハコボよ。

15 初出演

風もなく、むしむしする日には、つい、太陽も、うつすらと瞼をとじて、マーシー川のおもてに、とけたコインのような影をうかべたりするのでしたが、でも、うつすらとただよう、乳いろのモヤをすかして、ジョンの、とつてもはりのある、みがきたての銀貨のような声があると、ハッと、気をとりなおしました。

——調査のほうは、うまくいっているの？ ジョンくん。
すると、ジョンが、ほんのすこし、かげりのある声で、こたえたのです。

——なかなか、みんなの都合が、つかなくって、たいへんなんですよ。

一一歳のジョンは、小学校のなかまたちと、このあたりの遊び場の様子を、しらべてまわることにしたのでした。
なぜって、犬をつれたオトナたちが、遊び場を、犬のトイレが

わりにつかつたりしていたからです。

——じゃあ、君ひとりで？

——いいえ、お陽さま。でも、スージーちゃんときたら、犬のウンチについてしらべるなど、とつてもきたならしい、といつて、鼻をつまみ、むこうのほうに、はしつていつちゃっ
たんです。

——ほかのお友だちは？

——ジャックくんなんか、おとうさんに、こつぴどく、しかられちゃいました。鼻たれ小僧のくせに、遊び場の環境調査など、なまいきだ！”つて、なぐられそうになったんです。

——で、ジョンくん、君は？

ジョンが、ぴくんと、肩をすくめました。

——ぼくのおじいちゃんときたら、ジョン、このまちを、どうして、リバプールというか、そのわけをはなしてみろ”つて
いうんです。

ぼくがだまっていると、おじいちゃんは、こういうんです。

”よく、きけよ、ジョン。リバプールとは、にごった水たまり、という意味なんだ。

ペナイン山脈からながれだした水が、ランカシャーやマー
ジーサイドの工業地帯をつらぬくマージー川となって、こ

のあたりの大きなエスチュアリー（三角江）にどろんとた
まる。

その巨大な水たまりの岸にあるこのまちは、だから、いつ
だって、にごった水のおいにつつまれていて、けつして、
それからのがれられはしない。

なにをしても、無駄というものさ。”

——で、ジョンくん、君は？

——ぼく、やります。マージー川は、もともと、古い英語では、
”境界の川”という意味だそうですけれど、ぼくにとつて、
それは、”よごれたまち”と”きれいなまち”の境界でもあ
るんです。

——境界？

——もつといえば、ぼくにとつて、マージー川は、”よごれたま
ちをほつたらかしているぼく”と、”きれいなまちをつくり
あげていくぼく”との、境界の川ともいえます。

ぼく、きつと、”よごれたまち”の境界をふみこえて、”き
れいなまち”のほうへと、あるいていつてみせます。

太陽が、この、けなげな小学生の、金いろの髪に、光のキスを
してやりますと、金いろの光があたりにちりこぼれて、リバプー
ルのまちはの一角を、あかるく、てらしました。

じぶんの住んでいるところを、どぶのおいやネズミの死がいで、きたならしいものにしてしまうのも、それとは逆に、デイズイの花が咲きみだれ、ナラの木の葉むらがすろにうたう、とつてもうつくしいところにするのも、みんな、住むひとのもんだいなのです。

そうおもうと、太陽は、ジョンに、ここから、がんばってねと、光の声援を、おくってあげたのです。

二、三日して、太陽は、ジョンが、スージーやジャックといっしょに、遊び場を中心とした、そのあたりの地図を、けんめいにつくっているのをみました。

そつと、のぞいてみますと、道や家や橋といっしょに、犬の糞とか、猫の死がいとか、ゴミの山とかの文字が、おどつています。

——がんばってね！

アイリツシユ海のほうから吹いてくる潮風になぶられながらも、太陽は、せいっぱいの光の声援を、こどもたちに、送りました。

きつと、ちいさなこどもたちが、なにかをはじめようとして、つどいより、グループをつくるのは、たいへんなことだったのに、ちがいません。

でも、彼らは、ねばりづよく、遊び場一帯の地図をつくり、環境のありさまを、しらべ、きちんと、記入したのです。

——さあ、つぎは、図書館だ。

ジョンが、汗ぐつしよりの額にふりかかった金いろの髪を、小魚のような指でかきあげました。

——犬の糞と、寄生虫の関係をしらべるのね。

スージーが、頬から、うつくしい微笑の花びらをふりこぼしました。

——みんなで、手わけをすれば、きつと、はいよ。

ぼく、百科事典と、とりくむ。

ジャックが、もう、はずむマリのように、かけだしました。

そして、つぎの週、太陽は、こどもたちが、遊び場で、しきりに、劇の練習をしているのを発見したのです。

太陽は、そつと、こどもらの手にした台本を、のぞきこみました。

「犬の糞のないまち」

タイトルが、げんきのいい鱒のように、おどつています。

配役のところをみますと、ひとつだけのぞいて、みんな、うまっています。

「遊び場を、犬のトイレがわりにするオトナ」

ジョンが、また、金髪をかきあげて、空をみあげ、太陽に、いました。

——ねえ、お陽さま。この役をひきうけてくれるオトナのひと、どこかにいないかしら？

スージーが、バラいろの頬つぺたに、人さし指をぶつんとあてがって、いいました。

——わたしのおとうさんも、ジョンのおじさんだつて、わらいこけながら、手を大きくよこにふつて、それやあ、おれたちじゃ、無理というもんさぐつていうの。

ジャックが、空をあおぎ、肩をすくめて、太陽に、いいました。
——この役がうまらないと、ああ、ほくたち、小学校やまちの広場で、この劇を上演できなくなって、リバプールは、いつまでも、にこつた水たまりのまま、のこされてしまう……

こうなれば、もう、たったひとつの方法しか、ありません。

太陽は、にがわらいついて、いいました。

——わかつたよ、みんな。わたしが、その役をひきうければ、いいんだろう。

わつと、こどもたちが、かん声をあげ、花火のように、おどりはあがりました。

——お陽さま、ありがとう！

みんなの声が、噴水のように、空へと、ほとぼりました。

——でも、たった一つ、条件がある。

太陽がいますと、すぐに、くりくり目のジョンが、こたえたのです。

——もちろん、お陽さま。日中の、陽あたりのいいところで上演しなくっちゃあいけないっていうのでしょう。

なんて、かしこいこどもたちでしょう。

さつそく、こどもたちのつくった台本に目をおして、太陽は、遊び場を、犬のトイレがわりにするオトナのすがたで、遊び場に、おりたちました。

太陽だつて、うまれてはじめての、しかも、あんまり感心しないオトナの役柄を演じなければならぬのです。

——だけど、この、がんばり屋のこどもたちのためだ。ひと肌ぬぐのも、けつして、わるいことじゃあない。

太陽は、そう、じぶんにいきかせると、えっへん、と、えぱりくさつた男のすがたで、こどもたちといっしょに、劇の練習をはじめました。

きつと、上演の日には、リバプールのまちの、小学生も、先生も、近所のオトナたちも、たくさん、みにきてくれることですよ。

う。

そして、犬の糞についているトキソカラ・カニスという寄生虫のおそろしさを、たつぷりと、理解することでしょう。

そして、また、ジョンたちのつくった地図やパンフレットのなかみをして、びっくりすることでしょう。

さらに、ジョンたちの発明した、犬の糞あつめのためのシャベルをみて、ふーんと、ひどく感心することでしょう。

そして、そして、遊び場をきれいにするために、こどもたちが、どんなに、いっしょうけんめいに、仲間にはなし、先生や家のひとに説明し、とうとう議会にまで電話したか、をして、感動し、おもわず、いっせいに、拍手してしまうにちがいありません。

なぜって、この劇には、なんびやくおく年も地上をてらしつづけてきた太陽が、なんと、遊び場を、犬のトイレがわりにするオトナ」という役で、初出演することになっているのですから……

16 靴をはいた影ぼうし

アメリカの主都、ワシントンD・C・の上空にさしかかった太陽は、連邦議会議事堂まえの池のまわりにならべられた、むすうの、さまざまなかたちのちいさな小舟のようなものが、目にとま

りました。

もえさかるプラチナいろの目をみひらいた太陽は、それが、いろいろなサイズとかたちの、スニーカーやブーツやサンダルとわかつて、たいへんおどろきました。

それは、アメリカじゅうの、いたるまちや道で、ピストルやライフルの銃弾によつて、この一年間にいのちをおとしたひとびとの、はいていた靴だったのです。

それにしても、なんとという、たくさんの靴！

なん万足もの、銃弾の犠牲になったひとびとの靴が、のこされた家族や友だちやこころあるひとたちの手であつめられ、ならべられたのでした。

——もう、にとと、このような、かなしいできごとがおこりま

せんように！

家の庭であそんでいただけに、とつぜんのギャングどうしの射ちあいにまきこまれ、頭にマシン・ガンの銃弾を射ちこまれた少女の、まだ、足のぬくもりがつたわってくるような皮靴のまえで、おかあさんが、いのつておりました。

友人の家をたずね、あやまってピストルで心臓を射ちぬかれた少年のスニーカーに手をおいたおとうさんも、なみだながらに、いのつたのです。

——どうか、なにもしないものの胸を射ちぬく銃が、この地上から、すがたをけしめますように！

その声は、どんなに、太陽のところに、ふかく、つきささったことでしょうか。

もう、はきてのいない、何万足^{ぞく}もの靴！

そして、太陽は、おもいおこしたのでした、ほんとうにちいさいサンダルや布靴をはいたまま、銃弾に射たれて死んだ、アメリカじゅうの、かざしれないこどもたちのことを。

おつかいの帰り道の歩道で、小犬とあそんでいた公園で、キャンプをしゃぶっていた居間で、そして、たのしい夢をみていたベッドで、ほとんど、なんの理由もなしに、とつぜん射ちころされた、アメリカじゅうの、おびただしいこどもたちのことを。

——なんて、いたましい！

太陽は、池のまわりにひざまづく、アメリカじゅうの、いたるまちからやってきたおとうさんやおかあさんといっしょに、いのりました。

はきてのいない靴のまえにひれふす、おじいちゃんやおねえちゃんといっしょに、ねがいました。

——ああ、いちにちもはやく、銃のない世界が、実現しますように！

そして、太陽は、そのねがいを、ワシントン^{ワシントン}のまちじゅうのひとに、ひろめなければ、とおもいました。

いや、アメリカぜんたいに、いや、いや、銃をつくり、銃を売り、銃をもちあるき、銃を人にむけて射つ、世界じゅうの、すべてのひとに、ひろげたい、と、おもいました。

そして、ついに、太陽は、こころをきめたのです。

——影ぼうしだ！

何万足^{ぞく}もの靴をはいていた、こどもたちをもふくむ、何万人もの、銃でいのちをうしなつたひとびとの、いきているあいだ、地上にしろした、くろい影ぼうしは、いつくしみぶかい太陽のおもいでのかなかに、しっかりと、たいせつに、しまいこまれておりました。

——影ぼうしに、靴をはかせよう！

太陽は、こころのなかの、おもいで^{おもいで}の部屋から、ひとりひとりの影ぼうしをよびますと、いきているときにはいていた靴のところにつれていき、影ぼうしのまっくろい足に、そつと、はかせました。

——さあ、もう、銃によるかなしみの、にどとおこらない世界をねがって、行進しよう！

おさない少女の影ぼうしが、赤い靴をはいて、あるきだしまし

た。

いじらしい少年の影ぼうしが、まっしろい運動靴をはいて、それにつづきました。

こうして、靴をはきおえた影ぼうしが、つぎつぎとあゆみはじめ、ワシントンのまちを、行進していったのです。

——銃によるかなしみのない世界を！

こうして、何万もの影ぼうしたちは、くちぐちに、声にはならない声で、うったえながら、行進していったのです。

いつか、きつと、おとずれるであろう、銃によるかなしみのない世界にむかって、どこまでも、どこまでも、行進していったのです。

17 秘密の贈りもの

夜の大气をつんざいて、はげしい機銃の発射音が、鳴りひびきました。

だれが、だれを、射ちころそうとして、引金をひいたのでしようか。

なんのかかわりもない、いたいけなこどもたちが、また、犠牲になるのでしょうか。

あまりのいたまじさに、月は、むねをひきさかれるようなおもいで、ミリヤツカ川の水面に、はらはらと、銀のしずくを、ふりこぼしました。

しかし、月は、砲弾がうちくだかれた建物の、かげからかげへと、月の光をたよりにつたいはしつていく、男の子と女の子のすがたを発見して、とても、おどろきました。

こんな夜ふけに、いったい、どこへ？

でも、銃弾の的になることもなく、ふたりが、くずれた建物の入口にすいこまれていくのを見て、月は、ほっと、安堵のむねをなでおろしました。

弾痕のこの壁には、こどものためのラジオ局という看板が、ちいさく、よみとれました。

そうだったのです。

内戦がはじまり、学校が破壊されたり、外出もできなくなったこどもたちのために、こころやさしいひとたちがはじめた、ちいさなラジオ局だったのです。

こどもたちも、くわわって、住んでいるあたりのできごとなどを、番組に、いかしていたのです。

なぜか、ほほえみが、顔に、うつくしい花のように咲いていくのを感じて、月は、まちはずれの、砲撃をかるうじてまぬがれた

建物の、とある部屋の窓辺に、まなざしをうつしました。

ラジオをかこんで、母親とふたりのこどもたちが、だきあうようにして、ながれでる音楽の、うつくしいしらべに、耳をかたむけておりました。

目のまえで、銃をもった男たちに、父親を射ちころされた、その、おそろしい光景に、いつもつきまとわれている三人にとつて、ラジオからながれでることはや音楽は、なにもものにもかえがたい、すくいだったのです。

修 原 子

標高五五〇メートルの高原の盆地の、夜は、くらく、ひえびえとして、火の気のない部屋は、たえがたいさむさびでしたが、ラジオの音は、あかるい光と、あたたかい熱をもたらす、夜の太陽だったのです。

——太陽のおとうさんの、いつくしみぶかいおもいが、しんせつなひとたちのところにやどつて、ラジオ放送を、つづけているんだわ。

そうおもうと、とてもうれしくなつて、月は、まちの片すみの、ラジオ局のあたりに、そつて、目を、むけました。

そして、まちがいなく、月のおかあさんは、みたのです。いろいろな不自由に、じつとたえながら、なぐさめをもとめているたくさんのこどもたちへのラジオ放送をつづける、勇氣ある

ひとたちの、声が、音楽が、夜の大気を、すきとおつた蝶のようになうつくしい電波となつて、ラジオ局からとびたち、まちじゅうのラジオにむかつて、まるで、花の中心の蜜へとまいおりるかのように、ひらひらとわたつていくのを。

なんて、すばらしい光景でしょう。

ひとの、こころからこころへと、光の羽根をひらいてまいどぶ、電波の蝶！

月は、感動しました。

どんなに、銃をにぎつたひとびとが、むごたらしいころしあいをくりひろげても、やっぱり、この地上には、それをかなしみ、いためつけられたこどもたちのこのろの傷をいやそうとする、ほんとうの勇氣をもつたひとびとが、いたのです。

おのれをかえりみず、ひたすら、へいわのために、いのちがけではたらく、とおといひとびとが、いたのです。

やっぱり、のぞみをすてては、いけないんだわ。

月が、そう、ひとりつぶやいたときでした。

ふたたび、夜のしじまをひきさいて、砲声が、とどろいたので、す。

パツと、電気が、きえました。

停電です。

送電施設に、砲弾が、命中したのです。

いっしゅん、ラジオ局の電波が、とまりました。

まちじゅうの、ラジオの花々へと、うつくしく舞いとんでいた電波の蝶が、いっせいに姿をけし、まちは、おもくるしい沈黙の闇に、しずみました。

——いまだわ、わたしの出番は！

月のおかあさんは、そう、ひとりごとすると、目にもとまらないはやさで、ぜんしんのちからをふりしほり、ありったけの、銀いろの月の光を、こわれた送電施設の、送電装置の入口に、ながしこんだのです。

パツと、まちじゅうに、すこしあおじろい、銀いろの電灯が、ともりました。

ふたたび、放送を開始した、こどものためのラジオ局からは、また、すぎとおった電波の蝶が、すこしあおじろい銀いろの羽根をひらいて、とびたちました。

——あつ、ラジオが！

たのしい童話の放送に耳をかたむけていた、まちじゅうのこどもたちが、目を、かがやかせました。

すこし、あおじろい、銀いろの声で、放送が、再開されたのです。

——よかったねえ、停電が、すぐ、なおって！

母親が、ラジオのまえのこどもの肩を、やさしく、なでました。やがて、ほんとうに、送電施設が修理され、すべては、もとの、ほのあたたかい白熱灯の光と電波とラジオの音にもどりました。だれひとり、停電の闇からこどもたちをすくった、すこしあをじろい銀いろの光が、だれからの贈りものであったのか、知りませんでした。

そして、月のおかあさんも、ただ、だまって、かすかなほえみをうかべたまま、西の空に、ゆつくりと、しずんでいったのです。

18 ノルマンディーの虹

イギリス海峡から吹きよせる、ひやりとした風が、ピエールの、幼い髪を、やさしくなぶりました。

夏の太陽が、金いろの指を、リング園の木々をあやすように、そつと、ゆりうごかしましたが、その、かすかな音にだつて、もう、さとくめぎめて、ピエールは、昼寝のベッドからとびおり、あけはなれた窓から、空を、みあげたのです。

——おや、ピエールちゃん、もう目がさめたの？

太陽が、にこにこわらいながら、はなしかけました。

——うん。ほく、とつても、こわい夢、みちゃった。

——どんな？

——おかあさんが、ほくをすてて、どこかに、いつちゃったんだ。
だ。

ほく、おかあさん、と、いつしょうけんめいにさげびながら、あとをおいかけたんだけれど……

りょうの大きな目には、はや、いつばい、なみだをうかべて、ピエールが、だまりこくりました。

——おやおや、もう、四歳にもなったんだから、ピエールちゃん、おしまいまで、ちゃんと、おはなししなくっちゃあ……

太陽が、いつそう、やさしく、なだめすかすように、ことばをかけたが、ピエールは、小鳥の羽根のような肩をふるわせ、泣きじゃくるばかりだったのです。

そのときです。

どこからわきでたのか、どすぐろい雨雲が、セーヌ湾のほうから、低ノルマンディーのあたりに、くろい影をひきずって、吹きよせたのです。

つめたい雨が、はげしさをまし、窓もとぎされて、ピエールのすがたが、部屋のおくにきえました。

しきりに、フランスの北東のあたりに、夏の雨をシャワーのようにふりこぼす雨雲の、ずっとうえのほうの空で、やつぱり、太陽は、ピエールのことが、とてもきがかりでしかたなかったのです。

——あと二週間、夏のこども学校で、ピエールちゃん、だいじょうぶかなあ。

そうだったのです。

ノルマンディーの、カンというまちのちかくにすむピエールは、夏のあいだ、一カ月だけひらかれる、近郊の「こどもの学校」にやってきていたのです。

とてもしんせつでやさしい先生たちに、こころこめてお世話いただく日々でしたが、おわるまでは、けっして、おとうさんやおかあさんと、会うことが、できなかつたのです。

——野原に、おおしくたつ、一本のカシの木のように、たくましく、ひとりだちするのには、とつても大切な一カ月なんだけれど、あんなに泣きじゃくったりして、ピエールちゃん、いったい、どうしたというのだろう。

あれこれ、おもいながら、太陽は、コタンタン半島のほうへと、ゆつくり、空をわたっていききました。

やがて、雲がきれ、いちはやく、「夏のこども学校」のほうに、

まばゆい夏のまなざしをむけた太陽は、ふたたび窓べにすがたをあらわしたピエールに、さっそく、声をかけたのです。

— そういえば、ピエールちゃん、ゆうべも、お寝しよう、したんでしよう？

— ああ、ほく、二晩つづけて、しくじったりして、ほんとうに、どうかしている。

— なにか、とつても、しんばいなこと、あるんじゃないの？
また、目に、いっぱい、なみだをたたえながら、でも、こんどは、泣きじゃくったりはせず、ちいさな声で、ピエールは、ささやきました。

— お陽さま、きいてくれる？

— もちろん。でも、つぎの雨雲が、海風といっしょにやってこないうちに、おはなししてね。

— ええ。

じつはねえ、お陽さま。この「こどもの学校」では、なんにちかごとに、ほくたちの下着を、おかあさんが、とりにきてくれるのです。

そして、洗濯したての、ぷーんといういいにおいのする下着を、おいていって、くれるのです。

もちろん、禁じられてはいるのですが、その下着のポ

ケットなどに、おかあさんが、そつと、おやつやお手紙をいれてくれるのが、ほくたちには、とつても、たのしい秘密なのです。

ところが、一週間まえから、おかあさんが、下着をとりかえに、きてくれなくなつたのです。

とうとう、ことばにつまつて、ピエールは、ひくひくと、肩をふるわせ、泣きだしました。

— おとうさんは？

太陽が、たずねますと、やつと泣きやんだピエールが、しゃくりあげるようにして、こたえたのです。

— おとうさんは、一日じゅう、リンゴ酒のシードルを蒸溜してつくつた、アルコール分のつよいカルバドス酒をのんで、よつばらっています。

アルコール中毒なんです。

しよつちゅう、ほくとおかあさんをぶつたりします。

— それで、おかあさんは？

— いつも、おとうさんと、わかれたがっています。

— 離婚？

— それに、おかあさん、べつの男のひとと、とつても仲よしなんです。

いちどなど、ぼくの目のまえで、だきあったりしたんです。でも、ぼく、おかあさんなしには、いられない。

ああ、おかあさん、ぼくをすてて、どこかに、いつてしまったり、しないで！

はげしく、泣きじゃくるピエールのうえに、またも、うすぐらい雨雲の影が、しのびよりました。

雨です。

——ピエールちゃん、どんなつらいことがあっても、昼は、太陽のわたしが、いつも、みまもっています。

どんなかなしい夜も、お月さまが、ピエールちゃんに、じつと、やさしいまなざしを、そそいでいます。

野原に、おおしくたつ、カシの木のように、くじけず、生きていくのですよ。

そういつて、太陽は、雨のふりはじめた、ノルマンディの雲のあなたに、すがたをけしていきましたが、いいのこしていった光のことばは、いつまでも、ピエールの耳に、のこりました。

いつか、雨が晴れ、空にあらわれた虹のように、そのことばは、ずっと、ピエールのところを、なないろに、うつくしく、わたっていったのです。

19 夜空のプレイランド

どこまでだって、おわりのない大海原のようにひろがっていくアビシニア高原を、あおじろい光の鏡にうつしだして、一四夜の月は、空のいただきにさしかかったのです。

アフリカ大地溝帯がくりだした巨大な高原のテーブルは、銀いろの網の目のようにひろがるナイル川の支流によって、ずたずたに切りぎざまれ、かずしれない峡谷のあいだを、青ナイル川やオーモ川が、とぎすまされた縫い針のように、すべっていくのでした。

ぎざぎざの缺で切りとられたプラチナの皿のように光る、ズワイ湖やタナ湖……

大自然のつくりだした聖堂のようにそそりたつ、ビルハン山やラスダシャン山……

でも、満月のまんまるにもうすこしの一四夜の月は、アビシニア高原のいたるまちや村で、やっと、つらいねむりにはいりはじめた、たくさんのこどもたちの、つかれはてた寝顔に、そつと、ふかい青水晶いろのまなざしを、ふりそそぎました。

標高二四〇〇メートルもの高原にひろがる、アジス・アベバのまち……

ちかくのイントト山のいただきからは、ユーカリの木のしげみをすかして、たちならぶビルの、どっしりと重い影がながめられ、たしかに、遠目には、この大きな高原のまちは、"アジス・アベバ(あたらしい花)"とよばれるのにふさわしいすがたにうつるのでした。

しかし、月は、まざまざと、みたのです。

高原の夜の、ひえきった大気にくるまれて、手足をエビのようになぢめてねむる、一〇万人以上もの、まちかどでくらす子どもたちを。

月は、まちはずれのマルカート(市場)のちかくのものかげで、月の光にぬれた魚のようによこたわる、ハナ少年をみました。

うちつづく内戦で、家族が皆殺しにされ、命からがらふるさとをぬけだして、このまちにやってきたハナ君。

まちの交差点で、赤信号でとまった自動車の窓をたたき、よそのくからきた人々に、お金をねだるのが仕事の、ハナ少年。

でも、いまは、なんていたいけな寝顔でしょう。

それから、月は、大きなゴミすて場ちかくの広場で、やつれはてたおかあさんによりそってねむる、女の子のゼナシユちゃんを、みました。

ひどい干ばつのため、たべものがなくなり、一家そろってアジ

ス・アベバにでてきたのでしたが、仕事にありつけず、タボとよばれるパンを買う一ブルのお金もなしに、おとうさんもおにいちゃんも妹も飢えて死に、ふたりだけが、いきのこったのです。いまでは、駐車場や道ばたにとまった車にちかより、からだの不自由なゼナシユちゃんをみせて、おかあさんがお金をめぐんでもらうまい日なのです。

——ああ、なんとということ！

月は、おもわず、もうずつと洗ったことのない、ほこりだらけの鳥の巣のような、ゼナシユちゃんのくろい髪に、そつとキスしてやりました。

こうして、月は、エチオピア教会の大伽藍のちかくのへいの下や、まちじゅうのいたるものかげでねむる、かぞえきれないほどのこどもたちを、みたのです。

夜のさむさをしのぐ毛布もなく、口にしたものといえはよごれきったどぶ川の水だけの、むすうのこどもたちの、飢えてごごえた寝すがたを、みたのです。

——ああ、一刻もはやく、この子らに、あたたかい家と、やさしい家族と、ジャガイモやエンドウマメやレンズマメを煮こんだスープのシヨルバを！

月は、いのりました。

でも、それは、地上でくらす、ゆたかな人々のなすべきことなのでした。

ふしあわせな子どもたちをすくうのは、地球上の、すべての、しあわせにくらす人々の、役割とすべきことなのです。

——ゆるしてね、ゼナシュちゃん。

ごめんなさいね、ハナ君。

そうささやきながら、月は、アジス・アベバのまちかどじゅうの、なん十万人もの子どもたちの、かさかさのおでこに、やつれたほっぺに、かわききった唇に、そして、ひえきった耳たぶに、わけへだてなくキスしてまわりました。

そして、ひえきったアスファルトの歩道の片すみでまどろむワンドウ少年の、ひくひくふるえる臉をすかして、月は、まちがいない、よみとつたのです……一人一人の子どもたちの、ねむりのスクリーンには、もう、どんな夢もうつらず、まっしろい砂漠のように、さびしく、さむざむとしているのを。

——そうだ。

と、月は、おもいました。

——夢なら……せめて、夢をみせてあげることなら。

と、月は、つぶやきました。

——アジス・アベバのまちじゅうの、道ばたでねむる子どもた

ちを、夢のプレイランドに招待してあげよう。

と、月は、ここをきめて、いいました。

くる日もくる日も、たべものをさがすことだけにおわれ、いちども、こどもらしく遊びたのしむことのない、ゼナシュちゃんやハナ君、ワンドウ君たちを、つかのまの、夢のなかの、プレイランドに招き、おもいつきりあそんでもらおう！

一四夜の月は、北東アフリカのうえにひろがる、はてしない夜空を、みわたしました。

そして、南の空の、金や銀やルビーやサファイヤやダイヤモンドなどの、むすうの宝石のように光りかがやく星たちに、こういって、おねがいましたのです。

——星さん、星さん。今夜、アジス・アベバのまちでは、あなたたちの数とおなじくらいいたくさんの子どもたちが、つらくてくらい眠りの底にしませんでいます。

どうか、おねがいですから、わたしといっしょに、夢のプレイランドをつくって、子どもたちを招くのに、お力をおかしください。

いつも、夜のさむさで肺炎になり、命をおとす子どもたちにここをいためていた南の空の星たちは、だまって、うなずきました。

もちろん、雨がふっても逃げ場のないこどもたちの身の上をとでも心配していた、北の空の星たちも、いつせいに、とりどりの光の目をしばたかせて、うなずいたのです。

一四夜の月が、さつと、あおじろい光のタクトをふると、もう、空いっぱい星が、おもいおもいに、光の尾をひきずってうごきだし、たちまち、月のおもいえがいた設計図どおりのプレイランドが、エチオピアの空に、すがたをあらわしました。

それは、まず、太陽のとおり道となっている黄道こうどうにそって、ぼつと金いろにもえる宇宙塵のアーチを、遊覧車でわたっていくコースからはじまるのでした。

てんびん座の駅で、一四夜の月からわたされた、月の光の一しずくを、手のひらから、改札口の皿にぼとりとおとすだけで、もう、だれでも、エチオピア夜空プレイランドの遊覧車にのって、スタートです。

おとめ座のおねえさんが、手にもったスピカ（麦の穂）の星を、真珠のようにうつくしくかがやかしながら、歓迎のことばをのべます。

——アジス・アベバのこどものみなさん、ようこそ。

わたしも、はじめは、地上にくらしていたのですけれど、

あまりにも、人々が、さまざまな武器をもちいていくさに

熱中するようになったので、とうとう、がまんできずに、うまれ故郷の空にかえってきてしまったのです。

きょうは、たつぷりと、このプレイランドで、あそんでいてくださいね。

そんなわけで、すっかり準備がととのったのをみとどけると、一四夜の月は、大きなゴミすて場ちかくの広場でねむるゼナシユちゃんの、ぎつしりにぎりしめた手の、指と指のあいだから、ぼとりと、月の光の一しずくをふりこぼし、そつと耳もとにささやいたのです。

——さあ、エチオピア夜空プレイランドが、はじまりますよ。それから、月は、まちはずれのマルカート（市場）のちかくのものかげでねむるハナ君や、ひえきったアスファルトの歩道でまどろむワンドウ少年、そして、いたるまちかどやものかげによこたわる、アジス・アベバ中のむすうのこどもたちの、かたくにぎりしめられた手の、指と指のすきまに、ぼとりと、月の光の一しずくの招待券をふりこぼしては、耳もとにささやいてまわりました。

——もうすぐ、エチオピア夜空プレイランドのはじまりですよ。

こうして、ねむりの世界に、とつぜんひらかれた、夢の小道を

とおつて、ハナ君も、ゼナシユちゃんも、ワンドウ君も、そして、アジス・アベバのまちかどでねむるかすしれないこどもたちが、てんびん座の駅におしかけ、手のひらから、月の光の一しずくを、改札口の皿にぼとりとおとしては、エチオピア夜空プレイランドの遊覧車に乗りこんだのです。

ああ、おとめ座のおねえさんの歓迎のことばに送られて、ぼつと金いろにもえる宇宙塵のアーチを、黄道こうどうにそつてのぼつていくことの、なんという、おもしろさ！

そして、右手には、はやくも、うねうねと、巨大な水いろの蛇が、夜空の闇にまきついていのがみえました。

うみへび座です。

胸のあたりの、赤い光をついたりけしたりの、コルヒドレという星が、うみへび座に血を送りだしている心臓なのでしたが、なぜか、アラビア語ではアルファード（ひとりぼっちなもの）とよばれて、さびしく、またたいは、つぎのようものがたりしているのです。

——わたしは、うみへびというよりは、水へびなのです。むかしは、地上のレルナイアという沼にすみ、九つの首を自由にうごかしては、森や沼や川をまもっていた、ヒーラという、水へびだったのです。ところが、人間が、森を切りた

おし、沼をうずめ、川をよごして、わたしを、空においあげてしまったのです。

それをきいたハナ君は、つい、がまんできずに、たずねてしまいました。

——でも、いつか、また、きっと、地上にもどる日がくるのでしょうか。

すると、こんどは、うみへび座ぜんたいの星々が、いつせいに、身をふるわせて、いったのです。

——ええ。地球にすむ人々が、争いをやめ、森や沼や川を大切にしようになったら、いつだって、もとの、水のすみかにもどりますよ。

すると、うみへび座のせなかにとまっていたからす座が、帆かけ舟のかたちに羽根をひらいて、うたいました。

——わたしだって、人間が、わたしのことを、うそつきの悪ものにしたりあげてしまったので、つい、いやげがさし、空のぼつてしまいました。人間が、鳥やけものをなぶりものにすることをやめたら、すぐにでも、地上に、まいもどつてみせますよ。

すると、からす座のすぐちかくにういていたコツプ座も、うなずいて、いいました。

——そうですとも。わたしだって、人間たちが、身のまわりの一つ一つの皿やスプーンやコップにも、いのちがあり、ころがあるかわかったら、からす座さんといっしょに、地上にかえりますよ。

それから、コップ座は、かなしみにすこしゆがんだからだいつばいに、うみへび座のくちからこぼれおちる、すみきった水をくむと、エチオピア夜空ブレイランドの遊覧車の手すりにぎっしりしがみついたままの、ゼナシユちゃんやみんなの口に、とどけてくれたのです。

——さあ、口いっぱい、のどいっぱい、おなかいっぱい、おのみなさいね。

なんて、つめたく、きれいな水！
うまれおちてから、ずっと、きょうまで、いちどだつてのんだことのない、なんて、おいしい水！

いつも、からからにかわきつばなしののどがいやされて、ワンドウ君もみんなも、すっかりげんきづいて、しし座の流星群の、うつくしい花火のなかに、はいつていきました。

かに座がくりひろげる、プレセペ散開星団の、いくつもの星がきらめきあう、花火のしづくに、ぬれていきました。

そして、夢の夜空を旅する、アジス・アベバじゅうの宿なしの

こどもたちは、しし座の胸の中心に光りがやくレグルス（王者の星）の、森や草原を守っていたネメアの谷のライオンが、都市をつくりだそうとする人間によって化物あつかいされ、天においあげられた、という物語とか、かに座の星々の、ヒドラを助けたカニが、自然を破壊しようとする人間によってふみつぶされ、夜空にすてられた、というお話しをきいて、おもわず、つぶやいたのです。

——ああ、いまだつて、月と太陽のこどもである、世界じゅうのわたしたちが、ヒドラやカラスやコップやライオンやカニといっしょに、武器をもつて争いあうおとなたちによって、地上から、夜空へと、おいはられようとしている……
そのとき、黄道にそつて、金いろの星と銀いろの星が、うつくしい門のように、光りかがやきました。

ふたご座の、兄弟星です。
おにいさん星のポルクスは、ボクシングが上手で、おとうと星のカストールは、馬がとくいでしたが、いくさがおこり、カストールが戦死してしまったので、かなしみのあまり、ポルクスも、また、空にのぼつて、もう、いくさも戦死もない夜空で、なかよく、くらしていたのです。

——もう、にどと、いくさのため、家族や兄弟が、ひきさかれ

たりしないように、みんなで、いのりましょう。

ポルクスが、みんなに、よびかけましたので、内戦で家族を皆殺しにされたハナ君やみんなは、遊覧車からおりて、ひざまづき、手を胸にくんで、地上から、いくさの殺しあいがなくなりますように、と、いのつたのです。

——さあ、ここからなら、銀河が、もうすぐです。みんなで、

水遊びしましょう。

カストールがいいおわるや、うまれて一度だって水遊びなどしたことのないゼナシユちゃんやみんなは、ワアと、かん声をあげて、銀河の水ぎわにかけより、むすうの宝石のかけらをといたような光の川にはいつて、てんでに、水のかけあいつこをしたりしてあそびましたが、ふしぎにも、どこまでいったって、服がびしょぬれにもならず、ふかみにもぐったって、けっして、おぼれたりもしなかったのです。

やがて、空いっぱい、うつくしいハーブのしらべが、ひびきわたりました。

それは、銀河のすぐの岸べから、まるで、はりつめられた光の糸がすすり泣くように、かなしくも、ここちよい音楽だったのです。

ワンドウ君やみんなは、銀河の浅瀬にたちつくしてしまいました。

た。

それは、地上で、たぐさんのいきものを殺した狩人のオリオンが、手にかけてイヌやオオカミやクマやヤマネコなどの魂をとむらうため、いっしょに天にのぼって、もう、けっして、やたらにいきものの命をうばったりはしません、と、からだぜんたいをハーブにして、誓いをつまびく楽の音だったのです。

すると、どうでしょう。

こいぬ座のプロキオンも、おおいぬ座のシリウスも、こじし座も、いや、おうし座、やまねこ座、きりん座、へび座、そして、おおくま座やこぐま座までが、いっせいに、空じゅうにこだまするように、うっとりした声で、オリオンのハーブにあわせて、ゆるしの歌を、合唱したのです。

——そうなんだわ。みんなで、おわびしたり、ゆるしあったりすれば、争いは、なくなるんだわ。

目にいっぱいなみだをためて、ゼナシユちゃんが、いいました。

——ほくたち、おたがい、銃で射ちあったりしちゃあ、いけな
いんだ。

キラキラ光る目で、ハナ君が、いいました。

——一切れのインジェラ(醜醉パン)だって、みんなで、わけあつてたべるべきなんだ。

頬をなみだでぬらしたワンドウ君が、いったのです。

それから、みんなは、ぎよしゃ座のあやつる四輪車のジェット・コースターにのったり、ペルセウス座の回転木馬、はては、りゅう座の、ながい、まがりくねったすべり台、そして、ヘルクレス座のジャングル・ジムなどで、それはそれはたのしくあそびまわりました。

そして、とうとう、カシオペア座が、Wの字のかたちにまがった弓に、うつくしい花の矢をつがえて、言ったのです。

——さあ、北極星に、この花矢があたれば、天のくす玉がわれ
て、空じゅう、こどもたちの笑顔が、星のように、舞い
きりますよ。

それは、ほんとうでした。

ひゅうと、口笛のような音といっしょに、カシオペアのはなつた花矢が、もののみごとに、北極星の手にとどきますと、その手は、ぐいと、天のいただきの、袋のようなものからぶらさがったひとすじの糸をひきました。

袋が、パツとひらかれ、アジス・アベバじゅうの宿なしのこどもたちの、たのしそうな笑顔が、花ふぶぎとなって、夜空にひろがり、舞いおどりました。

ハナ君のカペラ星のような笑顔も、ゼナシュちゃんのプロキオ

ン星によく似た笑い顔も、みんなみんな、花びらのように、舞いおどりました。

そして、やがて、西の地平線にかたむきかけた一四夜の月の夕クトが、ゆつくりとふられ、ゼナシュちゃんやみんなの夢の花びらは、月の光にあわく光りながら、アジス・アベバのまちかどにねむるこどもたちの、飢えごえたすがたのなかに、すつとすいこまれ、やがて、月の光といっしょに、きえていったのです。

20 月の子守唄

父を戦闘でうしない、いっしょににげようとした母を射ちころされて、ひとりぼっちになった、少女アウサビマナよ、さびしくつてたまらない夜は、どうか、空にいるわたしのことをおもいおこしてください。ほとんど、いつも、夜空のどこかで、じつと、あなたのあどけない寝顔をみまもっているわたしは、月のおかあさんなのです。地上の、すべてのこどもたちに、わけへだてなく、いつくしみの光をおくるわたしは、あなた、月のおかあさんなのです。ですから、みなしごたちのキャンプの寢床で、つかのまのやすらかなねむりにつく少年セヒガモネルよ、どんなに、あなたのおとうさんやおかあさんとはぐれて、いまはかなしい夜をす

ごしていても、あなたは、あなた、月のおかあさんであるわたしから、もう、けっして、はぐれることはないのですから、あんしんして、わたしの光の子守唄をききながら、おやすみなさい。そうなのです、銃をもった男たちにおそわれ、目のまえでりよう親がころされるのをみていなければならなかった少女アリベラよ、いま、わたしの月の光の子守唄をきいて、やっと、寝ついたあなたの肩に、そっと、あたたかい毛布をかけてくれる、世界じゅうからやってきた、こころのこもったボランティアの人々の、いつくしみぶかいまなざしにも、やさしい指さきにも、月のおかあさんであるわたしの、銀いろの光が、うつくしくながれかけているのですから、あなたは、もう、けっして、みなしごではなく、わたしたちの、たいせつないとしごなのです。そして、ああ、森のほとりを散歩していて、とつぜん、車にのった男たちにおそわれ、おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、おにいちゃん、妹のみんなが、銃とナイフと斧で、めったうちにされてころされるのを、草むらのかげからみてしまった、少女ウムテシよ、いのちからがら、このキャンプにげこんだいまも、あまりのおそろしさに、ひとことはなすことのできなくなってしまうたあなたの頬に、そっと、おやすみのキスをしてくれた、あんな、しんせつな女のひとこそは、わたしの月の光のくちびるをも

つ、あなたの、こん夜のおかあさんなのですから、月のおかあさんであるわたしに、こころをひらくように、どうか、あの女のひとにも、こころをひらいてください。そして、わたしの、月の光の子守唄が、じつは、たくさんのくるしいことやつらい日々をのりこえて、りっぱなオトナに成長していくであろうあなたへの、わたしの、ささやかなはげましのことばなのだ、ということ、どうか、しっかりと、むねにきざんでください。いまは、世界じゅう、とてもつらい時代です。でも、くじけずに、歯をくいしばり、しっかりと、生きていきましよう、と、いつも、夜空のどこからか、声をかける、わたしは、月のおかあさんです。少女アウサビマナにも、少年セヒガモネルにも、少女アルベラにも、少女ウムテシにも、わけへだてなく、わが子よ、とよびかけ、光のキスをおくり、月の光の子守唄をうたつてあげる、わたしは、月のおかあさんです。ボランティアの人々が、はたらきつかれて、ねむりについたあとも、一晚じゅう、あなたたちの枕もとで、光の子守唄をうたいつづける、わたしは、あなたたちひとりひとりを、いつまでもみまもりつづけていく、月のおかあさんです。

21 メリー・クリスマス

ある日、どこからともなくあらわれた、金いろの髪をした男のひとと、銀いろの髪の娘さんが、山すそのちいさな村にすみついたのは、もう、なん年まえのことだったでしょうか。

ふたりは、せつせとはたらいで、木づくりの家をたて、畑をたがやしました。

家の中心には、ひろい居間をつくり、日曜日には、それを、近所のおばあちゃんやちいさなこどもたちに解放して、お祈りをしたり、讚美歌をうたう教会にしたのです。

牝牛を飼って、まい朝、新鮮な乳をしほり、はなし飼いの牝鶏には、おいしい卵をたくさんうんでもらいました。

大きな、ひろい海の、ずつとむこうの、それはそれはとおいくにからやってきたということでしたが、村人には、そのくにが、地球上のどこにあるのかさえ、さだかではなかったのです。

でも、わかいつたりは、いっしょうけんめいでした。

村人のはなすニホン語を、わきめもふらず勉強して、二、三年もしますと、もう、なんの不自由もなく、あいさつや、冗談までいえるように、なりました。

男の子が生まれ、女の子が生まれ、さいごに、また、女の子が

生まれ、三人の子どもを、しつかりと、そだてました。

金いろの髪のおとうさんは、草刈りやマキ割りの仕方を、ていねいに、おしえました。

銀いろの髪のおかあさんは、山羊の乳しほりや、トーキビのゆで方を、やさしく、おしえました。

家が学校になり、算数も、歴史も、音楽だって、ピアノといっしょに、ならったのです。

じぶんたちのたがやした畑の小麦でやいたパンは、それはそれは香ばしくて、おいしかったのです。

男の子らは、大きくなると、地球のむこうがわに去っていき、やっぱり、おとうさんやおかあさんとおなじくらしをはじめました。

女の子らも、うつくしいオトナに成長して、結婚したり、大学にすすんだりしました。

でも、どんなにはなればなれになっても、こどもたちは、金いろの髪のおとうさんと、銀いろの髪のおかあさんを中心に、大空をめぐる星のように、家族のきずなでむすばれていたのです。

いつのまにか、また、ふたりつきりになった、おとうさんとおかあさんに、でも、とうとう、山すその、このちいさな村が、ふたりをよびよせた理由のはっきりとわかる時が、やってきまし

た。

ずっと南の、とおいくにぐにから、たくさんのわかものたちが、山すそのあたりにやってきたのです。

工場やお店ではたらき、お金を、ふるさとの家族におくるためだったのです。

そして、とうとう、ある日の朝、金いろの髪のおとうさんは、家のまえにおぎざりにされた、赤ちゃんを、みつめました。

みなしごです。

父親もわからず、くらしにこまった母親が、泣く泣く、金いろの髪のおとうさんと銀いろの髪のおかあさんに、赤ちゃんのいのちをあずけ、とおい南のくにかえっていったのです。

おもわず、だきあげて、頬ずりした、銀いろの髪のおかあさんは、こころの底からの声で、いいました。

—— かわいそうに、わたしの赤ちゃん。でも、もうだいじょうぶ。あなたのおかあさんは、きょうから、わたしですよ。

土のしみこんだ指で、赤ちゃんの耳たぶにふれながら、金いろの髪のおとうさんが、やさしくいいました。

—— わたしたちを、そだての親としてえらんでくれて、ほんとうに、ありがとう。わたしたちの、四番目のこどもとして、すくすく成長してちょうだいね。

銀いろの髪のおかあさんの目からも、金いろの髪のおとうさんの目からも、あついなみだが、あふれでました。

じぶんたちの、ほんとうのこどもがうまれたのとおなじよろこびで、もう、胸がいつぱいだったのです。

こうして、くりくり目の赤ちゃんは、銀いろの髪のおかあさんの胸で、金いろの髪のおとうさんのしぼった牛乳をのんで、すくすくそだち、なん年かのちには、つやつやした黒髪の女の子に成長しました。

銀いろの髪のおかあさんは、レタスの切り方や、皿の洗い方を、手をとって、おしえました。

金いろの髪のおとうさんは、ニワトリの餌のあたえ方や、トマトのもぎ方を、熱心に、おしえました。

また、家が学校になり、理科も、社会も、美術だって、クレパスをにぎって、いっしょうけんめいに、べんきょうしたのです。

家族三人で収穫したジャガイモは、それはそれはほかほかと、粉をふいて、頬つぺたがおちそうに、おいしかったのです。

そんな、しあわせいつぱいのまい日ではありましたが、ある日、つやつやした黒髪の女の子が、ふと、おもいたって、金いろの髪のおとうさんに、たずねました。

—— ねえ、おとうさん。わたし、どこのくにのひと？

そうだったのです……どこのくにのどんなひとがうみの親なのか、だれも、しることはできなかつたのです。

国籍のない女の子……

なんということでしょう。

金いろの髪のおとうさんは、こころをきめました。

——この子は、ニホンでうまれて、ニホンで育つたのだから、

まちがいなく、ニホン人のはずだ。

その日から、金いろの髪のおとうさんのたたかいが、はじまりました。

頭のいたくなるような法律の本を、ねじり鉢巻で、べんきょうしました。

お役所をいくつもまわり、たくさんのひととあい、かぞえきれないほどの書類に、こまかい文字を書きいれました。

そして、やっと、つやつやした髪の子が、ひとりでバスにのつておつかいにいけるようになったある日、一通の書類が、郵便受けに、ぼとりと、投げこまれたのです。

——つやつやした黒髪の子は、まちがいなく、ニホン人です。

銀いろの髪のおかあさんが、つやつやした髪の子を抱きしめ、頬ずりしながら、いいました。

——これで、やっと、あなたを、ちゃんと、法律にまもられた、

正式の子どもにできるわ。

金いろの髪のおとうさんが、つやつやした黒髪の子の髪をなでながら、いいました。

——法律のことばでは、養子だけれど、でも、やっぱり、おま

えは、わたしたちの、ほんとうの子だよ。もう、だれもひ

きはなすことのできない、ほんとうの、四番目の子だよ。

銀いろの髪のおかあさんの目からも、金いろの髪のおとうさんの目からも、あついなみだが、あふれでました。

きつと、ことしのクリスマスには、世界中にちらばった三人のおにいさんやおねえさんたちが、たのしいクリスマス・プレゼントをかかえて、くりくり目の、つやつやした黒髪の妹のところに、かえつてきて、くちぐちに、いうことでしょう。

——メリー・クリスマス。

そして、うれしさのあまり、目をほそめてわらう、金いろの髪のおとうさんと、銀いろの髪のおかあさんは、もう、けつして、地平線のむこうにしずんでいかない、太陽と月のように、いつくしみぶかく照りがやいて、光のことばを、ちりこぼすことでしょう。

——メリー・クリスマス。

22 サラエボの月

月は、砲弾にうちくだかれた建物の一角を、さめざめと、てら
しました。

コンクリートの大きなかけらの下から、金いろの髪少年が、
太陽ののこしていったみなしごのように、さびしいすがたをあら
わすはずだったのです。

こんやは、すこし、おそいようねえ。

ちよつとしんぱいになった月は、でも、すぐに、くずれのこつ
た地下室のくらがりから、ブランスラブちゃんが、ゆっくりと地
上にのぼってくるのを、みました。

手にもったバケツに、月の光がキラキラはじけて、銀いろに鳴
りました。

すっかり地面にでてしまうと、ブランスラブちゃんは、ひよろ
ひよろと、棒きれのようにたちどまって、月をみあげました。

ぼく、こんやも、水をくみにいかなくつちゃあ……

そうだったのです。

月は、空のたかみから、いつも、地上をてらしておりましたか
ら、もう、なにもかも、すっかり、しつていたのです。

ある日、とつぜん、銃をもった男たちが、村をおそって、ブラ

ニスラブちゃんの家には火をはなち、おとうさんとおかあさんを、
射ちころしたのでした。

うらの草むらに身をひそめて、ただひとりいきのこつたブラン
スラブちゃんは、村はずれのおじいちゃんとおばあちゃんと三人
で、ながい道のあるきつづけ、やっと、サラエボのまちに、
たどりついたのです。

そして、この地下室に、すみついたのです。

冬でした。

火をたくのには、たたかいでうちこわされた建物にしびこみ、
ドアや窓わくの板を、はぎとつてこなければなりませんでした。

おなががすくと、しんせつな人たちがあつまっているところに
いって、パンやすこしのカンヅメを、いただいてこなければなら
なかつたのです。

でも、水はちがいました。

水だけは、あれはてたサラエボのまちの、のこされたいくつか
の水道の蛇口まで、ときには、いのちがけで、くみにいかなけれ
ばならなかつたのです。

ぼく、こんやは、あの橋のむこうまで、水をくみにいかなくつ
ちゃあ……

ブランスラブちゃんのつぶやきをきいて、月は、さつと、あお

ざめました。

いつもは、すぐちかくの水道で、バケツにいっぱい、水をくめたのです。

月だって、ブラニスラブちゃんが、水をこぼさないように、足もとを、あかるくてらしてやれば、よかったです。

でも、冬のさむさは、ついに、その水道の蛇口に、氷の錠をかけてしまったのです。

こんやからは、川むこうの、とおい蛇口まで、いかなければなりません。

しかし、そのためには、どこからともなく、ねらいうちの弾がとんでくる、あの、おそろしい橋を、わたらなければならなかったのです。

ああ、いままでに、なんにんの、橋をわたろうとした人々が、ねらいうちの弾にあたって、いのちをおとしたことでしょうか。

でも、だれも、うなりをあげてとんでくる、あの銃弾が、いつたい、どこから、だれの手で、どんな理由でとんでくるのか、わかりはしなかったのです。

月は、そのことをおもって、こころが、きりきりと、いたまいました。

でも、水なしには、ブラニスラブちゃんの一家は、あたたかい

スープも、お茶だって、のめはしないのです。

とうとう、こころをきめて、月は、ひくい声で、いいました。いいですとも、いつてらっしゃい。

ほっとして、ブラニスラブちゃんは、月の光をたよりに、あるきだしました。

くだけたレンガのかげらや、砲撃のあとの大きな穴をぬって、ブラニスラブちゃんは、足ばやに、まちを、よこぎっていきました。

もし、たてものや街路樹を銀いろにくまどる月の光がなかったら、夜のサラエボは、墓場のように、ひっそりと、おしだまったままだったことでしょうか。

でも、どうして、あのうつくしいサラエボのまちが、いまは、おそろしい死のまちに、かわりはててしまったのでしょうか。

いったい、なにがおこった、というのでしょうか。

こなごなにうちこわされた教会をすぎ、あれはたてた学校のたてものをまわりますと、むこうのほうに、ぼうと、橋がみえてきました。

いよいよ、*「ねらいうち」*の橋です。

月は、もう、ひどくいっしょうけんめいでした。

とおりすがりの夜の雲に、ブラニスラブちゃんが橋をわたりお

えるまで、月をかくしてください、とたのんだのです。

満月の光は、あかるすぎたのです。

ええ、いいですとも。

夜の雲は、そういうと、さっそく、ブラニスラブちゃんが橋にさしかかるほんのすこしまえをみはからって、すつと、月のまえにで、光をさえぎりました。

ブラニスラブちゃんも、ひつしでした。

どきどきする胸をおさえながら、からのバケツをしつかりにぎって、橋の歩道のところを、小犬のように、かけぬけたのです。

銃声は、しませんでした。

ほつとして、夜の雲は、風にのつてながれさり、ひとあんしんした月が、ふたたび、ブラニスラブちゃんの足もとを、やさしく、あおく、てらしました。

ありがとうございます。

月が、とおぎかかっていく雲に、そつと、お礼をいいました。

ありがとうございます。

ブラニスラブちゃんも、ちいさな声で、月と雲に、お礼をいいました。

こうして、ブラニスラブちゃんは、ぶじに、くずれはてた大きなたてものにたどりつき、そのなかにある水道の蛇口から、バケ

ツにいつぱい、水をくむことができたのでした。

でも、もんだいは、かえりみちです。

くるときとちがって、バケツは、なみなみとくんだ水で、いまは、石のように、ずしりとおもいのです。

しかも、足もとときたら、たたかいのあとの穴ぼこだらけの道なのです。

りょう手で、力いつぱい、バケツの柄をにぎりしめ、よろよろとあるきだしたブラニスラブちゃんに、月は、おもわず声をかけました。

がんばってね、ブラニスラブちゃん。

ああ、もし、月の光がなかったら、コンクリートのかけらや鉄のワイヤーにつまづいて、バケツのへりから、どれほどの、大切な水のしずくが、こぼれてしまったことでしょう。

でも、ブラニスラブちゃんは、くらい地下室でじつとまっついてるおじいちゃんとおばあちゃんの顔をおもいだし、歯をくいしばりました。

いつてきだつてこぼすまい、と、けんめいに、はこんでいったのです。

おさないうでに、バケツの柄は、刃もののように、くいこみましました。

手ぶくろもない指は、水にぬれて、氷のように、じーんと、つめたくいたむのでした。

やすみやすみ、おゆき、ブラニスラブちゃん。

月も、いっしょうけんめいでした。

そして、やつと、また、ねらいうちの橋がむこうにみえてくと、月は、とおりすがりのべつの雲に、ブラニスラブちゃんが橋をわたりおえるまでわたしをかくしてね、とおねがいたのです。

ああ、いいとも。

べつの雲は、そういうと、すつと、月のまえにでて、光をさえぎりました。

ブラニスラブちゃんも、ひっしでした。

おもいバケツをりよう手でしっかりもち、できるだけいそいでわたっていったのです。

でも、もう、げんかいでした。

手はかじかみ、うではぬけるようで、とうとう、バケツを、橋のまんなかにあたりに、おろしてしまったのです。

はやく、はやく、と雲がさけびました。

はやく、はやく、と月がさけびました。

でも、雲は、いつまでも風のながれにさからって、月のまえに

たちふさがっていることは、できませんでした。

こらえきれずに、雲が、月のまえからながれさるのと、どこかのたてももの窓から銃が火をふくのとほとんど同時でした。

悪魔のつぶてのようにとんできた銃弾は、ブラニスラブちゃんの足をかすめました。

たおれたブラニスラブちゃんの下で、バケツがくつがえり、水は、ざあと、つめたく、ながれさりました。

つづけさまに銃声が鳴り、弾は、橋のランカンにあたって、キーンとはじけました。

しかし、ブラニスラブちゃんは、たちあがったのです。からのバケツをひろうと、きずついた足をひきずって、橋を、

かけぬけたのです。

ゆるしてね、ブラニスラブちゃん。

月は、血まみれの足をひきずっていく少年に、ここから、あやまりました。

そして、からっぽのバケツに、そつと、じぶんの、青じろい光のなみだを、いれてやりました。

いってき、いってき、いれてやりました。

もう、おもくも、つめたくもない、光のなみだを、バケツのへりまで、いっばい、いれてやったのです。

23 かたいつぼうの靴下が……

どこからともなく、大気を切りさいて、ひゆる、ひゆるとんできた、迫撃砲の弾が、庭先に落ちて、大輪の花火のように、ドドツと、いつきにはじけました。

火の柱が、噴水のようにもりあがり、土煙は、砲弾の破片にあたって息たえたノルちゃん、血まみれのからだを、もうもうとおおいかくしました。

はげしい爆風が、ものほし竿を、あらしのようにふきとばしたとき、ノルちゃんのかたいつぼうの靴下だけが、ひらりと、空にまいあがったのです。

——どうして？

なぜ？

ついさつきまで、庭の土で山や谷をつくり、おとなしく遊んでいたノルちゃん。

いつも、水田ではたらくおじいちゃんやおかあさんの留守を、たった一人、しっかり守っていた、ノルちゃん。

でも、いまは、もう、あの、くるみの実のような目をした、かわいらしい男の子は、この地上には、いない。

かたいつぼうの靴下は、かなしみのあまり、ひらひらと、身を

よじって、泣きました。

それをききつけてかけよったのは、いたずらつこの風です。

すきとおったガラスの指で、かたいつぼうの靴下を、ひよいつまみあげると、さっと急上昇して、空のたかみへと、まいあがりました。

——泣いていたね。

いたずらつこの風が、しんばいそうに、たずねました。

——もう、ぼくをはいてくれるノルちゃんは、どこにもいはいない。

なみだでくしゃくしゃになりながら、かたいつぼう靴下は、こたえました。

五つになったばかりのノルちゃんに、迫撃砲をうちこんだのは、いったい、だれなのでしょう。

どうして、いたいけな命を、なんの理由もなしに、うばってしまわなければならぬのでしょうか。

いたずらつこの風は、そうかんがえると、もう、とてもがまんができなくなつて、かたいつぼうの靴下を指先につかんだまま、くるくると、独樂ひとがたのように、つむじをえがいて、まわりました。

——かわいそうに、かわいそうに、かわいそうに。

そして、もう、すっかり目がまわって、くらくらとめまいばかり

りのかたいつぼうの靴下が、ふと、われにかえったころには、さしものいたずらつこの風も、まわりつかれて、息もたえだえのまま、すっと、どこかにきえていってしまったのです。

ひとりぼっちになったかたいつぼうの靴下は、ねじれたひとすじのまっしろい雲のように、ゆらりと、宙にうかびました。

——ぼくを、宝物のように、大切にしてくれていたノルちゃんやーい。

でも、じぶんじしんのちからでは空にうかんでいることのできないかたいつぼうの靴下は、みるまに浮力をうしなって、地上へと、おちつづけました。

そして、あおぐろい水をたたえた沼にしずもうとしたとき、つばさをひゅうと鳴らして、いちわのあわてんぼうのワシが、つかみかかったのです。

——しろい蛇のようで……魚のようで……

ワシは、するどい爪をひらいて、かたいつぼうの靴下をひつつかむと、水面すれすれに、バサツとつばさをうち、さっと、空にまいあがりしました。

大気をきりきいてとぶワシの、光のようなスピードは、かたいつぼうの靴下を、ジェット機の飛行雲のように、しろく、たなびかせました。

——ぼくを、いつも、せんたくしてくれていた、やさしいノルちゃんやーい。

しかし、崖のうえの巣にたどりついた、あわてんぼうのワシは、かたいつぼうの靴下が、蛇でも魚でもない、とわかって、とてもがっかりしたのです。

——ちえ、この、役たたずめ！

あわてんぼうのワシの巣からつまみだされた、かたいつぼうの靴下は、ぐったりと、しょげかえって、下へ下へと、おちていきました。

——そうか。

ノルちゃんなしには、ぼくは、役にたたない、布きれにすぎないんだ。

崖からにゅつとつきでた松の枝にひっかかってとまった、かたいつぼうの靴下は、どんな風からもみはなされた、まっしろい旗のように、ちからなく、たれさがりました。

——なあんだい、あれは。

かたいつぼうの靴下じゃあないか。

松の木のしたをとおりがかった男のひとが、せせらわらいました。

——ちえつ、雑布にもなりやしない。

たちどまつた女のひとが、首をよこにふりました。

——竹 竹 竹

ほそくて ながくて しなやかな竹は、いらんかあ

いきすぎようとした竹売りのおじいちゃんの肩の、いちばんながい竹のさきが、松の枝にひっかかった、かたいつぼうの靴下を、ひよいと、ひっかけ、そのまま、旗のように、ひらひらさせて、すすみました。

——竹 竹は いらんかあ

でも、かたいつぼうの靴下は、おまつりなどの、はれがましいところには、かならず、じぶんをはいて、ほこらしげにでていった、あの、ノルちゃんのことを、わすれられなかったのです。

——なつかしい、ノルちゃんの足やーい。

そのときです、道のまんなかにはかりとあいた大きな穴に足をとられて、竹売りのおじいちゃんが、ぐらりと、ゆらぎました。つい二、三日まえの、はげしい撃ちあいで炸裂した砲弾のあとに、はまったのです。

竹のさきからはずれたかたいつぼうの靴下を、はしっこい犬が、みのがすはずも、ありません。

——じゃれ雪 じゃれ雲

ワンワンワン

かたいつぼうの靴下をくわえると、はしっこい犬は、矢のように、はしりました。

はしって、はしって、はしりました。

——かたいつぼうの靴下だけで

ぴゅう ぴゅう ぴゅう

まっしろい吹きながしのように、たなびいて、かたいつぼうの靴下は、ひゅうひゅう鳴りながらも、やっぱり、泣き声をだしていたのです。

——ほくをひとりぼっちにして、ノルちゃん、どこに、いつ

ちゃったの。

やっど、おばあちゃんの小屋にたどりつくど、はしっこい犬は、ぴたりと、とまりました。

——かたいつぼうの靴下ですよ

ワンワンワン

ききつけたおばあちゃんがでてきて、はしりつかれた犬の首を、やさしく、だきしめました。

——ありがとう、ありがとう。

きょうは、これを、道ばたの市場で売って、おまえとわたしのたべものを、買うでしょう。

おばあちゃんは、はしっこい犬から、かたいつぼうの靴下をう

けとると、たいせつそうに、おしいたいて、ふかぶかと、おがみました。

かたいつぼうの靴下も、すこしへんな気持ちになって、おばあちゃんを、はらりと、おがみました。

——さあ、かたいつぼうの靴下だよ。

買っておくれ。

雪のように、まっしろい、靴下だよ。

道ばたの市場にたつて、おばあちゃんは、なん時間もなん時間も、うたいながら、かたいつぼうの靴下を、ひらひらと、うつくしい雲のように、ふりました。

かたいつぼうの靴下だつて、きつと、ほしいひとがいるにちがない、と、おばあちゃんは、かたく、信じていたのです。

お陽さまが、西にかたむきはじめたころ、乱暴ものの男の子が、さつと、おばあちゃんの手から、かたいつぼうの靴下をうばいとつて、にげだしました。

——田んぼの、いっぼん足のカカシに、売りつけてやるよ。

不吉な予感に、胸がどきどきして、かたいつぼうの靴下は、さげびました。

——やめて、やめて、やめて！

乱暴ものの男の子が、道をそれて、草むらにはしりこんだとき、

足は、たしかに、地面から、木の芽のように、ちよつぴり顔をだしていた、金属の突起にふれたのです。

地雷です。

いくさに狂ったひとびとが、所かまわず、埋めていった、むすうの地雷のひとつに、男の子の、はだしの足が、ふれたのです。

——ノルちゃん！

かたいつぼうの靴下がさけぶのと、地面の底から、おそろしい音といつしよに、まっかな火と土煙りが、龍のように、天へとはじけのぼるのと、ほとんど同時でした。

はげしい爆風で、かたいつぼうの靴下は、はらりと、空にまいあがりましたが、火薬くさい土煙りは、血まみれになって息絶えた男の子を、しっかりとつかんで、はなさなかつたのです。

——ノルちゃん！

かたいつぼうの靴下は、空中を、ひらひらしながら、身をよじつて、泣きました。

あの男の子も、きつと、ノルちゃんだったのに、ちがいない。

すこしずつ、地雷だらけの草むらのほうへとおちていきながらも、かたいつぼうの靴下には、そうおもえてしかたなかつたのです。

ああ、このまま、ぼくは、おそろしい地雷ばかりの、だれもこ

わがってちかよらない野原で、ひとり、くちていく。

どうか、お陽さま、ぼくを、もういちど、だれかの役にたつ靴下にしてください。

そう、いのりながら、かたいっぽうの靴下は、草むらに、しずもうとしたのです。

西の空のはずれで、さいごの光をいっしょうけんめいに焚いていた太陽が、どうして、その声を、ききもらしたりいたしましう。

いくさですつかり荒れはてた野を、こころからかなしんでいた太陽は、いまにも、草の葉むらにかくれようとする、かたいっぽうの靴下に、そつと、声をかけました。

——もうひとりのノルちゃんが、まっているよ。

西の空のほうから、キラキラと、金いろに光りかがやく風が、ふきおこりました。

太陽風です。

あわやのところ、かたいっぽうの靴下を、すきとおった金いろの指ですくいとり、ひらりと、虚空に、うかべたのです。

そのまま、空のたかみへと、ゆうゆう、つれていったのです。

かたいっぽうの靴下の、まっしろいからだは、太陽風の、いっくしみぶかい息にそまって、夕焼け雲のように、うつくしく、も

えました。

野をわたり、丘をこえて、みもしらぬ、ちいさな村のうえまで、ながれました。

——さあ、もうひとりのノルちゃんのところに行っておあげ。太陽のやさしい声といっしょに、かたいっぽうの靴下は、しずかに、地上へと、おりはじめました。

村はずれの、まっしろい小屋のまえで、ひとりの少年が、それを見つけて、さげびました。

——あつ、夕焼け雲が、おりてくる。

金いろの光にそまった、うつくしい雲が、おりてくる。

ぼくの、かたいっぽうしかない足を、やさしくつつんであげようとして、かたいっぽうの靴下が、おりてくる。

少年は、小川に小魚をとりにいこうとして、土の中にうめられた地雷にふれ、いのちだけはたすかったものの、片足をふきとばされてしまったのです。

いまも、松葉杖にすがって、生きていたのです。

——じゃあ、なかよくね。

かたいっぽうの靴下が、かたいっぽうの足しかない少年の手に、たしかにうけとめられたのをみとどけると、太陽は、ゆつくり、西の地平線に、すがたをけしました。

空が、みるみる、バラいろに、もえはじめました。

世界じゅうの、かぞえきれないほどの、地雷にふれて怪我をしたこどもたちを、あたたかくつつむように、夕焼けの光は、ふつて、ふつて、ふりしきったのです。

24 ふたりのジヨモ

さつきから、ずっと、太陽は、足もとのケニア山とエルゴン山のいただきごしに、ふたつの高山のあいだをはしる、大地の巨大なさけめに、金いろのまなざしを、熱くそそいでおりました。

えっ、太陽は、じつと、なにをみついていたのですか？

アフリカ大陸をまっぶたつにひきさきつづける大地溝帯の、ずっと大むかしからのたくさんのふしぎな物語りをでしようか。

それとも、ふたつの山が、さらに南の、アフリカの高峰キリマンジェロ山とむすんでえがく、大地の大三角形の、雄大な光景をでしようか。

いいえ、太陽が、またたきもせず、じつとみつめていたのは、三つの大火山のえがく、ケニアの大三角形のさなか……赤道直下の高原の大気をすって生きる、ふたりの少年の、あまりにもちがう運命だったのです。

はじめに、太陽は、首都ナイロビのずっと北、にごった水をたえるバリンゴ湖の岸べを、みおろしました。

かわききった土をふみしめて、八つになったばかりのジヨモが、大きなバケツを頭にのせ、コーヒーいろの顔を、汗びっしょりの光でぬらしながら、湖めがけてすすみます。

はだしの足に、小石が、いたそうです。

——どこに、いくの？

と、もし、太陽がたずねたら、きつと、ジヨモは、ケニア山の氷河のようにまつしろい歯を光らせて、こたえたことでしょう。

——バリンゴ湖へ、水くみに。

太陽が、こまつた顔で、首をかしげ、つぎのように入ったとしても、やっぱり、ジヨモは、ひきかえすことは、なかったでしょう。

——バリンゴ湖の水は、とつてもよごれていて、そのままのめば、下痢やいろいろな病気にかかり、それがもとで、死んでしまうことだって、あるんだよ。

そうです。

かしこいジヨモは、ちゃんと、しっていたのです。

いつか、ちかくのロールークの診療所のダキタリとよばれる公衆衛生士のおじさんが、小学校でおはなししていたのを、窓ごしに

聞いていたのです。

——バリンゴ湖の水は、とっても危険です。

きれいな水を、のむべきです。

でも、まずしいジヨモの家には、ロルクできれいな水を買うお金など、けっして、ありはしないのです。

たしかに、ジヨモは、しつておりました。

よごれた水がもとで、うまれてくる赤ちゃんも、五人に一人ぐらいは、息をひきとってしまうため、世界じゅうのしんせつな人たちが、村のおとなたちに手助けして、きれいな水をくみだす重力式水供給装置がつくられ、いちじは、ほんとうに助かったことを。

でも、その装置のポンプが故障してしまうと、もう、村のオトナたちは、修理のためのお金をだそうとはしなかったのです。

——お金のかからない、バリンゴ湖の水をのめばいいじゃあないか……ずつとむかしから、そうしてきたように。

こうして、八つになったばかりのジヨモが、たくさんのバイ菌や虫がうじゃうじゃいる、バリンゴ湖の水をくみにいくようになったのです。

ほんとうに、ジヨモは、しつておりました。

村では、また、よごれた水をのんで、赤ちゃんが死に、下痢や

いろいろの病気でくるしむひとがふえはじめたのを。

でも、幼いジヨモに、なにが、できましよう。

ただ、大きなバケツを、くるしみの冠のように頭にのせて、はだしのまま、よごれた水をくみにいくしか、なかったのです。

——かわいそうな、ジヨモ！

太陽は、そう、つぶやくと、金いろのまなざしを、ちよつと南の方にずらして、首都のナイロビの、高級住宅街の、とある、お城のように豪華なお家の庭を、みおろしました。

タイル張りのプールには、きれいな水が、ケニアのすみきった青空を、エメラルドいろにうつして、ゆらゆらと、宝石をといったように、ゆれています。

プールサイドには、七いろのビーチ・パラソルが、大きな虹いろの花のように咲き、八つになったばかりの、この家のあととり息子のジヨモが、水泳パンツのまま、寝椅子によこたわつておりました。

——坊っちゃん、あおいでさしあげましようか。

そばの召し使いのことばに、ナイロビのジヨモ少年は、ワニのように大きな口をあけて、どなったのです。

——つべこべいわず、だまって、あおげ！

召し使いの少女が、かなしそうに、目を伏せ、大きな扇で、ナ

イロビのジヨモに、すずしい風を、おくりはじめました。

——ひと泳ぎしたら、ワニのやわらかい肉料理を食べるから、

コックに、そう、いいつけておけ！ わすれたら、鞭で百

ぺん、ぶつてやるから、そうおもえ！

なんて、ナイロビのジヨモは、ごうまんで、おごりたかぶつて
いるのでしょうか。

「ハイ！」と、奴隷のように、ふかぶかと頭をさげる、召し使
いの少女の、やせほそった肩から、つと目をそらして、太陽は、ま
た、北のかなた、バリンゴ湖のジヨモ少年のほうに、金いろのま
なざしをむけ、おもわず「あつ」とさけびました。

ワニです。

大きなワニが、バリンゴ湖の泥だらけの水の中から、ふたつの
鼻の穴をあげ、浅瀬におりてくるジヨモ少年の人くさい匂いをか
ぎつけてしまったのです。

——ジヨモ、あぶない！

太陽は、さけびました。

でも、その声は、金いろの光のしぶきとなって、水のなかには
いっていくジヨモ少年のひざもとに、キラキラと、うつくしく、
まばゆく、かがやくのみだったのです。
そう。

バリンゴのジヨモ少年は、すこしでも深みにいくほど、よごれ
のすくない水をくめる、とっていたのです。

沖からは、大きなワニが、鼻と目だけを水面にのぞかせ、すこ
しの音もたてずに、ちかづいてきます。

銀いろにぶく光るウロコが、水面すれすれに、かすかなざざ
波を、ひたひたと、えがいています。

でも、大きなバケツを頭からおろし、注意ぶかく、できるだけ
すんだ水をくもうと、湖のなかにバケツの口をしずめていくジヨ
モに、どうして、おそろしい人くいワニの接近がわかりましょう。

「ああつ！」と太陽がさけんだしゅんかん、大きな尾で力いっば
い水をけた人くいワニが、地獄の門のようにまっかな口をあけ
て、ジヨモにおそいかかり、するどい牙と牙のあいだに、バケツ
いっぱいの水をくみあげようとする少年を、パクツとくわえこん
でしまったのです。

はげしい水しぶきが、ジヨモの血でまっかにそまり、湖のふか
みにしずみこむワニを、かくしました。

——ああ、なんということ！

太陽は、あまりのむごたらしい光景に、おもわず、目をそむけ
ました。

そして、つい、太陽は、みてしまったのです。

バリンゴ湖から南に二百数十軒のナイロビでは、もう一人のジヨモ少年が、寝椅子からたちあがり、澄みきったプールの水に、じょうずなジャンプでとびこみ、ワニのように、たくみに、泳ぎはじめたのを。

ああ、人間のせかいつて、ほんとうに、なんなのだろう。

バリンゴ湖の水のふかみでは、まずしいジヨモ少年をのみこんだワニが、巨大な闇のように、ゆったりと、泳いでいます。

ナイロビの豪邸のプールでは、金持ちのジヨモ少年が、やがて食卓にでる、とろりとあたたかいワニ料理をおもいかべながら、消毒のゆきとどいた、清潔なプールの水のなかを、たのしげに、泳いでいます。

原 子 修

ああ、ほんとうに、ひとつて、なんなのだろう。

かなしみのあまり、太陽は、まぶたを、とぎしました。

東アフリカ大地溝帯に、また、大むかしからの、甘い香りの風がふきおこり、しずかに、わたっていきます。

25 やすらかな寝床がありますように！

一〇日月とつかづきは、もう、水蜜桃の実をふたつにたちわつたようなすがたを、くれなずむ天のいただきに、うつすらとあらわすと、い

そいで、太陽が地上にのこしていこうとしている、ひとつの光景を、みやりました。

それは、インドシナ半島の南のはずれ、アンナン山脉のとぎれるあたりの、ホー・チミン市のまちかどでした。

——わたしは、ずっと西のほうに、あかるさとあたたかさをとどけにいきます。

お月さま、おねがいですから、どうか、あの、露店のたちならぶ通りにとまっている、一台のトラックのことを、みてあげてくださいませんか。

夕陽のあとをおつて、空のたかみから、ゆつくりと西をめざしていた一〇日月とつかづきは、ほかならぬ太陽のおねがいに、こころよく応じて、いったのでした。

——いいですとも、お陽さま。

昼と夜とで、つとめをわかちあうのは、当然です。

どうか、安心して、西のほうの、木や小鳥や人々に、うつくしい光と熱をふるまってあげてくださいな。

こうして、一〇日月とつかづきは、たそがれの光のそこで、にぎにぎしくいきづく、露店街の一角に、琥珀いろのまなざしを、ふりむけました。

そして、おもわず、あつと、声をあげそうになったのです。

すりへったタイヤ……はげた塗装……ひしゃげたバンパー。

しかし、一〇日月とおかづきが、びっくりしたのは、そのニホン製のおんぼろトラックの、いかにも、つかいふるされた、ぼろぼろのすがたなどでは、ありませんでした。

一〇日月とおかづきが、おどろいたのは、そのトラックの運転台のうしろの、金網を、ニワトリ小屋のようにはりめぐらした、荷台のなかだったのです。

いいえ。

ニワトリ小屋というよりは、むしろ、牢獄の檻をおもわせる、その荷台のなかには、ぼろぼろの身なりの、うすよごれた顔や手足のこどもたちが、ぎっしりとつめこまれていたのです。

しかも、荷台のうしろの出入口には、ピーんと、重い鉄の錠が、かけられていたのです。

なんとということ！

でも、一〇日月とおかづきには、すぐ、わかったのです。

うちつづく戦乱におわれ、大きな都市にながれこんできた、まぎしい人々のこどもたち。

親からもはぐれ、その日その日のたべものをもとめて、まぢかどでものごいする、はだしのこどもたち。

学校にもいけず、住む家もなく、やさしくだきしめてくれる肉

身すらいない、かわいそうなこどもたち。

しかし、りっぱなビルがつぎつぎにたてられ、宝石を身にまとう人々がまちをであるくようになって、やっど、そのこどもたちは、あたたかい寝床と、たべものの用意された施設に、おくられようとしているのです。

ほつと、ためいきをつくつと、一〇日月とおかづきは、まぢかどでくらすこどもたちを施設に送りどけるため、警察のおまわりさんたちが用意したトラックの荷台を、こんどは、注意深く、のぞきこみました。

ああ、なんとということでしょう。

べとべとによごれた荷台の床に、ぺたりとすわりこんで、女の子のトランちゃんが、どこにつれていかれるかわからない恐怖に、わなわたと、ふるえています。

どこでつみとつたのでしょうか……手にもった野の花までが、首うなだれて、かなしそうです。

目のよくみえない妹の夕オちゃんをだいて、男の子のアンちゃんが、目にいつぱい、なみだをうかべています。

もう三日も、パイアの実のひと切れだつて、口にしてはいないのです。

やがて、私服のおまわりさんたちが、警察のちいさな自動車で

のりつけ、うすよごれた人形をぎっしりだいたティリエンちゃんを、荷台のなかに入れました。

ギーと戸がしまり、ガチャンと錠のおりる音は、とおくの空からみついている一〇日月とおかづきにも、野犬狩りの檻のようにおもえて、とてもせつないのです。

やがて、トラックはうごきだし、サイゴン川にそって、ベトナムの夜へと、はしりだしました。

ほんとうに、どこに、つれていかれるのでしょうか。

約束どおりに、料理したての夕食は、あるのでしょうか。

寢床のぬくもり……やさしいオトナたちの声が、まちがいでなく、まっているのでしょうか。

とつさに、一〇日月とおかづきは、あらんかぎりの光をふりしぼって、ひたはしるトラックの荷台の網の目のすきまから、トランちゃんのもう何カ月も洗っていない髪にキスして、いいました。

——せめて、せめて、今夜、つかれて眠ったあとで、はぐれたおかあさんの夢をみせてあげましょうね。

夜のなかばには、西の地平線にさつていかなければならぬ
 いわたしの、せめてもの贈りものを、どうぞ、うけとつて
 くださいね。

おなじように、一〇日月とおかづきは、アンちゃんとタオちゃん兄妹のお

でここに、あおい光のキスといっしょに、寝入ってからの、ふるさとの、メコン川上流の、うつくしい密林と小鳥たちのコーラスの夢をすべりこませたのでした。

ティリエンちゃんには、頬つぺたへのキスといっしょに、わかれわかれになった家族の夢を、やくそくしてあげました。

そのまにも、トラックは、ずんずんすすんで、とうとう、月の光のとどかない、くらい建物のむれのかげにはいつて、みえなくなり、一〇日月とおかづきだけが、ひとり、空にのこされました。

ああ、ほんとうに、今夜、あのこどもたちに、一〇日月とおかづきの贈った夢をみることできる、やすらかな寢床が、ありますように！

26 純金の汗

太陽は、ヒマラヤの山なみが、ほつと、なで肩になり、東のほうに、身をかがめるありさまを、じつと、みつめておりました。

——なんて、大地は、おきあがったり、ねころんだりして、さまざまなうごきを、たのしんでいるのだろう。

ほほえましいきもちのまま、太陽は、北から南へとただらかにひざをおつていく横断山脈カシトワンや、サルウィン川とランツアン江のふたすじの川が、青い血をはこぶ血管のように、うねうねと、海に

ながれこむすがたを、みました。

——それにしても、氷河のつめたいとけ水をたたえたランツァン江が、やがて、メコンの大河となって、南シナ海にそそいでいく様子は、ほんとうに、地上をはいずる青い龍のよう、いきいきとしている。

すっかりまんぞくして、もういちど、ランツァン江の上流のあたりに、金いろのまなざしをむけた太陽は、あっと、息をのみました。

川ぞいの、ちいさな村の、男の子が、太陽にむかって、手をあわせ、おねがいをしていたのです。

——お陽さま、おねがいですから、ぼくの、首にできた、このコブ、どうか、なおしてください。

おもわず、かがみこむようにして、太陽は、男の子の首のあたりに、金いろの光のまなざしを、むけました。

はれています。

コブやワカメにはいつている、ヨードという物質がたりないため、甲状腺が肥大して、コブになってしまったのです。

ほんとうに、山また山の、このあたりで、ヨードをふくむたべものなど、どうしたら、手にいれることが、できましよう。

でも、このままでは、クレチン病という病気になったりして、

げんきがなくなり、ものおぼえも、にぶってしまいかねません。

——お陽さん。ぼくの村のひとたちは、このコブは、ぼくのからのなかにすみついた、森の神さまの使いだ、ということです。

お陽さま、ごらんください。

このへんの森の木には、ずいぶんと、コブがあるでしょう。それも、みんな、木にすみついた、森の神さまの使いで、ぼくのコブだって、おなじだって、いうんです。

むしろ、このコブは、守り神としてたいせつにしなければって、いうんです。

だけど、ぼく、ちかごろ、ちよっと、へんなんです。きつと、この、コブのせいだと、おもいます。

ねえ、お陽さま。

こんな山奥には、病院はもちろん、お医者さんだって、いはしません。

ああ、ぼく、いったい、どうしたらいいんだろう。

なみだながらにうったえる男の子をみて、太陽は、ほっと、ためいきをつきました。

男の子の村の、すぐふもとのまちには、もう、世界じゅうの、このころのあたたかいひとたちからおくられた、ヨードのはいった

塩の袋が、とどいていたのです。

それを、料理のときにつかえば、すこしずつ、ヨードが、からだのなかにとりこまれて、病気をふせぐことができるのです。

でも、そのまちから、男の子の村までは、きりたった崖や危険な山道を、なん時間もかけて、のぼらなければ、なりません。

日に日に、からだのよわっていく男の子には、もう、とても、むりなことだったのです。

ついに、意を決して、太陽が、ひとりごとのように、つぶやきました。

——まってるね。夕方までには、きつと、もっていつてあげるからね。

※

まちの、通りに面した事務所では、とおいくにからやってきたひとや、地元の一とが、額に汗して、はたらいておりました。

こまっているひとたちのために、われをわすれて、いっしょうけんめいに、仕事をしていたのです。

ですから、いかにもこころのあたたかさをおばさんが、入口から、にこにこしてはいつてきても、だれひとり、へんにおもったりは、しませんでした。

——あとう、山のうえの村では、ヨード不足のため、首にコブ

のできた男の子が、こまっています。

いまからでも、役にたつのでしたら、ヨード入りの塩を、はこんでいつてあげたいのですが……。

事務所のひとが、ふりかえり、おばさんの、金いろにかがやく目を、まぶしそうにみて、いいました。

——あたらしい保健婦さんですか？

——ええ。

——でも、あの山のうえの村までは、ずいぶんの道のりですよ。

おまけに、谷あいのかかった吊り橋は、足をふみはずしでもしたら、もう、けつして、たすかりはしないのです。

——よく、わかっています。

——そのうえ、じつは、ヨード不足になやんでいるのは、その男の子だけじゃあ、ないのです。

村の、ほとんどのこどもたちに、ヨード入りの塩は、ひつようなのです。

——ええ、きつと、みんなの分も、はこべるとおもいます。

事務所のひとは、もういちど、おばさんの、いつそう金いろにかがやく目を、みました。

みたこともない、女のひとです。

でも、どこかで、まい日、かかさず出あっているような、ふし

ぎに、したしい感じのする、おばさんです。

—— たすかります。

だけど、ほんとうに、だいじょうぶですか。

塩のはいった袋は、岩のように、肩にくいこみますよ。

—— だいじょうぶです。

事務所のひとは、もう、ひよいと、ヨード入りの塩の袋を肩にかついで、あつというまに、山の上の村への道をあゆみさつていく、おばさんのうしろ姿を、あつけにとられて、見送りました。

そして、ふと、おばさんの、ひと足ずつの、地面にしるした足跡が、ぼうと、金いろの光のしづくがこぼれおちたようになっているのをみて、とても、おどろいたのでした。

※

山の上の村は、大さわぎでした。

からりと晴れわたった空に、お陽さまが、みえないのです。

—— この世のおわりが、やってきたのだろうか？

—— それとも、わたしたちに愛想をつかして、お陽さまが、すがたをかくして、しまったのだろうか。

村人たちは、空をみあげて、くちぐちに、いました。

でも、あの男の子は、ちがいました。

まちのほうから、村へとのぼってくる道に、じっと、目をむけ

ていたのです。

—— あつ、お陽さまが、ヨード塩を、もってきてくれた！

男の子が、さけびました。

下の道に、やつとすがたをあらわした、おばさんの額には、純金の汗が、キラキラと、うつくしく、かがやいておりました。

—— ありがとう、お陽さま。

男の子が、ヨード塩の袋をおろしたおばさんに、そういったたん、金いろの光が、あかるいわらい声のように爆発して、いっしゅん、男の子も、また、なにごとかとおもってかけよってきた村のひとたちも、目がくらみ、なにも、みえなくなってしまうした。

そして、やつと、あたりが、はつきりとみえるようになったとき、男の子が、西の空にむかつて、大きな声で、いったのです。

—— お陽さま、ヨード塩、ありがとう。

はこび主のすがたをうしなつて、ぼつんと地面におかれた、ヨード塩の袋をみて、はじめて、それとさつた村人たちも、空に夕陽となつてすがたをあらわした太陽に、ここからの声で、いったのです。

—— お陽さま、ヨード塩、ありがとう。

27 ふるさとは、いつまでも……

やっと、ベラルーシの、ドニエプル低地の、ひろびろとひらけたみどりの野に、その日のはじめての光をふりこぼした、夜あけの太陽は、うすあかりをたよりに、プチチ川ぞいの道をあゆむ、ひとりの少女をみつめて、おもわず、声をかけました。

—— おや、カリーナちゃん。こんな朝はやく、どこへ？

野菜でいっぱい大きなカゴを地面におくと、カリーナが、東の空のほうを、みあげました。

一四歳になったばかりの頬は、それこそ、チェルボナ・カリーナ（赤い実）のいろに上気して、おでこには、汗の朝露が、キラキラ光っています。

—— まちのお役所へ。

—— 八軒もの道を、あるいて？

—— ええ、このカゴのなかの野菜の放射能を、はかしてもらおうのです。

放射能！

いっしゅん、太陽は、くちごもりました。

そうだったのです。

なにごともなく、牛を飼い、麦や野菜をそだてていた、カリーナ

ナの平和な村に、ちょうど一〇年まえ、おそろしい災難が、おそいかかったのです。

いや、カリーナの村ばかりではありません。

ベラルーシじゅう、いや、もっとひろい地域のいたるまちや村に、さまざまなわざわいが、ふりかかったのです。

原子力発電所の大事故！

ウクライナの北のはずれの、チェルノブイリの原発の四号機が爆発して、セシウム137などの放射性物質が、折からの風につて、ひろく、まきちらされたのです。

なんじゅう年たっても、なかなか、へらないといわれる、おそろしい放射性物質！

カリーナの村の、牧草地や畑にも、それは、いっぱい、ふりましました。

小川も、森も、家も、みんな、よごされました。

—— ここは、危険だから、ほかの土地に、うつるように！

お役所のおじさんがいい、まちと村をむすぶバスも、なくなり、ほとんどのひとびとが、村をすてました。

でも、カリーナの一家は、そのまま、放射能でいっぱいの村に、のこったのです。

—— だって、お陽さま。身寄りも、親類もないので、わたした

ち、ほかに、いくあてがないのです。

ああ、なんということでしょう。

ゆつくりと、白ロシアの空にさしのぼりながら、太陽は、ふかいため息をつきました。

——それに、あの牧草地も、牛舎も、おとうさんが、じぶんの手で、りっぱにしたのです。

かわいい牝牛だつて、手ばなす気には、なれません。

おもそうな野菜カゴをかかえて、また、あゆみはじめたカーリーナの足もとに、まばゆい光の道をひらいてあげながら、太陽は、やっと、たずねました。

——でも、村から、お友だちがいなくなって、さびしくはないの、カーリーナちゃん。

はじめ、ちよつと真顔になったカーリーナでしたが、すぐに、あかるい笑顔で、こたえました。

——草むらには、キツネの子が、あそんでいるし、小川には、小魚が、愛くるしく、泳いでいるわ。

わたし、やつぱり、うまれそだったこの村が、だいすきよ。

——でも、牛乳も、バレイシヨも、魚も、みんな、放射能で、よごされているんだよ。

——わかつているわ。

でも、どうすることも、できないの。

放射能によごされていないところの牧場や畑を買うには、たくさんのお金が、いるわ。

それに、ふるさとは、お金では買えないほど、大切なものよ。

——だから、ずっと、村に、のこるの？

——ええ、おとうさんと、おかあさんと、三人で、いままでどおり、くらししていくわ。

そのとき、太陽は、たしかに、カーリーナの声が、すこしかすれているのに、気づきました。

よくみますと、のどのあたりが、すこし、はれっぽく、ふくらんでいます。

息までが、どこか、せいぜいと、くるしそうです。

——ねえ、カーリーナちゃん、さいきん、からだのぐあいは、どう？

しんぱいのあまり、たずねた太陽に、げんきよく、カーリーナが、こたえたのです。

——放射能によごされた土地では、甲状腺ガンが多いっていうけれど、わたし、だいじょうぶよ。

それに、病院にいくお金もないんですから、病気になんぞ、

かかっちゃあられないの。

ああ、なんとということ！

太陽は、ことばもなく、おしだまりました。

まちにはいり、お役所の入口が、みえてきました。

——お陽さま！ いっしょに、いのつてくださいね。

このカゴのなかの野菜の放射能が、すくなければ、証明書が、もらえるの。

——証明書？

——ええ。

それがあれば、すぐ、市場で、この野菜を売って、お金にかえられるの。

かえりには、おとうさんのすきなタバコと、おかあさんの

好物のお菓子を、買っていけるわ。

ああ、と、またも、太陽は、声をのみました。

そして、お役所にはいったカーリーナが、このまちで一台しかない放射線検査器で、野菜の放射能を検査してもらい、ふたたび、すがたをあらわすのを、じつとまったのです。

やがて、カーリーナが、でてきました。

泣きじゃくって、います。

証明書は、もらえなかったのです。

ああ、かわいいそうなカーリーナ！

だまって、太陽は、とぼとぼあゆむ少女の肩に、光の手を、おきました。

そして、いっしょに、村までの、八軒の道を、たどりはじめました。

やがて、プチチ川が、銀いろの光の帯のようにみえはじめますと、やつと気をとりのおしたカーリーナが、空をみあげました。

——お陽さま、ごめんなさい。

太陽が、やさしく、こたえました。

——カーリーナちゃん。

すると、カーリーナが、げんきに、いったのです。

——お陽さま、いっしょに、歌を、うたってください。

——歌？

——ええ、"ふるさととは、いつまでも"という歌よ。

——じゃあ、わたしが、金いろの糸をはったハーブで伴奏してあげよう。

——うれしいわ、お陽さま。

おもい野菜カゴをかかえたカーリーナが、うたいはじめました。

——川のながれには

光の小舟をうかべましょう

魚さん

こんにちわ

うつくしいふるさとで

いっしょにくらしましょうね

いつまでも

太陽が、金いろのハーブの、金いろの糸をつまびきますと、放射能にくるしむ、白ロシアのこどもたちが、いっしょに、うたいだしたのです。

——森の葉むらには

みどりのそよ風かなでましよう

小鳥さん

こんにちわ

なつかしいふるさとで

いっしょにあそびましょうね

いつまでも

こどもたちの声が、ドニエプル低地いっばいに、まるで、まるで、お昼の太陽の光のように、ちりこぼれますと、放射能にいためつけられたシカやイノシシやオオカミやカモまでが、声をあわせて、うたったのです。

——草のしげみには

いのちの朝露いのりましよう

おともだち

こんにちわ

きよらかなふるさとを

いっしょにまもりましょうね

いつまでも

とうとう、放射能をあびた、カシの木の森や、牧草地や、カリナーの実までが、すばらしいハーモニーで、うたったのです。

そして、やっと、カリナーの家が、むこうの地平線に、ぽつんとみえはじめたころ、太陽は、ほんとうに、ここからねがったのでした。

——どうか、わたしの光をあびてくらす、地球上のみなさん……もつと、もつと、わたしのもたらすエネルギーを、かしく、いかしてください。

もう、にどと、カリナーちゃんのふるさとを、放射能でよごしたりしないですむように、どうか、わたしの、空いっぱい、きれいな贈りものを、知恵ぶかい手のひらに、うけとってください。

太陽熱という、わたしの、ここから、無限のプレゼントで、いつまでも、ふるさとのくらしを、うつくしく、き

よらかなものにしていってください。

おねがいです……わたしの愛をうけていきる、地球上のみなさん。

28 はじめての修学旅行

その日、ヒマラヤ山脉のまうえにさしかかった太陽は、チョモ・ラーリ山と、クーラ・カンリ山のふたつの山なみにはさまれた高原の一角からたちのぼってくる、ワアーツという、うれしいそんな歓声に、おもわず、耳をそばだてました。

なにか、とても、うれしそうです。

おもわず、プナカのまちのあたりに純金のまなざしをむけた太陽は、その声が、山あいのちいさな学校からきこえてくるのをしつて、つい、木づくりの校舎の窓から、なかをのぞきこみました。プータンのこどもたちが、プラスチックの透明な窓ガラスに、ほっぺたや鼻をくつつけて、くちぐちに、よろこぞの声をあげています。

そうだったのです。

きのうまでは、寒い風がふきこまないようにと、板窓でびっしりとおおわれて、なかをのぞくことはできなかったのが、けさ、

やっと、プラスチックのすきとおった板が、窓わくにとりつけられたのです。

もう、どんなにさむい冬の朝だって、はげしい雨が横なぐりにふりつける夏の昼さがりも、板窓をしめきったうすぐらい教室で、数字をかけあわせたり、文字の練習にうちこんだりする必要はないのです。

なんて、よい日なのでしょう。

つい、うれしくなって、太陽は、プラスチックの窓にびつたりとくつつけられたウゲンのおでこに、キラキラと、光のキスをしながら、いいました。

——よかったねえ、ウゲン君。まいにち、片道二時間もかけて、山をこえ、谷をわたって、でも、やすまずに、学校にかよってくる、とっても感心なウゲン君に、世界じゅうの、ころのあたたかい人々がプレゼントしてくれた。プラスチックの窓、ほんとうに、よかったねえ。

すると、うんと、こつくりうなずいて、ウゲン君がこたえたのです。

——ほく、これからも、けっして、やすまずに、がんばってみせるよ。

プラスチックの窓を贈ってくれた、世界じゅうの、とつて

も親切な人たち、ほんとうに、ありがとう！

つい、目頭が熱くなるのをおぼえて、太陽は、目をふせ、ほんのすこしまえ、ヒマラヤ山脉のずっと東よりの、中国の貴州省^{コイチョウ}の、貴陽^{コイザン}のまちからはるか東南のちいさな村でみた、ひとりの少女のことを、おもいおこしました。

ランです。

一階が豚小屋の家に住んで、水田とトウモロコシ島の仕事をしておつだいでいます。

裸電球の下での、まずしいくらし。

うまれてから、いちどだって、汽車をみたことはありません。

舗装道路も、配達される新聞もない、まずしい村。

でも、ランは、学校にいきたいのです。みんなといっしょに、教室で、先生から、文字とか、計算とか、いろいろなことを、おそわりたいのです。

しかし、ランの両親には、教科書や教材を買うお金が、ありません。

そのうえ、家からずっとはなれた田畑の仕事は、とつても、いそがしく、つらく、ランのお手伝いなしには、やっていけないのです。

太陽は、つい、さつき、トウモロコシ島の草とりをしていたら

ンが、ついと、顔をあげ、おでこの汗をぬぐいながら、太陽にはなしかけたことばを、わすれることができません。

——ねえ、お陽さま。みんなは、わたしが女の子で、いつかはお嫁さんになって、家をでていくのだから、学校になんか、いかなくてもいい、というわ。

だけど、お陽さま。わたし、いつか、きつと、学校に、いくわ。

みんなといっしょに、本を読んだり、文章を書いたりしてみせるわ。

なんて、いじらしいラン！

太陽は、そのときも、やつぱり、なみだをこらえるのに、けんめいだったのです。

そして、とうとう、太陽は、けっしんしたのでした。

——そうだ、学校にいけないランちゃんも、一日四時間も山また谷の道を学校へとゆききするウゲン君も、それから、中国のまだ東のあなた、太平洋上のフィリピンの、先生がときどきやってきてひらかれる移動教室をこころまちなしている山深い村のマリルーズちゃんも、みんなみんな、まだ、いちどもいっただことのない、すばらしい修学旅行に、つれていってあげよう！

おもいたつたら、すぐに実行するのが、太陽の、きまえのいいところですよ。

さつと、からだじゅうから、目にもとまらないはやさでのびていく、むすうの光の指で、ウゲンの、ランの、マリルーズの臉に、ふわつと、ふれました。

いいえ、その瞬間に、太陽の光のあたっている、ブルネイの、マレーシアの、インドネシアの、カンボジアの、タイの、ラオスの、ミャンマーの、インドの、バングラデシュの、ネパールの……いたる地上の、学校にいけずいたり、まずしいくらいのなかを学校にかよっていたりする、むすうのこどもたちの、幼いまぶたに、太陽は、光の指で、そつと、ふれたのです。

そして、ぱちりと、ウゲンやみんなが、目をとじた、そのいつしゅんを、太陽は、なん億倍もの時間にひきのぼして、こどもたちを、太陽系遊覧の修学旅行バスに、のせてしまったのです。

なんて、ふしぎなはなしでしょう。

でも、この宇宙は、ふしぎなことだらけでいっぱいなの、夢のよきな世界でもあるのです。

——わあ、このバス、ぜんぶ、光でできているわ。

ランが、かん声を、あげました。

——シートは、なにやら、ながれ星の光の筋で編んだみたいに、

青じろいわ。

マリルーズが、うれしそうに、さげびました。

そのとき、金いろの髪の毛のもじやもじやした運転手のおじさんが、キラッキランの声で、いったのです。

——みなさん、太陽系遊覧の修学旅行バスに、ようこそ。

勉強心の人いちばいいウゲンが、さつそく、質問です。

——このバス、どんなガソリンで、はしっているの？

運転手のおじさんが、大きく右にハンドルをきつて、こたえませんでした。

——どんな人もが、こころのなかにやどしている、うつくしいものを思いえがくちからで、はしっているんだよ。

えつと、みんなは、ふかい霧のなかにはいったような気分になりましたが、そのまにも、バスの目のまえには、金いろのながい衣をまとった、金いろの目の、うつくしい女のひとが、すつくりと、ながめられました。

右手には夜明けの空を、左手には夕暮れの空をもち、ながい髪も、やつぱり、金いろに、たなびいています。

バスが、その女のひとのよこをとおりすぎるときには、金いろの唇から、うつくしい歌声も、きこえてきたのです。

——あけぼののころは、金。

たそがれのころは、金。

それらを、空にみるひとの、ころは、金。

女のひとがきえ、まわりは、ふかい海のように、まっくらです。

——いまのが、金星だよ。

おじさんが、いいました。

——えっ、星って、ひとなの？

ランが、びつくりして、たずねました。

——そうだよ。明けの明星になったり、宵の明星になったりし

て、地上のひとびとに、ほんとうの黄金のありかを、おし

えているんだよ。

ほんとうの黄金！

それは、なんなのでしょう。

マリルズやみんなが、おもわず、かんがえこんでしまったと

き、もう、バスは、水いろの博士帽をかぶって、水いろのめがね

をかけ、水いろのひげをぴよんとはやした、水いろのガウンの、

水いろの男のひとに、ちかづいていったのです。

——すきとおった水のようなことば……

すきとおった水のようなかんがえ……

すきとおった水のような知識……

すきとおった水のような魂……

水いろの声でうたう、背のひくい、かしこそうなそのひとは、

水のように、太陽系の闇へとながされていってしまいました。

——かしこいひとは、なかなか、みつげづらい。水星って、そ

んな星なのさ。

そういつたかとおもと、運転手のおじさんは、ちからいっぱい

ハンドルをきり、バスは、ぐらりとかたむきながらユーターンし、

もと来たやみの中を、もうれつなスピードで、もどりはじめまし

た。

まえの座席の背が、ほんとあき、テーブルがとびだすと、もう、

そのうちは、リングやキンディヤのみもので、いっぱいです。

——さあ、たんと、おあがり。たくさんたべて、いっぱい、お

勉強するんだよ。

なんてしんせつな運転手のおじさんでしょう。

なんてたのしい、太陽系遊覧の修学旅行バスでしょう。

ウゲンやみんなが、甘い蜜をたつぷりふくんだリングにかぶり

ついているまに、もう、バスの窓には、顔をまっかにしながら、

なにやら目のまえをとびまわる二羽の小鳥をつかまえようとけん

めいな男のひとが、あらわれました。

右のほうをとびまわっているのは、西からのぼって東へしずむ

ようなうごきで、たくみに、男のひとの手をすりぬける、フォボ

スという、とてもすばしこい鳥です。

左のほうをとびまわっているのは、三日月や満月のかたちにすがたをかえながら、ゆっくりゆっくりとぶ、ダイモスという鳥です。

でも、よくみますと、その、赤い男のひとは、二羽の小鳥といっしょに、おどりながらうたっていたのです。

——火星が、二羽の衛星といっしょに、勇気をふるって、自由に生きようと、うたっているんだ。

からだじゅう、火のようにして、げんきいっぱい、おどっているんだ。

修 原 子

こうして、ランやみんなのつた太陽系遊覧の修学旅行バスは、火星と木星のあいだの草むらで、蛍のようにもつたりきえたりする、むすうのおちびちゃん、ちいさな惑星のゲームを見物しました。

一二人の子どもをひきつれた、空いっぱいのがたの、色とりどりの縞もようにかざられた、木星のおじいちゃんから、森がどんなに大切か、をおそわりました。

おなじように、一人の子どもをつれた、うつくしい環の冠をかぶった、土星のおばあちゃんには、しんぼうよく大地といっしょにくらしていくことのありがたさを、おそわりました。

こうして、ウゲンやみんなは、五人のこどもといっしょに仲よくくらすこんぺきいろの天王星のおばさんの、空や大気をよごしたら大変なことになりますよというおはなしや、エメラルドいろの海王星のおじさんの、海はすべてのいのちのちのふるさとなんだよ、というおはなしを、うかがったのです。

そして、さいごに、太陽系のいちばんのはずれで、しずかにくらしているお年寄りの冥王星の、しんせつなはげましのことをばきいたあと、マリルズやみんなのつた光のバスは、ぐるりとユーターンして、ほうき星のおにいさんやながれ星のおねえさんたちのあいだをぬけ、あつというまに、もとの地球にかえりつきました。

そして、バスからおりようとしたランが、はつと、たちどまり、いったのです。

——運転手さん、やっぱり、あなたは、お陽さまだったのですね。

ウゲンも、いったのです。

——太陽系の九つの惑星は、みんな、あなたのこどもだったのですね……そして、そこに住むほくたちも……

マリルズだって、まげずにいいました。

——修学旅行バスにのって、水や火や土や森や空や海を大切に

しなければ、ということが、とても、よく、わかったわ。それから、三人やみんなは、くちをそろえて、いいました。

——お陽さま。たのしい修学旅行を、どうも、ありがとう。

* * *

はつとして、ブータンの、プラスチックの窓板がはいったばかりの学校で、ウゲンが、まばたきしました。

中国の、貴州省コイチョウの、トウモロコシ畝道で、ランが、目をこすりました。

フィリピンの、移動教室の先生をまちわびている、マリルーズが、目をぱちぱちさせました。

すべては、いっしゅんのできごとだったのです。

空では、なにこともなかったかのように、太陽が、金いろにわらっています。

それを見あげて、みんなは、もういちど、いったのです。

——お陽さま。うまれてはじめての、たのしい修学旅行を、どうも、ありがとう。

29 光のトロッコ

金いろの大きなオレンジのようにもえて、太陽は、雪のまっし

ろい冠をかぶったババ山脈のむこうへと、しずかに、かたむきはじめました。

夕ぐれです。

カーブル川みなもの水面をわたって、風は、とぎすましたナイフの刃のように、つめたく光りはじめました。

冬の、さむい夕ぐれです。

太陽のあとをおつて、西の空のなかほどに、神さまの爪のあとのようにほそいがたをあらわした二七夜の月は、カーブルのとあるまちかどに、うすい光のまなざしをむけ、はつと、たちどまりました。

いまにもわれてしまいそうな、ちいさな木の車輪をつけた、トロッコのような台のうえに、ナジル少年は、ぼろぼろの夏服のまま、す手で、ふるえていたのです。

太陽がすがたをけして、きびしいさむさのつる夜には、氷点下のずっと下まで温度がさがってしまいうカーブルのまちかどで、たったひとり、この少年は、いったい、どうしたというのでしよう。

——うちつづく内戦で、うずめられた地雷にふれ、りよう足をうしなつたのです。

数日まえには、ロケット弾がアパートにうちこまれ、家族

は、みんな、死にました。

もの乞いにだされていた、この少年を、むかえにくるものは、もう、この世には、ひとりもないのです。

そういうのこすと、こころくるしげに、太陽は、カーブル盆地をあとに、西の世界へと、たちさりました。

そして、のこされた月には、なにもかも、すっかり、わかつたのです。

ナジル少年のまえにおかれた、からっぽの皿。

目もくれずにとおりすぎる、マフラーを首にまいたきりの男や、チャドルをかぶったなりの女たち。

原 子 修
みんな、ひもじく、こごえて、じぶんの家族のための灯油や薪、パンのように焼いたナンや野菜入りのスープのことで、あたまがいつばいなのです。

どうして、ナジル少年のまえにおかれた皿に、一アフガニのお金、一枚のナンだつて、入れてあげられましたらう。

——ああ、

月は、ふかいたため息をつきました。

なぜ、おなじアフガニスタンの人々が、いくつもの群れにわかれ、武器をふりかざして、たたかいあわなければならぬのでしやう。

なにゆえ、たべものや石油をはこび入れるふたつの国道と、サン街道と、カイバル道路が、手に手に銃をもつてあらそいあうひとびとによつて、犬の子いっぴきとおられないように、バリケードでとおせんぼされてしまったのでしやうか。

そのときです。

太陽のあとをおつて、ババ山脈のほうにかたむきかけた二七夜の月は、もう、この数日、一滴の水も、一切れのナンも口にしてはいないナジル少年が、さいごの力をふりしぼつて、空をみあげ、きえるような声ではなしかけてくるのに、きがついたのです。

——二七夜のお月さま。

もう、ぼくは、この地上では、おわりです。

たべものも、あたたまる火だつて、けつして、ないのです。

どうか、あなたの世界に、つれていってください。

お陽さまも、星々もが、キラキラと光りながらいきる、お

空に、どうか、つれていってください。

あらそいや、ころしいのない、あたらしい世界に、おね

がいですから、うまれかわらしてください。

月は、ふりかえりました。

そして、カーブルの繁華街のはずれの道ばたで、飢えときむさのあまり、死のねむりにはいろいろとしているナジル少年の、さい

この光にぬれた目を、みました。

いつか、内戦にまきこまれて死んだ父親がおしえてくれた、ダリ方言の歌を、夜空の月にむかつてうたったナジル少年の、あの、すみきった、宝石のような瞳。

ならいおぼえた、ロマンス詩の「ライラとマジヌーン」を、月にきかせるかのようにくちずさんだナジル少年の、あの、キラキラした、星のような瞳。

それが、いま、さいごのねがいにもえて、二七夜の月を、じつと、みつめているのです。

いいえ、そればかりでは、ありません。

こごえきった少年のくちびるが、かすかにうごいて、月にささげるダリ方言の歌を、もう、声にはならない声で、そっと、くちずさんでいるのです。

もえつきようとするいのちの、さいごのともしびの歌。

月は、感動しました。

ひとこともききもらすまいと、ナジル少年の、まもなく、えいえんにとざされようとしているくちびるのすきまに、光の指をあてました。

ナジル少年の歌に、光の指がふれると、歌は、ちようど、五線符のように、くちびるからあふれでて、空へ空へと、光の線路の

ように、のびていきました。

どこまでも、どこまでも、のびて、のびて、ババ山脈のかげにはいりかけた月に、つながりました。

そして、ついに、息絶えたナジル少年のからだから、あたらしいのちをえた、もう一人のナジル少年が、あおじろい光の車輪のトロッコにのって、光の線路を、月へと、まっしぐらにかけのぼりはじめました。

こうして、二七夜の月といっしょに、いまはすがたのないすがたになった、もう一人のナジル少年が、もうけっしていくさなどのない、いつまでも平和な空の世界へと、とおくとおく、旅だつていったのです。

30 ムックリ

「ねえ、」

たのしいばんごはんがおわって、しんぶんをよみはじめたおとうさんに、とうとう、コサムは、おもいきって、いったのです。

「ほく、アイヌなの？」

テーブルをふいていたおおかあさんの手のうごきが、はっと、とまりました。

おとうさんの目も、しんぶんの紙面からはなれて、宙に、こおりつきました。

でも、コサムは、もういちど、たずねたのです。

「ぼく、アイヌなの？」

しずかに、しんぶんをおくと、おとうさんは、まっすぐに、コサムをみて、いいました。

「どうして、そんなことを？」

あるかないかわからないほどの、かすかな風をかんじてしまった木の葉のように、その声は、ほんのすこし、ふるえていたのです。

ぬれたテーブルふきを、ぎっしり、にぎって、おかあさんが、火のついたように、息をはずせました。

「だれかに、なにか、いわれたの？ コサムちゃん」

でも、川原の石のように、すっかり、おちついて、コサムは、いいました。

「ぼくは、ニホン人なの？ それとも、アイヌ人なの？」

おかあさんが、コサムの手を取り、つよく、にぎって、いいました。

「だれかに、いじめられたの？ コサムちゃん」
首をよこにふって、コサムは、いいました。

「あした、学校で、ちいさな音楽会がある。

ぼく、そこで、ムックリを、演奏するんだ」

びっくりして、おとうさんが、たちあがりました。

「どうして、ムックリを？」

ほんとうに、ゆったりと、コサムは、こたえたのです。

「先生が、みんな、ひとりひとり、すきなものやっていい、とおっしゃった。

ぼくなら、きつと、ムックリを、だれよりも、じょうずに、演奏できるとおもう」

コサムは、サツポロの、まちはずれの、森や山にかこまれた、それはちいさな小学校に、かよっていました。

音楽会も、劇だって、いつも、かならず、ぜんいんがでて、うたったり、おどったり、したのです。

「どこで、ムックリなんか？」

おかあさんも、おどろいて、ポプラの木のように、たちすくみました。

そこで、コサムは、すっかり、うちあけたのです。

「いままで、だまっていた、ごめんなさい。

ぼく、いつも、学校がおわったあと、家にかっている、シロウサギやチンチラウサギのために、うら山に、草をとりに行った。

ちようど、お陽さまが、西の山かげにしずむころには、ぼくは、クローバーやオオバコの草むらにすわって、夕焼け空を、みただです。

すると、なにか、金いろの光につつまれたような、とつてもへんなかんじになって、おもわず、お陽さまのしずんでいったほうから、ビヨンビヨンと、たいへんうつくしい音楽がきこえました。カモガヤの草をわけてみると、けずった木の冠をかぶった、まっしろいひげのおじいさんが、ムツクリを、演奏していたのです。

ぼくの、こころの、ずっと奥のほうから、こんこんとわいてくる、泉のように、すみきって、それはそれはいいしらべでした。ぼくが、すっかり、かんしんしましたら、おじいさんは、ムツクリをぼくにわたして、ならすように、というのです。

それから、夕焼けの日には、いつも、鮭の皮のくつをはいた、その、おじいさんから、ぼくは、ムツクリを、ならいました。

そして、やつと、こころこめてできるようになって、おじいさんは、いったのです。

——ムツクリは、アイヌのたましいだ。いつまでも、ほこりたかく、かなでていくのだよ。

そのまま、ムツクリを、ぼくにわたして、おじいさんは、もう、あらわれないのです」

はなしおえたコサムが、ポケットからとりだしたムツクリをみて、おとうさんは、あつと、さげびました。

「三匹の鮭の文様が、彫つてある。わたしの父の、ムツクリだ」ムツクリを手にとつて、おかあさんも、びっくりして、いいました。

「ずっとまえになくなった、おじいちゃんのだわ」

そして、コサムは、いったのです。

「ぼく、アイヌなんでしょう」

目にいつばいなみだをうかべて、おとうさんが、ささやきました。

「いままで、だまっていたのには、わけがあるのだ」

おかあさんも、くちびるを、かみしめて、つぶやきました。

「わたしたちがちいさいころ、アイヌとわかって、いじめられた。だから、コサムちゃん。あんたには、あんなくるしみは、させなくなかったの」

なんてかなしいことなのでしょう。

でも、コサムは、きつとして、いったのです。

「ぼく、やつぱり、あした、みんなのまえで、ムツクリを、ならします。

アイヌのたましいを、ほこりたかく、かなでます」

おとうさんとおかあさんは、そのまま、崖っぷちの岩のように、だまってしまいました。

ひよつとしたら、コサムが、アイヌの子とわかって、はやしたてられたり、いじめられたりはすまいか、と、おそれたのです。

*

つぎの朝は、とつても、よい天気でした。

空では、お陽さまが、なにか、うれしそうに、金いろのわらいを、まきちらして、います。

うさぎたちにえさをやって、学校にいかうとしたコサムに、おとうさんが、力づくよく、いいました。

「コサム。おまえの名は、じつは、アイヌ民族の、かつての指導者、コシャマインにちなんでいる。

きょうからは、コシャマインと、はつきり、よんでもいいんだ」

おかあさんも、木をけずってつくった、ちいさな冠を、コサムの頭にのせて、やさしく、いったのです。

「ゆうべ、イタヤの木をけずって、いっしょうけんめいにつくった、サパウンペだよ。

音楽会では、がんばってね」

コサムは、びっくりしました。

よろこびが、朝の光といっしょに、からだじゅうにはいつてき

て、ぴよんぴよん、とびはねているようです。

「ありがとう、おとうさん、おかあさん。ぼく、しっかりと、やるよ」

学校では、もう、椅子をならべたり、ピアノをうごかして、きょうの、音楽会のじゅんぴが、すっかり、できあがっていました。

コサムの番が、きました。

サパウンペを、しっかりとぶつて、コサムは、ステージにたち、いきました。

「ぼくは、アイヌです。

きょうから、ぼくを、コシャマインと、よんでください。

これから、ムツクリを、演奏します。

アイヌ民族の、たましいを、きいて、ください」

先生も、ともだちも、みんな、あつと、おどろきました。

でも、コシャマインが、クマザサのくきをわつてつくったムツクリを口にあて、糸をひっぱって、ビョンビョンピヤンと、ふしぎなひびきをかなではじめますと、あたりは、しいんと、しずまりかえりました。

そして、ムツクリのしらべが、森のいちばんふかいところにはねかえつてもどつてくるみどりのこだまのように、なりひびいたとき、みんなは、こころのそこから感動して、みうごきひとつし

なかったのです。

演奏が、おわりました。

しずまりかえった会場から、やがて、拍手の音が、しだいにたかく、しまいには、あらしのように、わきおこりました。

そして、とうとう、先生も、なかまも、拍手といっしょに、声をそろえて、合唱したのです。

「コシャマイン おめでとう コシャマイン おめでとう コシャマイン おめでとう」

あふれでてくるなみだをぬぐいもせず、コシャマインは、ステージに、たちつづけました。

「おじいちゃん、ありがとう」

窓のそとでは、太陽が、うれしそうに、秋の光を、まきちらしています。

31 オーロラの便り

——お陽さま、お陽さま。いま、いつたい、どこにいますか？

ぼくはといえば、ヨーロッパ大陸のずっと北のほう……フィンランドのさらに北のはずれの、ラップランドとい

う、北極にちかい大草原に住んでいる少年のレーヌですけれど、お陽さま、あなたが地平線上にすがたをあらわさない、カーモスとよばれる、冬の、さむくてくらい日々を、ぼくが、どのようにすごしているか、ごぞんでしょうか。

お陽さま、ぼくの住んでいるヌオルガムのあたりは、九月のなかばぐらいから雪がふりはじめて、七カ月のあいだ、雪にとざされますが、氷点下一〇度をこえる二月のきびしいさむさだつて、ぼくが、すこしもへこたれずにいられるのは、ぼくらサーメ人がむかしからとつてもだいにしている、赤と紺のいろあざやかな民族衣裳や、トナカイの毛皮でつくったブーツを身につけているからだけじゃあないのです。

お陽さま、たしかに、あなたは、一月二五日の夕方にしずんだつきり、一月一八日にならないと、地平線からのぼつてはこないのですけれど、でも、ぼくは、あなたが、『極地の夜』とよばれるカーモスの空いっばいにえがいてみせる、あの、うつくしいオーロラこそは、あなたの、ぼくへの手紙なのだとおもっているのです。

ああ、お陽さま、どんなに、ぼくが、あなたの、ラップランドの夜空にえがく、赤や青や赤紫、そしてピンクや緑の

光の絵文字の、意味をとくのいつししょうけんめいか、
 してくれたら、きつと、とてもびっくりするのになちがい
 ありません。

あの、いくへにもかさなつた光の花びらのようにゆれうご
 いていく、カーテン状のオーロラには、きつと、あなたの、
 ぼくへの、「どんなにきむくたつて、けつして、くじけちゃ
 あいけないよ」という、はげましの声が、こもっているよ
 うに、ぼくにはみえます。

そして、じつさい、じつと、耳をすますと、オーロラの中
 心から、あなたのやさしい声が、まるで、小鳥のさえずり
 のように、天のコーラスのように、ちりこぼれてくるのが、
 わかります。

「レーヌよ、どんなに、くらく、さびしい日がつづいても、
 いつでも、ここに、わたしの光を、もやしつづけるのだ
 よ」という声が、光のしずくのように、ふりしきるのが、
 わかります。

なぜって、お陽さま、このオーロラこそは、すがたをかく
 したあなたが、そつとおくつてくれる、太陽風の手紙なの
 なのですから……

だから、お陽さま、ぼくには、むかしのひとが、オーロラ

のことを、天球の割れ目でもえさかる火、とよんだきもち
 がよくわかりますし、また、このあたりの雪や氷があなた
 の照っているあいだにたつぷりとすいこんだ陽光を夜空
 にむかつてはきだしたものの、という意味だって、すごくう
 なずけるような気がするのです。

そうなのです、お陽さま。湖も、川も、草原も、まつしろ
 にこおりついた、極北の冬を、がんばって生きぬく力は、
 人生のどんなつらいできごとをも、たしかな足どりでのり
 こえていく力となります。ですから、お陽さま、ぼくの住
 んでいる家が、むかしながらの、コタとよばれるテントの
 家だって、それが、なんでしょう。

たしかに、レンガづくりの家は、あたたかくつて、安心で
 すけれど、でも、ぼくは、すこしでも、あなたのオーロラ
 の手紙をすばやく読める、大雪原のテントの家のほうが、
 好きなんです。

ねえ、お陽さま、ぼく、あなたがすがたをみせないカーモ
 スを、げんきいっばい、のりこえますから、どうか、一月
 一八日には、ラップランドの地平線に、また、金いろのや
 さしい笑顔をみせてください。

ターナ川の厚い氷をとかし、ぼくの大好きな釣竿でサケや

マスの釣れる季節を、どうか、よびよせてください。

それまでは、ぼくは、近所のチーモおじさんの家に、サーメ族の詩ヨイクの勉強にかよいます。

むかしからのぼくたちのことばのサーメ語も、しつかりまなびます。

ですから、やがて夏になり、五月一六日からは、空にのぼったきりのあなたが、七月二八日までは、けっして、地平線におりてこずに、ずっと、空にかがやきつづける白夜になりますけれど、そのときは、どうか、たつぷりと、お陽さま、あなたの光で、ぼくの全身を、金色にしてみてください。

そんなわけで、お陽さま、あなたへのこのお手紙は、オーロラの夜にはオオカミのように遠吠えする、ぼくの愛犬のトニーに托しますので、どうか、彼の遠吠えの声にのせたファックスを、オーロラの受信装置で、うけとってください。

北極のあたりにしばらく顔をださずにいた太陽は、レーヌの便りをうけとると、さっそく、あとなんにちしたら、レーヌとあえるかなあ、と、指折りかぞえました。

そして、ふと、太陽は、いつかの原発事故で、ラップランドの

あたりに、放射能をふくんだ灰がふりしきり、核汚染した地衣類をたべたカモシカの肉が、危険なものときれたときのことを、おもいおこしました。

そして、もう、にとと、そのようなわざわいが、トビいろの髪をした少年レーヌの住むラップランドに、ふりかかったりはしませんように、と、ここから、そう、いのらにはいられなかったのです。

32 月の学校

でも、月は、夜のくらやみにしずむ地球のどこからかたちのぼつてくる、うっすらとした光のようなものを、たしかに、みたように、おもいました。

月は、ひっそりとかげった顔を、くろいダイヤモンドをといったようにまどろむ太平洋から、巨大な胎児のかたちでねむりこむ南米大陸へと、むけました。

ほんとうに、その大陸は、いつくしみぶかい海の、ねっとり甘い水にあやされてそだつ、すこやかな胎児のように、みえたのです。

しかし、月は、大陸のおでこのあたり、ちょうど、アンデス山

系が北にはしつて、東コルディエラの山なみとなる一帯の、とある炭鉱のまちの、そまつなほったて小屋に、目をとめました。さとい光の目であればこそ、くらやみの地上が、よく、みわけられたのです。

さびたトタンぼりの屋根は、雨風にやぶれはて、そのすきまから、うっすらとした光のようなものは、あおじろい煙のように、たちのぼっております。

それは、一二歳のリュラス少年の、寝言だったので。

一日じゅう、くらく、しめっぽい地の底で、裸電球のあかりをたよりに、石炭掘りの仕事に、汗水たらしてはたらきぬいたリュラス少年の、寝言だったので。

原 子 修
——学校に、いきたい。

リュラス少年は、六歳のころから、ずっと、炭鉱ではたらき、まずしい一家の家計をたすけてきました。

いまでは、六〇キロもの石炭を、麻袋につめ、地底の坑道を、カタツムリのようになって、地上へとはこびあげるのです。

手足はおろか、背中も、肩も、からだぜんたい、汗と、石炭や土で、ぐしよぬれです。

でも、はたらかなければ、なりません。

おとうさんをなくした家では、おかあさんと、六人の弟や妹が、

まっています。

だから、リュラス少年は、けっして不平をいわず、だまってはたらきました。

まいにち、まいにち、じぶんの体重よりもずっとおもい石炭袋を、地上へと、はこびあげました。

アリのように、モグラのように、はたらきました。

でも、リュラス少年は、学校にいきたかったです。

まちの、ほかの子らのように、文字をならい、ノートで計算し、楽符でうたいたかったのです。

たくさんの本をよみ、いろいろなことをおぼえ、いつかは、じぶんも、学校の先生になりたかったのです。

しかし、それは、夢でした。

いまの、リュラス少年は、朝の六時には、もう、おきだして、スープ一皿とパン一切れの朝食をおえると、炭鉱への道をいそがなければ、なりません。

すこしでもおくれれば、その日の仕事にありつけられなくなるのです。

おまけに、夜おそく、炭鉱からかえりつき、水でからだを洗い、また、スープ一皿とパン一切れの夕食のあとは、わたのようにつかれて、寝床にもぐりこむしかありません。

——学校に、いきたい。

うつすらとした光のようにたちのぼる、リュラス少年の寝言に、月は、胸がしめつけられるようでした。

——ああ、なんとかしてあげられたら……

月は、うつすらとした光の目で、じっと、屋根のすきまから、リュラス少年の、つかれはてた寝顔を、みつめました。

月は、ちゃんと、知っていたのです。

地球上の、まずしい人々をすくうのは、おなじ地球上の、くらしにゆとりのある人々なのだ、ということ。

そして、空のたかみをわたる月にできることは、たったひとつ、すくいの手のとどかないこどもたちの、現実にはかなえられないねがいごとを、夢のなかで、実現させてあげられることだけだ、ということ。

とうとう、決心した月は、うつすらとした光のすがたを、空のたかみから、しずかにはずし、くろくろとそびえたつコクイ山の山かげをくぐり、くろい蛇のようにうねるマグダレナ川をかすめて、夜のくらがりのふかみにねむりこむ、炭鉱のまちへと、おりたちました。

やぶれたトタン屋根のすきまから、かすかな光となつてさしこんだ月は、すらりと、リュラス少年のつむられた目と目のあいだ

から、リュラス少年のねむりの世界に、しのびこみました。

——さあ、学校におくれますよ。

月のおかあさんの声でとびおきたリュラス少年は、テーブルにならべられた、なん枚もの焼きたてのパンにバターをたっぷりぬり、ストロベリージャムをこつてりつけてたべました。ポタージュをすすり、ミルクとジュースをのみ、ケーキを一切れいただくと、げんきよく、家をとびだしました。

学校では、きょうは、地理の授業です。

——わたしたちのくらすコロンビアというくには、赤道と北緯一〇度のあいだあたりに位置しておりますが、ティエラ・テンプラダとよばれる、標高二〇〇〇メートルくらいまでの高原では主としてコーヒーが栽培され、ティエラ・フリアとよばれる、標高三〇〇〇メートルまでの山間盆地は、年平均気温が摂氏一四度位とすこしやすく、ジャガイモや麦が生産されるのです。

さらに、パラモスとよばれる、標高三〇〇〇メートル以上の草原地帯では家畜が飼われ、標高四五五〇メートルで雪線となるのです。

それから、歴史の授業では、ずっとむかしからすんでいたインディオの人々が、一六世紀頃からスペイン人の支配下にはいり、

一八一九年にスペインから独立したというお話や、現在すんでいるのは、メステイソとよばれる、ヨーロッパ人とインディオの混血人を中心に、ムラートとよばれる、白人と黒人の混血人など、さまざまな人々が、いっしょにくらしているけれど、もとからいたインディオの人々は、いまはともすくなく、一パーセントにみたなくなってしまった、という説明があつて、午後は、サッカーのゲームです。

ノートにいっぱい、あたらしい知識を書きこんで、リュラス少年が家に帰りますと、月のおかあさんが、一冊の部厚い本をさしだして、おっしゃったのです。

——この本は、ふるくからの、人類の知恵が、いっばい、書きしるされています。毎日、一頁ずつ、ここをこめて、読みつづけるのですよ。

——はい。

げんきよく、リュラス少年がこたえて、その本をうけとり、背文字の標題をよみとろうとして、夢は、とぎれました。

近所の農園でニワトリがときをつげ、夜明けの光が、さしはじめたのです。

月が、リュラス少年の目と目のあいだから、すばやくぬけだして、空にかえり、やがて、リュラス少年は、めざめて、いいま

た。

——ぼく、きつと、毎晩、夢の中で、あの本、読みつづけます。夢の中で、とつてもかしくなったような気がして、リュラス少年は、おもわず、口笛をふきながら、炭鉱へと、かけだしました。

33 モステイクス(蚊)

じつとりした雨季の雲が、やつと、ギニア湾のほうにながれさつて、ひさしぶりの青空が、エンガウンデレ山地のうえに、ひろがりました。

水かさをましたニヨング川が、まちわびた太陽からさいしょの光をいただいで、キラッキランと、むすうのさざ波を、おどらせました。

でも、太陽をまちわびていたのは、けつして、とおくをながれるサナガ川や、はるかにそびえるカメルーン山ばかりでは、なかつたのです。

そして、そのことを、いちばんよくしっていたのも、やはり、太陽でした。

——フォンチャちゃん、どうしているかな。

ひとり、つぶやきながら、太陽は、 Gondwana大陸ともよばれているあたりの高原の、とあるまちを、みおろしました。

フォンチャです。

まずしい身なりの、ひとりの男の子が、やせほそった手に、しっかりと、なにかをいれた袋をにぎって、太陽を、まぶしそうに、みあげています。

まちかどの、ほそい木や、やつれた草といっしょに、フォンチャのかさかさの顔や手足にも、金いろのあたたかいおもいやりの光をふりかけてやりながら、太陽は、くちをひらきました。

——こんにちは……

その、金いろの光のことばは、地面をはいずりまわるアリや、森の梢にとまった小鳥だけではなく、フォンチャにも、ちゃんと、ききとれるように、おもわれたのでした。

——お陽さま、こんにちは。

また、あなたとおあいできて、ぼく、とつても、うれしいです。

フォンチャは、まちかどのアスファルトの歩道や、公園の草むらで、寝おきしていたのでした。

えっ、家は？

家は、たしかに、ありましたが、麻葉中毒の父親が、いつも、

死んだひとのように、あおじろいすがたで、よこたわっているの
でした。

母親は？

まちがいなく、うみの母親は、おりましたけれど、麻葉におぼれた夫にみきりをつけて、とつくのむかしに、家をで、いまは、まちかどで、ゆきずりの男のひとにからだを売って、生きのびていたのです。

しかし、フォンチャは、父親を、みごろしにすることは、できませんでした。

まちのひとたちに、「モステイクス(蚊)野郎」と、あざけられ、さげすまれつつも、ひっしになって、通行人にお金をせびり、ときには、旅行者のバッグを盗んだりしては、父親の麻葉を買い、わずかばかりのたべものといっしょに、家に、とどけていたのです。

——お陽さま、ぼく、とつてもくるしんです。

してはいけないことばかり、まいにち、まいにち、くりかえして、いるのです。

でも、お陽さま、九つのこどものぼくに、いったい、なにができるのでしょうか。

ほかに、どうしたらいい、と、いうのでしょうか。

電信柱によりすがつて、じっと、太陽のほうをみあげるフォンチャの目に、なみだが、にがい海のように、もりあがつてきました。

——ねえ、お陽さま、ぼく、ほんとうに、どうしたら、いいの
でしょう。

麻薬が、だんだん、値上りして、とってもこまっています
たら、麻薬売りの男のひとが、彼の下ではたらいたら、と
いうのです。

まえよりは、すこし、お金がたくさんはいるようになるか
ら、父親にもつていつてあげるのも、楽になる、と、い
うのです。

——それで、フォンチャちゃん、どうしたの？

とても心配そうに、太陽がたずねますと、男の子は、ほつぺた
を、なみだでぬらしながら、いったのです。

——ぼく、とっても、せつなかつた。

ああ、でも、ぼく、どうしても、父親を、みすてること
ができなかつた。

お陽さま、ほんとうに、おゆるしくください。

ぼく、ひきうけてしまったのです。

太陽は、ほっと、ためいきをついて、いいました。

——それで、手にもっている袋のなかには、麻薬が、はいつて
いるというわけ？

フォンチャが、肩をふるわし、泣きながら、うなづきました。
そのときです。

むこうのほうから、ストリート・チルドレン狩りのオトナの
隊が、あらわれたのです。

——モスティクス野郎がいるぞ！

つかまつたら、たいへんです。

棒でなぐられ、ときには、いのちをおとしてしまいます。

——お陽さま、ぼく、にげなくちゃあ！

太陽も、はやくちで、いいました。

——フォンチャちゃん、気をつけて！

これからも、ずっと、昼はわたしに、夜は、月のおかあ
さんに、なんでも、すつかり、うちあけてちょうだいね……

麻薬の袋をにぎりしめ、ひっしににげていくフォンチャの耳に、
太陽の金いろの光のことばは、ひゅうひゅうという風といっしょ
に、いつまでも、いつまでも、木もれ陽のように、のこったので
す。

34 オアシス

太陽は、もう、ずっとながいあいだ、まばゆい金いろのまなざしを、すこしかげらすようにして、その島を、みまりつつけてきたのでした。

こんぺきのカリブ海にうかぶ、もともとは、珊瑚礁の、虹いろのきらめきにふちどられた、ハイチの島。

でも、太陽は、まちがいなく、しっていたのです。

ヨーロッパ大陸からやってきたはじめての船が、ゴナーヴ湾のうつくしい水に錨をおろしたとき、上陸してきたのは、ふるくからこの島にくらす人々にとって、夢想だにしなかつたわざわいだった、ということ。

ほどへずして、この島の名づけ親のインディオの人々が、ひとりのこらず、すがたをけしました。

たくさんの神々のひそむ森が、たちまち、やきはらわれ、サトウキビやコーヒーの農園がきりひらかれて、アフリカ大陸からさならわれてきた大勢の黒人奴隷が、みじめにはたらきはじめました。

なんという、かなしい光景でしょう。

そして、太陽は、アフリカうまれの黒人奴隷のひとりこそが、いま、ポルトー・フランスのまちの、ウインドワード海峡をのぞ

む浜辺で、うちあげられた魚のようにねむりこけている、マリリーの、とおい先祖なのだ、と、たしかに、しっていたのです。

ああ、一二歳の少女の、マリー！

太陽は、そう、つぶやいて、おもわず、純金の目を、つぶりました。

そして、はるかのかのむかし、ハイチの島にさらわれてきた、マリリーの先祖の、そのまた、ずっと先祖の、アフリカのとある村で、太陽のふりこぼす光をぜんしんに浴びたひとりの母親が、おもわず、太陽にむかつてりよう手をのべ、つぎのように祈ったのを、おもしおこしました。

——ああ、お陽さま。

あなたが、こころをこめて、なでさすってくださいるので、わたしたちの体は、こんがり、あなたの手のひらがふれたしるしの色に、やけております。

ありがとうございます。

どうか、このしあわせを、わたしのこどもに、そして、その子に、いや、えいえんに、わたしの血すじのつづくかぎり、すべての子孫たちに、おあたえください。

わたしたちも、血すじのつづくかぎり、あなたの恵みを、ほめたたえ、声たからかに、あなたの愛を、ほめうたいま

す。

でも、どうでしょう。

アフリカのこの母親の祈りは、いま、カリブ海の波うちぎわに
ねむる、なんびやく年ものちの子孫のマリーに、どう、実をむす
んでいるのでしょうか。

太陽は、うつすらと目をあげ、やせこけたマリーの頬の、ひと
すじの涙のかわいたあとを、みました。

かわいそうなマリー！

太陽は、なにもかも、すっかり、しっていたのです。

雨季には泥水だらけになるスラムの、くちはてた小屋には、八
人も弟や妹が、マリーのもちかえるたべものを、ひな鳥のよう
に、首をながくしてまっていたのでした。

でも、学校にもいけず、読み書きもしらないマリーに、いった
い、なにができたというのでしょうか。

夜のまちかどで、おなじようにまじしい女のひとや、おなじ年
ごろの少女といっしょに、男のひとを、墓地のくらがりにさそい
こみ、からだを売って、ひとりから六グールドほどのお金を手に
いれる以外に、なにができたというのでしょうか。

そのために、エイズという、おそろしい病気のウイルスをう
つされ、発症すれば、ほとんど、いやされる見込みもなしに、死

んでしまわなければならないとしても、飢えた家族のくちにたべ
ものをはこんでいかなければならないマリーに、いま、ほかのな
にができたというのでしょうか。

ああ、ほんとうに、かわいそうなマリー！

わたのようにつかれはて、つらいねむりの底にしずむマリーが、
針で突かれたように、ぴくつとふるえるのを、太陽はみました。

なにかにおびえて、おさないうめき声をたてるのを、ききまし
た。

夜の、くらい墓地での、おそろしいおもいでに、うなされてい
るのでしょうか。

おお、いとしいマリー！

胸を熱くした太陽が、ひとときわもえさかる光で、マリーの、や
つれた頬をなでさすったとき、にわか熱つせられた大気と、ひ
んやりとした海面との温度の差が引き金となって、ふしぎなこと
が、おこったのです。

なにか、とてもなつかしい人の指の感触を感じて、つい、目を
さましたマリーは、ふと、身をおこして、沖をみやり、おもわず、
あっと、声をたてました。

カリブ海の、熱気でゆらゆらとかすむ沖あいに、ふしぎな風景
が、ぼうと、夢のように、うかびあがったのです。

蜃気楼です。

砂漠のはずれに、木々が、さやさやと、うれしそうにしげり、オアシスが、ぼっかりと、水平線のうえに、あらわれたのです。

——ふるさとだわ！

なぜ、そう、くちばしだったのか、マリーにも、わかりませんでした。でも、まちがいでなく、いつか、どこかでみた風景のようにおもえて、マリーは、たちあがりました。

そうだったのです。

それは、たしかに、すうひやく年もまえの太陽がみた、アフリカの、砂漠のはずれの、マリーのおかあさんのおかあさんのそのまたずっと昔のおかあさんがいのつていた、あの、オアシスだったのです。

マリーをかわいそうにおもうあまりの太陽の光が、つい、異常屈折して、太陽の記憶のなかの、ずっとむかしの風景を、蜃気楼にあらわしてしまつたのです。

——わたしの、ほんとうの、ふるさとだわ！

マリーは、りょう手を蜃気楼にのべ、もういちど、さげびました。

すると、どうでしょう。

蜃気楼が、みるみる大きくなって、水平線いっぱいひろがり

はじめたのです。

そして、みるまに、海いちめんのオアシスが、ひたひたと、岸べにちかづき、やがて、マリーを、蜃気楼の風景のなかに、つみこんでしまつたのです。

こんこんとわきでる泉のほとりからは、甘いそよ風がふきおこつて、おいしげるアンズやナツメヤシの木々の、みずみずしい葉を、やさしくゆすつています。

オレンジの実は、太陽のめぐみのひとしづくずつを、つぶらな球のかたちにもすび、ブドウの房は、いつくしみぶかい月の光で、つややかな夜のいろをあらつています。

ああ、なんて、しあわせそうな村なのでしょう。

はたけには、麦が穂をたれ、瓜がまるやかに熟れ、ヤギや牛が、牧草のアルファルファを、無心にたべています。

鍛冶屋さんの店先では、まっかに焼けた鉄を金床のうえでうつ音が、トツテンカンと、たのしく鳴りひびき、ちいさなバザールにあつまつたひとびとは、とりどりの民族衣裳をうつくしくまとつて、のんびりと、せけん話に花をさかせています。

ああ、なんて、平和な村なのでしょう。

そして、とうとう、マリーは、みたのです。

オアシスのはずれの、イチジクの木蔭の草むらにすわっている、

ひとりの、女のひとを。

——おかあさん！

マリーは、声をあげ、かけようと思いました。

でも、マリーがちかずくぶんだけ、蜃気楼のなかのそのひとは、とおのいていくばかりなのでした。

ついに、岸辺の砂にひざまづき、マリーは、りょう手を女のひとのほうにさしのべ、泣きました。

——ああ、おかあさん。あなたがのこしていった弟や妹のために、いま、わたしが、なにをしているとおもいます？

ああ、つらい！ ああ、かなしい！

ねえ、おかあさん。どうしたら、わたしも、いま、あなた
のいる、このともしあわせそうな村でくらしていけるの
ですか？

いえ、どうしたら、八人の弟や妹といっしょに、あなたの
そばで、オレンジの実をたべたり、きよらかな泉の水をの
んだりできるのですか？

おしえてください、おかあさん。

すると、目になみだをいっばいためた女のひとが、ゆっくりと
首をよこにふり、しずかに、いったのです。

——ここは、あなたのおかあさんの、ずっとむかしの先祖がす

んでいた、アフリカの、とある砂漠のはずれの、オアシス
の村なのです。

たまらなくなつて、マリーは、たずねました。

——じゃあ、わたしのおかあさんにそっくりの、あなたは？
すると、女のひとがなみだをぬぐいながら、こたえたのです。

——あなたのおかあさんの、そのまたおかあさんの、ずっと
ずっととおい、なんびやく年もまえの、おかあさんなの
です。

——でも、なぜ、あなたの子孫が、いまアフリカからずつとは
なれたカリブ海のこの島で、ひとにはけっしていえない、
みじめなくらしをしなくちゃあ、ならないの？

——銃をもったヨーロッパのひとびとが、とつぜんオアシスに
やってきて、あなたの先祖を、さらっていったからなので
す。

——どうして？

——奴隷として、ハイチの島の農園に、売るために。

マリーは、りょう手で、髪をかきむしり、声をあげて、泣きま
した。

なんて、むごたらしい運命なのでしょう。

アフリカの、あの、うつくしいオアシスに、いつ、また、かえつ

ていけるのでしょうか。

マリイは、岸辺の砂をかきむしって、泣きました。

そして、泣きつかれたマリイが、ふと、顔をあげますと、いつのまにか、蜃気楼のえがきだした、オアシスの村は、ずっと沖のほうへと、とおざかりはじめていたのです。

——さようなら、マリイ。いつも、このころのなかに、お陽さまの光のふりそそぐオアシスを、けっしてうしなわずに、生きていくんだよ。

女のひとの声が、水平線のほうから、光の波紋となって、かすかに、つたわってきます。

マリイは、だまつて、うなずきました。

やがて、蜃気楼は、すっかり、ゴナーヴ湾の沖にきえうせ、さざ波が、なぎさをしずかにあらっています。

マリイは、泣きはらした目をあげて、太陽を、ふりあおぎました。

光が、いっぱい、あふれて、おもわず目をつぶり、マリイは、つぶやきました。

——お陽さま。

わたし、いつか、きっと、あの、ふるさとのオアシスを、たずねていくわ。

つらいおもいで、太陽は、ゆっくりと、西にかたむきました。

ひよつとしたら、死んでからでなければいけない、マリイの、はるかなふるさとのオアシス。

夕ぐれが、ちかづきました。

もう、すぐ、太陽がしずみ、マリイが、墓場にむかつてあゆみだす夜が、やってきます。

ああ、マリイ。

だれか、この少女を、小鳥がたのしそうにさえずる、ふるさとのオアシスに、いますぐ、つれて行ってあげて！

35 太陽のなみだ

たしかに、太陽は、ア فسコ山のいただきをかすめて、高原都市メキシコ・シティのうえに、金いろのほほえみを、おしげもなくふりこぼすのが、とても、すきだったのです。

それというのも、はるかむかし、この土地の人々が、太陽を神とし、「メシコ」とよんで、あがめていたからなのでした。

そして、いまも、それにちなんで、このあたりを、「メキシコ」とよんでくれていたからなのです。

ああ、アナワク高原をふきめぐる純金の風……すみきった大気

の海にしずむグアダルペの山なみ……テスココ湖のうつくしい
さざ波……

なんて、さわやかで、すばらしかったことでしょう。

でも、ある日、太陽は、はっきりと、みてしまったのです……
愛するメキシコ・シテイの、しあわせそうなひとびとでにぎわう
住宅街に、とつぜんおこった、ほんとうにふしあわせなできごと
を！

自動車の手入れをしていたおとうさんに、だきついて、六歳の
ディアナちゃんは、いいました。

—— パパ、ポルティアを買いにいっていい？

ディアナちゃんの、サクランボウの実のようなほつぺたにキス
にして、おとうさんは、いったのです。

—— ああ、いいとも。気をつけていっていい。

ディアナちゃんが、げんきいっぱい、花びらのように、かけさ
りました。

でも、それつきりだったのです。

すぐ、しんぱいになったおとうさんが、ディアナちゃんのあと
をおつて、かけだしましたが、もう、すでに、かわいいディアナ
ちゃんは、太陽の目にはうつらない、日かげのくらい通りへと、
すがたをけしてしまっていたのです。

—— ディアナ！ ディアナ！

おとうさんは、くるったように、ポルティア屋さんのお店
のあたりを、はしりまわりました。

でも、びつくりして、いっしょにさがす太陽の目にも、ディア
ナちゃんは、うつりはしませんでした。

—— 人さらいだ！ 人さらいだ！

家にもどったおとうさんは、こんどは、おかあさんといっしょ
に、公園や遊園地をさがしまわりましたが、ディアナちゃんは、
もう、けつして、みつかりはしなかったのです。

ああ、なんということでしょう！

電信柱という電信柱に、ディアナちゃんの写真を入れたピラを
はりつけ、道ゆくひとというひとに、チラシをくばっても、ディ
アナちゃんは、みつかりはしなかったのです。

ああ、なんておそろしいことでしょう！

警察署にかけこんでも、おまわりさんは、きこえないふりをし
て、天井に煙草のけむりをはくばかりでした。

ああ、いったい、どうしたらいいのでしょうか！

ところが、数日後、太陽は、ほんとうに、みてしまったのです。
さんさんと、太陽の光のふりそそぐ、まっぴるまの、しかも、
都心の繁華街の歩道を、うまれて三カ月の赤ちゃんをだいてある

いていた、べつのおかあさんに、とつぜん、ふたりのわかい男たちが、おそいかかったのです。

赤い髪の男が、そのおかあさんを、うしろから、はがいじめにしました。

スニーカーをはいた男が、おかあさんの腕から、赤ちゃんを、うばいとりました。

——人さらいー！

おかあさんは、はりさけるような声で、絶叫しました。

でも、だれ一人、助けてくれはしませんでした。

赤ちゃんをうばった男たちは、道ばたにとめてあつた車にとびのると、猛スピードで、はしりさり、あとには、天にむかつて大声で泣きさけぶおかあさんだけが、とりのこされたのです。

——ああ、お陽さま！ わたしの、かわいい赤ちゃんを、どう

か、わたしの腕のなかに、かえしてください！

太陽にむかつて、おかあさんのなみだながらにうったえる声は、メキシコ・シテイの空に、かなしく、せつなく、ひびきわたりました。

ああ、ほんとうに、人って、いったい、なんなのでしょう。

それから、しばらくして、太陽は、愛するわが子をさらわれた、たくさんの、おとうさんやおかあさんが、プラカードをにぎりし

めて、まちなかをデモ行進し、お役所のまえで、なみだながらに、わが子をとりもどすことにちからをかしてくるようにおねがいするすがたを、みたのです。

でも、お役所の人たちは、腕ぐみしたまま、棒杭のように、たちつくすばかりでした。

そして、太陽には、お役人たちの、ことばにならないことばが、きこえてきたのです。

——たしかに、人さらいは、いる。

——太陽の目からののがれ、くらい日かげで、人さらいに精をだしている、大きな組織が、ある。

——さらわれた子は、陽のあたらない、秘密の孤児院に送られ、そこで、ニセの出生証明書が、つくられる。

——それをもとに、太陽にはけつして顔をむけない弁護士が、養子縁組の書類を、つくる。

——やがて、その子らは、こどものほしい、アメリカやカナダやヨーロッパの家庭に、一人一万ドルから二万ドルのお金とひきかえに、養子として、送りだされていく。

——いまや、これは、巨額のお金のうごく、巨大マーケットだ。

——わが国にも、そのおかげで、沢山の外貨が、はいつてくる。
——これは、どうしようも、ない。

——しかも、黒幕には、わが国の有力者がいて、われわれは、手出しもできない。

——ああ、どうしようも、ない。

——さらわれる子は、運が、わるいのさ。

——さらわれた家の人々も、運が、わるいのさ。

太陽は、いつしゅん、みぶるいしました。

金いろのなみだが、キラキラと、メキシコ中の、森やまちや海や人々のうえに、ふりそそぎました。

ああ、ほんとうに、ほんとうに、人つて、いったい、なんなのでしよう。

お役所のまえでは、まだ、わが子をさらわれた、かぞえきれないほどの人々が、なみだながらに、うったえています。

——いつ、もどつてきてもいいように、おへやも、あの日のままに、してあるのです。

——いつでも、かえつてこられるように、わたしたちは、りょう腕をつばさのようにひろげて、まっっているのです。

——ああ、いとしいわが子よ、おまえなしに、わたしは、生きていけない。

——わたしの、たった一つの希望よ。

——わたしの、たった一つの生きがいよ。

——どうか、一日もはやく、もどつてきておくれ。

——そして、わが子をさらわれた親の、この、底なしのくるしみから、一刻もはやく、わたしを、ときはなつてください。

ああ、ほんとうに、ほんとうに、ほんとうに、人つて、いったい、なんなのでしよう。

おもうほど、ますます、せつなくなつて、太陽は、いつそたくさんの金いろのなみだを、メキシコじゅうの、いたる高原や、川や、草むらのうえに、キラキラと、ふりこぼしました。

そして、やがてそのなみだは、シエラ・マドレの山なみにそつて、綿の花が甘つたるくゆるるグアテマラの町の、わが子をだましてとられたおとうさんの、まだながれつづける、かなしみのなみだに、キラキラと、とけて、かがやきました。

そして、さらに太陽のなみだは、サンタ・アナ山をのぞむ、エルサルバルの、ちいさな村の、かつての内戦のとき、ヘリコプターでやってきた兵士たちに、乳呑み児から一四歳の少年までもがつれさられ、どこかに売りとばされてしまったおかあさんたちの、いまも、つぎつぎにあふれでてくる、かなしみのなみだへと、いつそう、キラキラと、とけこみました。

世界じゅうの、わが子をさらわれたおとうさんやおかあさんの、いつまでもながれやまないなみだへと、さらに、キラキラと、ま

ばゆく、とけて、かがやいたのです。

36 あわてんぼうのサンタ・クロース

そして、また、大空の、光りかがやくふたつの目ともいわれる月と太陽こそは、ふたつにしてひとつのところでむすばれた、おあさんのやさしさと、おとうさんのいつくしみぶかきさの、またとない結晶でもあったのでした。

ですから、まひるどき、純金のカマドのようにギラギラもえて、東から西へと空をうつろっていく太陽の背には、いつも、おあさんのような月のところが、びたりとよりそっていましたし、いっぽう、銀いろにほほえみながら、夜の空をわたっていく月の背には、きまつて、おとうさんのような太陽のところが、なかむつまじく、はりついていたのでした。

そんなわけで、世界じゅうの、なんじゅうおく人という、おとうさんのおとうさんのそのまたおとうさんと、おあさんのおあさんのそのまたおあさんの、いとしいわが子へのあたたかいおもいが、そのまま、時代や場所をこえて、空に照りかがやく月と太陽になった、といっても、けっしてふしぎではなかったのです。

そんな太陽ではありませんでしたが、でも、北半球の一二月のすえは、たいへんに、つらい季節でした。

赤道からいちばんとおのいてしまう、そのころは、一年じゅうでいちばんひくい空を、わたっていかなければなりません。から、地上にくらすものにとつては、一年じゅうでいちばんのみじかい昼を、すぎなければならなかったのです。

ところによつては、まったく、太陽が顔をださず、夜のくらさばかりが、巨大なコモリのつばさのように、地上を、おおいかくしたのでした。

—— だけど、空のひくみをあゆむぶんだけ、北半球のこどもたちちの様子が、よくみえるというものさ。

そう、太陽は、ひとりごとをいって、やがて月があらわれる東の空のほうに、わらいかけようとしたが、ふと、ユーラシア大陸から日本列島にむかつて人さし指のようにつきでた朝鮮半島の、つけ根のあたりに目をやり、にわかには、頬をひきしめました。

咸鏡^{ハムギョ}山脉や、狼林^{ナシム}山脉の山ぞいなどの夏の大洪水で、家や田畑をおしながされてしまったひとびとが、耳たぶまでもがこおりついでてしまう、きびしい冬をむかえ、空腹とさむさに、ふるふるふるふるえていたのでした。

さむさをふせぐ手袋もなく、その日のごはんにもことかく、二

〇〇万人もの子どもたちは、どうやって、氷点下のきびしい冬を、生きぬいていけばいいのでしょうか。

太陽は、鴨緑江ヤムルキョウの南がわにひろがる慈江道チヤガンダの山あいの、ちいさな村の金少年キムシヤウが、地面に、一年じゅうでいちばん長い影をひきずりながら、なみだでいっぱい目で、空をみあげ、つぶやくのを、ききました。

——ああ、お陽さま。どうか、夜も、やすまず、空に、あたたかく、照りかがやいて、ぼくたちを、冬のおそろしいさむさから、まもってください。

それから、また、太陽は、朝鮮半島からずっと東のほうに、目をうつしました。

そして、太平洋にむかって、弓なりにはりだした、日本列島の、ちやうど、へそのあたりに視線をこらして、あまりのことに、息がとまりそうに、なりました。

たくさんの人や車でごったがえす、東京のとある高層ホテルの窓で、カナちゃんが、泣き声で、太陽に、たすけをもとめていたのです。

——どうか、お陽さま、おねがいです。
わたしを、このホテルにとじこめて、男のひとのお客をとらせ、お金をふところに入れて、あの、おそろしい人

さらいから、いつこくもはやく、わたしを、すくいだしてください。

なんといいましょう。

一五歳のカナちゃんの身のうえに、いったい、なにがおこったと、いうのでしょうか。

——カナちゃん、なぜ、そこに？

おもわず、光の声でたずねた太陽に、恐怖のあまり、しゃくりあげながら、中学三年生のカナちゃんが、こたえました。

——学校からのかえり道、とつぜん、ちからづくで、自動車のなかに、ひっぱりこまれたのです。

それからは、ずっと、ホテルからホテルへと、ひきずりまわされ、男のひとのなぐさみものに、されました。

にげようとすると、大きなジャック・ナイフをぬいて、おどすのです。

ああ、お陽さま、いま、すぐ、わたしを、ここから、すくいだしてください。

家では、なにも知らない、おとうさんとおかあさんが、どんなに心配して、わたしのかえりを、まっていることか……

なんて、ひどいはなしでしょう。

子どもをまもりそだてなければならぬはずのオトナに、どうして、こんな、悪魔のようなことが、できるのでしよう。

ふっと、大きなため息をついて、かなしみの視線を、日本列島から、はるか南、インドシナ半島のつけ根のあたりにうつした太陽は、タイの、パヤオ県ドークカムタイ郡の、とある村の、ニワトリ小屋からでてきた、おさげ髪、かわいい少女に、ふと、目をとめました。

一三歳のプーが、つと、空をふりあおぎ、ひくみをわたる太陽に、ささやいたのです。

——お陽さま、どうか、わたしが、売られていきませぬように。食事だって、オカズもなしの、ゴハンだけの日がつづいても、けっして、不平はいりません。

竹づくりの、すきまだらけの家は、このあいだの洪水で、また、ひどくいたみましたけれど、けっして、不満はもらしません。

わたしがやしなっているニワトリだって、一日に一五箇の卵しかうまず、二三バツほどのお金にしか、なりません。とつても、まずしいくらいですけれど、でも、おとうさんとおかあさんと、おとうとと、四人で、ずっと、いっしょに、なかむつまじく、くらしていききたいのです。

ああ、お陽さま、ほんとうに、おねがいですから、何方バーツもふところに入れて、わたしを買いにくる、チェンマイの、へんな男のひとの申し出に、おとうさん、おかあさんが、けっして、耳をかすことのないように、ここからいのつてください。

まちには、いい条件のつとめぐちがあるから、とか、家をたてることのできるだけのお金を貸してあげるから、などと、ことばたくみにいいくるめて、とどのつまりは、お金とひきかえに、わたしを、えたいのしれない危険でいっばいのまちにさらっていく、あの、おそろしいひとたちから、どうか、わたしを、まもってください。

それをきいて、とてもこころをいためた太陽が、プーに、たずねました。

——お金と、ひきかえに？

すると、プーが、なみだ声で、いったのです。

——ごらんください、お陽さま。近所の家々は、みんな、とてもあたらしくて、りっぱです。

みんな、その家の女の子たちが、身売りして、建てたのです。

いまでは、古ぼけて、まずしいのは、わたしたちの家だけ

です。

でも、売られていった女の子たちは、みんな、男のひとのお客をとらされ、なかには、エイズにかかって、くるしんでいるお友だちも、います。

地獄の日々だ、と、いいます。

ところが、おとうさんやおかあさんのところにやってくる、近所のひとたちは、娘を売れば、大金が手にはいつて、くらしが楽になるよと、そつと、すすめたりするのです。しかし、おとうさんは、じぶんのかわいい娘を売ってまで、楽をしたくはない、と、きっぱりいいますし、おかあさんだって、一家四人いっしょにくらすのがなによりのしあわせ、と、にっこりわらいます。

ああ、お陽さま、そのまにも、家は、どんどんかたむいていつて、いまにもたおれそうなくあいです。

わたしが、身売りをすれば、きつと、この家だって、御殿のように、りつぱに、たてかえることが、できましよう。

ああ、お陽さま、だけど、やつぱり、わたしは、売られていきたくは、ありません。

おねがいです、お陽さま

どんなに、まずしくとも、わたしが、うまれそだったこの

家で、家族といっしょに、いつまでもくらしていくことが、
できますように！

プーの、りょうの頬つぺたをつたう、あついなみだに、うつくしい宝石のかがやきをそえてあげながら、太陽は、一年じゅうでいちばんはやい日没の地平線へと、しずかに、ちかずいていきました。

そして、ふと、太陽は、もう一七〇〇年もまえの、地中海と黒海にはさまれた、小アジアの、リュキアの、ミュラのまちで、ニコラウスというひとりの司祭のころにはいりこんだ月と太陽が、人さらにさらわれて桶にいれられ、塩漬けにされた三人のこどもをすくいだし、ものみごとに生きかえらせたことを、おもしおこしました。

そればかりでは、ありません。

ニコラウス司祭のころにはいりこんだ、月と太陽は、三人の、まずしくしてお嫁さんにいけない娘たちが、身売って持参金をかせぎだそうとしているのをしつて、金貨のいっばいはいった三本の靴下を、三晩つづけて、三人の窓から、そつとなげこんでやったのを、おもしおこしたのです。

そこで、とつさに名案をおもいついた太陽は、東京の高層ビル街や、慈江道チャガンドの山あい、そして、ドークカムタイの山かげに、ゆつ

たりとしずんでいきながらも、ようやく東の空にすがたをあらわしかけた月に、こうはなしかけたのでした。

——ねえ、お月さま。きょうは、ちょうど、十二月二二日。クリスマス・イブには、あと二日ありますけれど、金くん、カナちゃん、プーちゃん、そして、すくいをもとめている、北半球の、いや、地球上の、むすうのこどもたちに、すこしはやめのクリスマス・プレゼントをとどけてあげよう

じゃあ、ありませんか。
それをきいた月は、うれしそうに、銀の声をふるわしました。
——じゃあ、わたしたち、二日はやめの、すこしあわてんぼうのサンタ・クロースになれば、いいですね。
すると、まあ、どうでしょう。

西のほうの夕焼けが、いつせいに、よろこびの火のように、もえあがつて、空いっぱい、かがり火を焚いたのです……むかしのひとたちが、太陽の熱と光のよみがえりをいのって、ぼうぼう焚いたとおなじ火を。

そればかりでは、ありません。
東のほうでは、天のふかい青が、空いっぱい、もう枯れることのないヒイラギの葉のいろを、はためかしたのです……かつてのひとびとが、ほろびることのない命のシンボルとしてかぎった

常緑樹とおなじいろを。

びっくりしたのは、慈江道の山あいの、火のけのない家でふるえていた、金少年です。

夕ぐれ空に、ときならぬ、トナカイの鈴の音がしたかとおもうと、窓べに、まっしろいひげ、まっかな服と赤ズキンに、長くつをはいた、サンタ・クロースのおじいちゃんが、たそがれの光でできたトナカイとソリをあやつって、あらわれたのです。

二日はやめの、すこしあわてんぼうの、サンタ・クロースの出現です。

あつとおどろく金少年の目のまえで、エントツからころげでた靴下が、パツと、くちをひらきました。

と、まあ、どうでしょう。
ちかくのくにやとおくのくにのひとびとからの、毛布やお米などのプレゼントが、どつと、あふれたのです。

——金くん、大洪水、たいへんでしたね。でも、めげずに、がんばって、この冬を、生きぬいてください。

はげましのお便りまでが、ひらひらと、蝶のように、うつくしく、舞ったのです。

そして、金くにまけないほど、びっくりしたのは、東京の高層ホテルの一室にとじこめられた、カナちゃんです。

おなじように、夕焼け空からすべりおりてきた、ときならぬサンタ・クロースが、換気口から、ぼとりと靴下をなげ入れたのです。

ちょうど、人さらいは、部屋に鍵をかけて留守でしたので、靴下からこがりてた、携載電話とメモを、カナちゃんは、しっかりと、むねにだきしめました。

——イマ・スグ・メモノ電話番号ヲ、プツシユシテクダサイ。
タスケガ、キマス。

コレニクジケズ、シツカリ、生キテイツテクダサイネ。

カナちゃんをひつしにさがしまわっていたたくさんのひとびとの、メッセージだったのです。

いっぽう、金くんやカナちゃんとおなじほどこきもをつぶしたのは、ドークカムタイの、いまにもつぶれそうな家でくらすプーちゃんでした。

ときならぬトナカイのソリの鈴の音といっしょに、夕焼けいろのサンタ・クロースが、屋根のやぶれめから、黄金いろに光りかがやく金貨のはいった靴下を、ぽんと、投げいれていったのです。ちかくのくにや、とおくのくにのひとたちが、じぶんのたべものや着るものをすこしがまんして、おくつてくれた、いつくしみの金貨だったのです。

——プーちゃん。

もう、売られていかに、すみませよ。

この金貨で、家をなおし、一家四人、いままでどおり、しあわせに、生きていってください。

こころのこもったお手紙が、はらはらと、夕べの光のように、ちりこぼれました。

——お月さま、すこしあわてんぼうのサンタ・クロースでしたけれど、やつぱり、おもいついて、よかったですね。

太陽が、いつしゅん、たちどまりますと、月が、にっこりして、いいました。

——でも、お陽さま。まだまだ、あわてんぼうのサンタ・クロースをまっている、北半球や、南半球の、ふしあわせなこともたちが、いっばいおりますよ。

こうして、ときならぬサンタ・クロースに身をやつした月と太陽は、日没のいつしゅんまえの子らに、すこしはやめのクリスマス・プレゼントをくばりおえると、くれなずむ空を、西と東に、わかれていったのです。

37 アルコルの少年

そのとき、半月があおじろく照らしたのは、一面、サファ
イアのひとつぶずつが、大海原のように光ってつづく、夜の砂漠
でした。

どこまでいってもひとつ子ひとりいない、うねうねとしまり
かえった、アラブの砂漠。

さびしさのあまり、月が、プラチナの皿のようにふるふるゆれ
ますと、砂漠全体が、あおい光の肩をふるわせ、すすり泣くので
した。

そして、ほんとうに、月は、どこからか、かすかなうめき声か
おこるのを、きいたようにおもったのです。

鯨の背のように波うつ砂丘のかげで、だれかがみじろいだよ
うに、おもったのです。

月の銀のまなざしは、さらさらと、砂丘のかげにふりこぼれ、
そこによこたわる、やせこけたひとり少年と、息もたえだえの
男とを、あわく、照らしだしました。

——ああ、腹がすいて、もう、死にそうであ。

男の手が、ゆつくりとうごいて、靴の底にかくしもったナイフ
をとりだすのをみて、少年は、せいいつばいの声で、いいました。

——ぼくは、もう、どうなっても、いい。さあ、そのナイフで、
ぼくをころし、すつかり、たべてしまってください。
あなたは、きつと、生きのびて、この砂漠から、ぬけだせ
るでしょう。

男は、ナイフを、ふりあげました。

あつ、と、声にならない声をあげた、半月のうろたえが、光の
しぶきとなつて、ナイフの刃にくだけ、うつくしく鳴りました。

少年の首すじめがけてふりおろされようとしたナイフは、虚空
にふるえてとまり、ついに、はたりと、砂のうえに、おちました。

——だめだ、やっばり、ころせない。

ふうつと大きな息をはくと、男は、つめたい砂に、あおむけに、
よこたわりました。

いっしゅんの死の恐怖からときはなたれて、少年も、男のすぐ
そばで、やっばり、あおむけに、よこたわりました。

男は、なん人ものひとをころした大泥棒で、少年は、政府軍の
兵士になるのをこぼんだため、ふたりは、くらい牢獄に、とじこ
められてしまったのです。

そして、いよいよ、明日は銃殺という、そのまえの夜、ふたり
は、牢獄の檻をやぶり、たかい塀をこえて、砂漠にのがれたので
す。

——なぜ、大泥棒のおれなんかと、脱獄したんだ。

——あなたが、右足に、ひどい怪我をしていたからです。

ふたりの頭上には、黒真珠の光をといてながしたような夜空が、ひたひたとひらけ、北斗七星が、七つの宝石をつらねて、ひとときわ、まばゆく、またたいておりました。

ふたりは、だまって、空をみあげました。

星座のふりこぼす光が、つめたい水のしずくのように、ふたりの、かわききったのどを、さわやかにうるおしてくるような気がしたのです。

少年が、ぼつりと、口をひらきました。

——ひしゃく星は、ぼく、大好きなのです。

ひしゃくの桶のはじから、ドウベ(熊)、メラク(腰)、フェクダ(腿)、メグレッツ(尾の根)、アリオト、ミザル(帯)、そして、アルカイド(葬式の長)。

みんな、砂漠の民がつけた名です。

でも、ぼくがいちばん好きなのは、ミザルのすぐそばにまたたいている、五等星のアルコル(乗り手)です。むかし、砂漠では、アルコルをみわけられたら、目の検査に合格して、りっぱな兵士になれたのです。

——それなのに、どうして、おまえは、兵士になるのをことわっ

たんだ。

——ぼく、空いっぱいにもまたたく、かずしれない星のことをばききとる、詩人になりたかったのです。

そのとき、ほんのすこし、北斗七星が、地上のほうにかたむいたようにおもって、大泥棒が、いいました。

——おれが、うまれ故郷にまいもどって、パン屋をおそったとき、警官隊におわれて、いつしか、おふくろの家ににげこんだ。おふくろは、とっさに、おれと警官隊のあいだにたちばかり、銃弾をあびながら、おれをにがしてくれた。あのおふくろなら、きっと、いま、空で、ひしゃく星の柄を、にぎっている。

きっと、ひしゃくで、銀河の水をくみ、おれたちに、腹いっぱい、のましてくれる。

のどがかわいて、もう死にそうな少年が、おもわず、頭をあげて、いいました。

——まちがいなく、ひしゃく星は、ぼくらのほうに、かたむきました。

そのときです。

夜空のたかみから、女のひとの声が、やさしく、せつなそうに、ひびきました。

—— 銀河の水は、どちらかひとりしか、のめないのです。

おもわず、宙にさしのべたふたりの手が、氷りました。

そのまにも、ひしゃく星は、ゆっくりうごいて、銀河の水をくみ、しずかにむきをかえて、ふたりのよこたわる砂漠へと、おりてきたのです。

ひしゃくのへりからこぼれおちる水のしずくが、キラキラと、月の光にきらめいて、銀のなみだのように、砂漠にすわられています。

ひしゃくの桶が、目のまえにちかづいてくるのをみて、大泥棒が、さげびました。

—— おれのおふくろの水だ。おれがのむぞ。

桶に手をかけ、口をあけて、銀河の水をのもうとした大泥棒は、しかし、ふと、少年のほうをみ、やがて、涙ながらに、いったのです。

—— やつぱり、ひとりじゃあ、のめない。さあ、おまえ、のめ。

—— ありがとう。でも、ぼくは、ほんとうに、もう、あるく力もないのです。

あなたがのんで、砂漠をこえてください。

そのまにも、ひしゃくは、ずんずんかたむいて、ふたりのすぐそばまで、おりてきました。

—— はやく、のめ。でないと、ころすぞ。

大泥棒は、ナイフをふりあげて、さげびました。

—— でも、これは、あなたの水です。

少年が、さげびました。

かたむききつたひしゃくからは、銀河の水が、さらさらとながれだし、砂漠にすわれて、とうとう、一滴のこらず、きえていったのです。

大声をあげて、大泥棒が、泣き伏しました。

少年の、枯枝のようにやせほそった手を、しっかりとぎって、いったのです。

—— おれたち、いつか、きっと、銀河のほとりで、また、会える。

すっかり、銀河の水をふりこぼして、ひしゃく星は、また、ゆっくりと、もとの空のたかみに、のぼっていきます。

少年が、さいごの力をふりしぼって、いいいました。

—— さあ、はやく、ぼくをたべて、砂漠をこえてください。

大泥棒も、さいごの力をふりしぼって、いいいました。

—— おれたち、いつまでも、いっしょにいこう。

おもわず、まっさおな肩をふるわして、その夜の半月は、砂漠のはてへとむきをかえ、もう、あのふたりが、けっしてたどりつ

くこののできない、はるかとおくの地平線に、すすり泣くように、しずんでいったのです。

38 少年兵

月が、のぼりました。

ひんやりした銀いろのしずくは、丘に、木だちに、家々に、わけへだてなく、ふりそそぎました。

そうです。

月の光は、ザイルルにすむ、どんなひとにも、小鳥にも、虫にも、ひとしく、夜のいつくしみを、おくりとどけようとしていたのです。

でも、ルワンダから、やっとのおもいでのがれてきたひとびとでいっばいの、この、ブカブのキャンプでは、すこし、ちがいました。

夜つゆにしめった天幕をすかして、ほのじろい月の光は、なかなかねつかれないトワミングちゃんを、すきとおった蝶のはねのように、やさしく、つつんであげたのです。

「おかあさん」

声にならない声でつぶやいたトワミングちゃんの目に、なみだ

が、あつく、こみあげました。

どうして、こんなことに、なってしまったのでしょうか。

むかしからのあらそいが、やっど、おさまりかけて、村にも、つかのまの、しあわせな日々が、おとずれかけていたのです。

すでに、おとうさんは、トワミングちゃんのうまれる、すこしまえのあらそいで、いのちをおとしましたので、かれは、おねえちゃんといっしょに、おかあさんのはたけしごとをてつだっていたのです。

でも、ちいさな村の、ささやかなくらはは、四月で、一変しました。

おそろしいころしあいのうわさが、ながれてきたのです。

おかあさんは、万一のことがあつては、と、おねえちゃんのあたまを、つるつるぼうずにしてしまいました。

銃や刀をもった男たちに、らんぼうされるのをおそれたのです。でも、むだでした。

ある日、村にはいりこんできた男たちが、おねえちゃんをみて、いったのです。

「少年兵が、ひとり、みつかったぞ」

ひっしにかばおうとするおかあさんを、銃で射ちころすと、男たちは、おねえちゃんを、さらっていつてしまいました。

こうして、八歳になったばかりのトワミングちゃんは、あつというまに、ひとりぼっちになってしまったのです。

かなしいできごとは、つづきました。

二、三日後、こんどは、べつの男たちがやってきて、村に火をはなつたのです。

まっかな火をあげてもえあがる家をあとに、トワミングちゃんは、むがむちゆうで、はしりました。

どうしてなの？

ぼくが、いったい、なにをしたというの？

そういつて、泣きながらはしるトワミングちゃんに、こたえてくれる風もなかったのです。

でも、八つの男の子が、どこまで、にげられましょう。

すぐに、武器をもった男たちに、とらえられてしまいました。

「ころしてしまえ」

くちびるのあつい男が、いいました。

「すこしは、役にたちそうだから、おれたちの銃をみがかせよう」
耳の大きな男が、いいました。

こうして、トワミングちゃんは、男たちの兵舎につれていかれ、血まみれの刀をふいたり、汗でぐっしよりの軍服のせんたくをしたりしはじめたのです。

そして、たたかいがはげしくなると、銃の射ちかたまで、おしえこまれたのです。

その日は、兵舎には、わずかな男たちしか、のこっていませんでした。

夕焼けが、西の空を、血のいろに、そめるころ、べつの男たちが、せめてきたのです。

トワミングちゃんは、窓のへりにおいた銃を射つ役めでした。
やがて、ひとりの少年兵が、銃をかまえ、しのび足でちかずいてきました。

でも、トワミングちゃんをみつけると、あつと、おどろいて、

たちどまり、銃をおろして、なにか、はなしかけようとしたのです。

す。

銃声が、なりました。

おそろしさのあまり、トワミングちゃんが、ひきがねを、ひいてしまったのです。

むねをうちぬかれて、たおれる少年兵の、いっしゅんの顔の、なんて、さらわれていったおねえちゃんにそっくりだったことか。

だが、あとのまつりでした。

やがて、射ちまかされ、いきのこった男たちは、兵舎をすてて、北にはしりましたが、トワミングちゃんは、南にはしって、国境

をこえ、このキャンプに、にげこんだのでした。

月の光が、あおじろく、よんでいようようです。

トワミングちゃんは、そつと、おきあがり、はだしのまま、そとにでました。

地めんが、海のように、あおく、けぶっています。

月は、ちようど、かれ木のえだにつかまって、ひとやすみしているように、みえます。

——おかあさん

ちいさな声で、トワミングちゃんは、月に、いいました。

すると、月が、かすかに、ほほえみ、こたえてくれたように、おもったのです。

——かわいそうな、トワミングちゃん。なんでも、わたしに、

おはなししていいんだよ

かれ木のみきにとりすがって、トワミングちゃんは、泣きながら、いいました。

——ぼく、とつても、くるしいのです。やっぱり、あの少年兵

は、おねえちゃんだったんでしょ？ ああ、どうして、

ぼく、あんな、ひどいこと、してしまっただろう。ちいさいころから、ずっと、いっしょに、くらして、ひでりで

不作のときには、じぶんのたべるぶんまで、ぼくにわけて

くれた、あの、やさしいおねえちゃんを、どうして、ぼく、銃で射ったりしてしまったのだろう。

泣きやまないトワミングちゃんを、そつと、つつんで、月の光は、いつまでも、いつまでも、こもりうたのように、ゆれていたのです。

39 空の焚火

冬ごもりにそなえて木の実をせつせと集めるリスにも、枯れたヨモギの草むらにも、わけへだてなく、あたたかい光をふりまいた太陽が、戦火に焼かれた海ぞいのまちの西空に、ゆつくりと、沈みはじめました。

ルビーいろの浜薔薇の実のように、大きく、もえて、かたむいたのです。

水平線に、そつとふれかけたとき、まちははしりぬけた男の子が、波うちぎわにたつて、さけびました。

——まって、お陽さま。

冬もまじかなのに、はだしの足が、つめたそうです。

すりきれてぼろぼろの服から、あかだらけの背中がのぞいています。

いっしゅん、しずむのをやめて、太陽が、こたえました。

——おや、ホーちゃん。どうして、おうちにかえらないの？
泣き顔になったホーちゃんが、けんめいに涙をこらえて、いい
ました。

——空襲で、おうちもみんなやけ、ぼくだけが、たすかった。

——ひとりぼっちなの？

——うん。まちかどでくらしているんだけど、夜は、とつても

さむい。

ねえ、お陽さま。いつまでも、お空で、ずっと、あたたか
く、もえていてちょうだいな……

太陽は、はっとしました。

カナリヤのさえずっていた、花園のようにあかるい部屋……お
とうさんのパイプの煙……おかあさんの皿をあらう音……妹のわ
らい声……

それらは、いったい、どこにいつてしまったのでしょうか。

ちろちろと焰の舌でうたうストーブ……シーフォンケーキのお
いしそうなにおい……ゆっくりと時をきざむ柱時計……

それらを、幼いホーちゃんから、ちからづくでうばいとつたの
は、ほんとうに、だれなのでしょう。

なんとかしてあげなくっちゃあ、と、太陽は、おもいました。
でも、太陽だって、この、大きな大きな宇宙のきまりにしたがっ

て、空をめぐっているだけなのです。

ふと、おもいついて、太陽は、にっこりわらいました。

——ホーちゃん。わたしは、いつまでも、あつい焚火のように、
ぼうぼうもえているから、ホーちゃんが、わたしをおつか
けてくるといい。

ホーちゃんは、びっくりして、目玉を、ぐりつとさせました。

——でも、どうやって、海のうえをわたるの？

水平線のかげに沈みながら、太陽が、いいました。

——ほら、わたしの、赤くかがやく光のかげが、ホーちゃんの
足もとの水のうえから、わたしまで、ずっと、つづいてい
る。その、光のみちなら、海のうえだって、あるいてこら
れるよ。

太陽は、もう、すっかりしずんでしまいそうです。

ぼうぼうもえる、あつい焚火が、なくなってしまうそうです。

ホーちゃんは、けっしんして、波うちぎわにうつっている太陽
のかげに、足をふみだしました。

あるけるのです。

光のみちを、まっすぐに、太陽にむかって、すすんでいけるの
です。

——さあ、ホーちゃん、いそいで！

太陽がしずめば、光のみちも、きえてしまいます。

ホーちゃんは、焚火にちかづくように、りよう手を太陽にかざし、いそぎ足から、とうとう、かけだしました。

かすかな水しぶきの音が、はだしの足を、つめたい焰の舌のようにくすぐるだけで、いっこうに、水の底にしみはしません。

しかも、ちかづけばちかづくほど、夕陽はしずむのをやめ、水平線すれすれに、熱くもえて、ホーちゃんのりよう手を、ほのぼのと、あたためてくれるのです。

——わーい、お陽さま、とつてもすてき。

ホーちゃんが、うれしさのあまり、山火事のようにさげびますと、その声は、みるみる、海ぞいのべつのまちの、やっぱり、おうちをうしなつて、まちかどでくらすスーちゃんの、寒さにかじかみかけた耳に、もえうつりました。

——ホーちゃん。わたしの手、とつてもつめたいけれど、海のうえの、光のみちをつたつて、お陽さまの焚火にあたりにいつてもいいかしら？

すると、太陽が、ひまわりのようにあかるい声で、いったのです。

——いいともさ。だれだつて、りよう手をかざして、焚火のそばにやってくるかい。

——ありがとう、お陽さま。

こうして、ホーちゃんのすぐあとから、スーちゃんが、そして、やがて、ききつけた、もつとべつのまちのホワンちゃんも、いや、むすうの、家をうしなつて、まちかどにくらす、ふしあわせな子らが、光のみちを、夕陽めがけて、はしつたのです……

いいえ。

海がおわつて、陸になつても、地上すれすれにかぶ光のみちを、ストーブのぬくもりも、スープのにおいも、あたたかいベツドのやすらぎもうしなつた、世界じゅうの、かぞえきれないほどの子らが、りよう手をまえにのべ、頬を、あかあかと夕陽にそめながら、うれしそうに、はしつたのです……もう、けつして、太陽がしずんでさむい夜がやってこないようにと、いっしょうけんめい、夕べの光のみちを、息せききつて、はしつたのです……もう、いつまでもしずむことのない夕陽にむかつて、もうけつしてもえつきることのない空の焚火にむかつて、いっしんに、はしつて、はしつて、はしつたのです。

40 夜空のおかあさん

地上からみあげる今夜の月は、いつくしみのところをのせた銀

の皿のように、うつくしく、さえわたっておりましたが、いつぼ
う、月のほうからみえる地球も、また、水いろにけぶる宝石のよ
うに、うつくしく、夜空のはてに、うかんでおりました。

でも、月の光にてらされた地上のいたるところには、くる
しみにあえぐこどもたちが、その夜も、寝ぐるしい時を、おくれ
ていたのです。

——たしかに、とおくからみえる地球は、水いろの宝石ですけ
れど、ちかづいて、よくみますと、その水いろには、つら
い日々をおくるこどもたちの、かなしみのなみだが、とけ
こんでいるんだわ。

そうおもうと、もう、いてもたってもいられないようなきもち
になって、月は、地上の、とあるまちの、そまつなアパートの一
室の窓から、そつと、銀いろの光のまなざしを、へやのなかに、
すべりこませました。

椅子ひとつないへやの、よごれた床ゆかに、ひとりの少女が、ぐつ
たりと、よこたわっています。

もう、たつことができず、息もたえだえの、一六歳の少女！
そばには、麻薬をうつ注射筒が、ぶきみな針を、光らせていま
す。

少女は、麻薬の常用者だったのです。

麻薬中毒になって、もう、なんにちも、床によこたわったきり、
飲まず食わずで、とうとう、たちあがるのが、できなくなった
のです。

——このままでは、死んでしまうわ！
でも、少女をすくいくるひとは、どこにもいはいしませんでし
た。

えつ、りよう親は？
三年まえ、少女のりよう親は、ひきさかれました。
離婚したのです。

はげしいショックが、りよう親を信じきったていた少女を、お
そいました。

絶望のあまり、糸のきれた凧のようになった少女は、家をとび
だし、もう、にどと、かえりはしませんでした。

いくあてもなく、まちかどにたちすくむ少女をみて、ほくそえ
むオトナたちが、おりました。

暴力団です。

——おれたちが、しあわせにしてあげるよ。

男たちは、少女を一室にとじこめ、泣きさけぶ少女をしばらくあ
げたすえ、なんにちも、麻薬を注射しつづけました。

麻薬中毒患者にしたのです。

もう、麻薬なしにはいきられなくなった少女は、麻薬をちらつかせる男たちのいいなりに、いろいろな悪事をはたらくようになりしました。

道ゆくお年寄りをだましてお金をまきあげたり、ときには、幼い子どもをナイフでおどしたりしました。

でも、麻薬の海におぼれてしまった少女は、とうとう、男たちの悪事を手伝うことすら、できなくなってしまうたのです。

——おかあさん……

床によこたわったきりの少女が、さいごの声をふりしほって、つぶやきました。

月が、その、かすかな声を、ききました。

矢も楯もたまらず、少女に、よびかけました。

——しっかりしなければ、だめよ！

でも、その銀いろの光のことは、少女のいろあせた髪に、すきとおった花びらのように、はらはらと散りこぼれるばかりだったのです。

ああ、ほんとうに、なんとかしなければ！

月の、そのきもちが、つうじたのでしょうか。

うつすらと目をあけた少女が、キラキラと床にくだけちる、月の光をみました。

頬に、のこり火のようなほほえみが、うかびました。

——お月さまの光だわ。

月は、ここぞとばかり、銀いろの光を、少女のまわりに、ふりこぼしました。

じぶんのからだをけずるようにして、うつくしい光のしずくを、ふりこぼしました。

すると、どうでしょう。

少女の右手が、かすかにかすかにうごいて、月の光のほうに、そっと、手のひらを、ひらきはじめたのです。

やせほそって、ガラス細工のようにすきとおった、手のひら。

——かわいいそうに！

月は、あおじろい花のようにひらいていく、少女の手のひらに、ありつたけの銀の光を、ふりこぼしてやりました。

銀のなみだを、キラキラキラと、ふりこぼしてやりました。

——ああ、とっても、きれい……

つぶやいた少女が、力なく、目をとじようとしてました。

目をとじたら、もう、おしまいです。

——だめよ！

月が、ひつしに、さげびました。

その、銀いろの光の音が、少女の、いまにもとじられようとし

た、りょうの臉に、天上からのつめたいしずくのように、ふれたのでしうか。

少女が、かすかに、目をひらいたのです。

そして、そのとき、月は、アパートにむかつて全速力でちかづいてくる、パトカーと救急車を発見して、おどりがりました。悪事がばれ、警察につかまった男たちが、少女のことを、すっかり、白状したのです。

*

やがて、月は、病院の窓へのベッドで、緊急手当をうけ、こんこんのねむる少女の、やつれはてた頬に、ひとすじのなみだが、うつくしくきらめくのを、みました。

——おかあさん……

かさかさにかわいたくちびるから、かすかな声がちりこぼれるのも、ききました。

*

それから、一カ月ほどたった、とある夜、月は、まちはずれの、まっしろい建物のベランダで、じっと、月のあらわれるのをまっている、あの少女をみつめました。

いまは、もう、ふつくらとした頬の、すこやかそうな少女は、とくべつの施設で、いっしょうけんめい、おべんきようにうちこ

んでいたのでした。

——お月さま。いつかの夜は、ほんとうに、ありがとう。

あしたは、おかあさんが、たずねてきてくれます。

でも、わたしには、あの夜、おかあさんが、お月さまのすがたになって、わたしをすくいにやってきてくれたようにおもえて、しかたないのです。

夜空のおかあさん、ほんとうに、ありがとう。

月は、だまって、少女の、すみきった瞳に銀いろの光のキスをしてやりました。

——げんきになって、ほんとうに、よかったわねえ。

月の、天上からのことばが、ききとれたような気がして、少女は、空をみあげ、やがて、だまって、こくと頭をさげ、もういちど、いったのです。

——夜空のおかあさん、ほんとうに、ほんとうに、ありがとう。

41 月と太陽のねがい

かつて

だれもはかりおえることのできなかつた

空のふかみに

ひとつぶの真珠が
うかんでいます

地球です

とおくはなれるほど
宝石のかがやきをはなつ
うつくしい星ですが

ちかづきますと
だれかの泣き声にみちあふれた
かなしい星です

かぞえきれないほどのこどもたちが
こころないオトナたちの
おろかなふるまいの犠牲になって
いためつけられ
くるしみ
泣いているのです

あまりにも

そのかずが多いので

地球いっぱいにもちあふれた

その

みじめな泣き声は

太陽系じゅうに

せつないこだまとなって

波うちます

でも

泣いているのは

こどもたちだけではありません

きりたおされていく木も

ふみにじられる草も

よごされる大気も

にごっていく川も

けがされる海も

やっぱり

泣いています

声をあげ

肩をふるわして

泣いています

赤むくれになっていく大地が

絶滅していく虫やけものや花が

身をよじり

もだえくるしみ

泣いています

かんがえのたりないオトナたちの

乱暴なおこないのせいで

地球ぜんたいが

傷つき

いたみ

泣いています

どうか

昼と夜の地球に生きる

オトナのあなたよ

これいじょう

地球を泣かせないでください

子どもたちは

地球のいのちそのものです

こどもが泣くとき

地球も泣きます

どうか

いちにちじゅうの地球に生きる

オトナのあなたよ

非力な子どもたちにたいして

もつと

やさしくなってください

それは

あなたが

あなたじしんにたいして

もつとやさしくなることを
意味します

それは

あなたが

地球上のあらゆる生命にたいして

さらにやさしくなることを

意味します

そして

それは

あなたが

あなたのふるさとである地球にたいして

ほんとうにこころの底からやさしくなることを

意味します

きょうからあすへとむかう地球に生きる

オトナのあなたよ

どうか

こどもたちの泣き声はやむように

いっしょうけんめい

はたらいてください

どうか

たいせつな生命の泣き声はやむように

こころをこめて

仕事をしてください

どうか

地球の泣き声はやむように

しんげんに

なにかをしてください

かつて

だれもはかりおえたことのない

空のふかみに

ひとつぶの真珠が

うかんでいます

地球です

その

うつくしい宝石の顔が

かなしみのなみだでもることのないように

オトナのあなたよ

まことをつくし

汗にまみれ

頬をもやし

くちびるをかみしめ

はたらいてください

かつてこどもであったあなたよ

未来からやつてくるもうひとり
のういういしいこどものじぶん
をまちうけているあなたよ

月のおかあさんのねがいと

太陽のおとうさんのいのりを

いつも

銀の光 金の光として

こころの奥ふかくにやどすことのできる

世界じゅうの

オトナのあなたよ

それぞれの作品と、ユニセフの「こどもの権利条約」(正式には「児童の権利に関する条約」とのかかわり。

前文 月と太陽とこどもたち

前文は、すべてのこどもが、世界的な約束にもとづき、あたたかい家庭や地域で、すくすくと育てられなければならぬ、とべています。わがこをいつくしむおとうさんやおかあさんの愛は、空に照りかがやく太陽と月のように、かぎりない光のみなもとなのです。

1 いのちのふるさと

第一条は、「こどもの定義」についてです。一八歳になるかならないかの、たくさんのこどもたちが、戦乱や環境破壊や貧しさ、さらには人間不信の犠牲になって、くろしんでいます。

2 月と太陽とピササ

第二条は、「非差別」についてです。どんなこどもも、わ

けへだてなく、人間らしく生きる権利をもっています。しかし、いくさ狂いのオトナたちのおとしていった不発弾は、ピササ少年のいのちをうばおうとしています。

3 ミンガラバ(こんにちわ)!

第三条は、「こどもの最善の利益」についてです。雨季の泥んこ道をすすむ保健婦のルインさんのころには、やがてうまれようとしている赤ちゃんへの太陽の愛が、あたたかく、やどっています。

4 月のおかあさんのねがい

第四条は、「権利の実現」についてです。こどもの、しあわせに生きる権利は、世界的な約束にもとづいて、きちんと実現されなければなりません。多くのオトナたちは、そのことを、どう考えているのでしょうか。

5 太陽のおとうさんのねがい

第五条は、「親の指導と子どもの発達する能力」についてです。りよう親や家族は、ひとりひとりのこどもにふさわしい育てかたをもたなければなりません。ふるさと

の地球をけがし、こわしているのも、また、オトナではないでしょうか。

6 水を……きれいな水を！

第六条は、「生存と発達」についてです。地球上の子どもたちは、ひとりのこらず、すこやかに生き、すくすくと育つことを約束されているはずなのに、きょうも、ムセレットちゃんは、午前二時に起きて、片道二時間もかけ、谷底の、よごれた水をくみにいかなければならないのです。

7 トマト、待てえ！

第七条は、「名前と国籍」についてです。すべての子どもは、親のもとで、氏名と国籍をあたえられ、いつくしみぶかく育てられる権利をもつべきなのに、リリちゃんの国籍は、どこにいつてしまったのでしょうか。

8 銀の鈴

第八条は、「アイデンティの保護」についてです。どんなうまれのこどもも、きちんと、氏名と国籍と家族をもち、

じぶんらしく生きていくべきなのに、スラムの、ゴミの山でくらすこどもたちには、なんの保証もありません。

9 月のあわせ鏡

第九条は、「親からの分離」についてです。こどもは、親とくらすのがいちばんのしあわせですが、アンドレは、大好きなおかあさんといっしょにくらすことができないのです。

10 光の電話

第一〇条は、「家族の再会」についてです。家族は、自由に会うことができるはずなのに、アダムとおとうさんは、九〇〇〇軒もはなれて、べつべつにくらさなければなりません。

11 潮騒

第一一条は、「不法移送と帰国」についてです。こどもは地上でもっとも価値ぶかい宝であるのに、あまりの貧しさに、わが子を人さらいの手にうりわたす親が、あとをたちません。

12 一万四千年後の拍手

第一二条は、「ごどもの意見」についてです。しつかりとじぶんの意見をのべる権利は、とても大切なものですが、ケンちゃんは、じぶんの考えをのべたために、いじめにあってしまいました。

13 ピアノの休戦

第一三条は、「表現の自由」についてです。ピアニストとして、芸術表現をしたグループの演奏が、戦場に、つかのまの休戦をもたらすことができました。

原 子 修

14 ハコボ

第一四条は、「思想、良心、宗教の自由」についてです。先住民族のくらしの智恵を守ろうとして、家族を銃殺されたハコボ少年は、でも、きっと、たくましく生長していくことでしょう。

15 初出演

第一五条は、「結社の自由」についてです。遊び場の環境調査グループを結成したジョンをばげまそうとして、太

陽は、劇に出演することを約束します。

16 靴をはいた影ぼうし

第一六条は、「プライバシーの保護」についてです。家や道や公園でたのしくくらししているごどもたちが、とつぜん、射ち殺される、という、かなしい出来事が、あとをたちません。

17 秘密の贈りもの

第一七条は、「適切な情報の入手」についてです。戦火のまちで、ごどもたちのラジオ局の放送が、砲撃で中断されたとき、とつさに、月が、秘密の贈りものをします。

18 ノルマンディーの虹

第一八条は、「親の責任」についてです。地球上には、じぶんの欲望をみたすために、わが子をみすてる親が、すくなくはないのです。

19 夜空のプレイランド

第一九条は、「虐待や放任からの保護」についてです。ま

20 月の子守唄

ちかどでくらすストリート・チルドレンを、月は、夜空の壮大なプレイランドに招待します。

第二〇条は、「家族のない子どもの保護」についてです。戦乱のためみなしごになった子どもたちが、特別のキャンプで、傷ついたところをいやそうとしています。

21 メリー・クリスマス

第二一条は、「養子縁組」についてです。太陽と月の愛をここにやどす金いろの髪のおとうさんと銀いろの髪のおかあさんは、みなしごをひろって育て、ついに、養子として、正式のじぶんの子どもにし、いつくしんだのです。

22 サラエボの月

第二二条は、「難民の子ども」についてです。不幸な難民の子どもたちは、特別に保護されなければならないのに、その子どもに銃をむけるオトナがいるのです。

23 かたいつぼうの靴下が……

第二三条は、「障害児」についてです。障害をもった子どもは、大切に育てられ、りっぱなオトナとして生きていくための教育などをうける権利があるはずなのに、むすうの地雷を地面にうずめて、子どもたちの足やいのちをうばうオトナがいるのです。

24 ふたりのジヨモ

第二四条は、「健康と保健サービス」についてです。子どもは、すこやかに育ち、病気になったら手厚い医療をうける権利があるはずなのに、貧しいジヨモ少年は、湖のよごれた水を汲みにいって、ワニにねらわれます。

25 やすらかな寝床がありますように！

第二五条は、「収容状況の定期的審査」についてです。特別の施設に入れられた子どもたちは、ほんとうにゆきとどいたお世話をされているといいですね。

26 純金の汗

第二六条は、「社会保障」についてです。世界中の子ども

は、あたたかい社会保障をうける権利をもっていますが、そのためには、汗水ながしてはたらくオトナの人々がいなければなりません。

27 ふるさとは、いつまでも……

第二七条は、「生活水準」についてです。こどもがすくすくと育つためには、それにふさわしい生活水準が必要ですが、チェルノブイリの原発事故で放射性物質をあげたカリーナちゃんの一家は、そのまま、危険地帯に住むしか、てだてがないのです。

修 子 原

28 はじめての修学旅行

第二八条は、「教育」についてです。地球上のすべてのこどもは、教育をうける権利をもっていますが、貧しかったり、女の子だという理由で、学校にいけないこどもが、たくさんいます。

29 光のトロッコ

第二九条は、「教育の目的」についてです。ゆたかな人間性をつちかうのが教育のめあてですが、地雷でりよう足

30 ムックリ

をふきとばされ、ロケット弾で家族をうしなったナジル少年には、学校に行くすべもありません。

第三〇条は、「少数民族や先住民のこども」についてです。

アイヌ民族のこどもとしてこの世に生をうけたコサム少年は、勇気をもって、民族楽器ムックリを演奏します。

31 オーロラの便り

第三一条は、「余暇、レクリエーション、文化活動」についてです。ラップランドにくらすサーメ族の少年レーヌは、吟唱詩ヨイクやサーメ語の勉強にうちこんで、長く暗い冬をのりこえます。

32 月の学校

第三二条は、「児童労働」についてです。すべてのこどもは、健康をそこない、教育をうけられなくなるような労働につかない権利をもっているはずなのに、炭坑で重労働をしなければならぬリユラス少年は、夢の中で学校にいくしかありません。

33 モステイクス（蚊）

第三三条は、「薬物の乱用」についてです。子どもは、麻薬などにかかわらない権利をもっているとはいえ、ストリート・チルドレンのフォンチャ少年は、麻薬中毒の父のために、麻薬売りになってしまいます。

34 オアシス

第三四条は、「性的搾取」についてです。売春などから子どもは守られなければならないのに、少女マリーは、八人の弟や妹をやしなうために、夜のくらがりで、からだを売らなければ、生きていけなかったのです。

35 太陽のなみだ

第三五条は、「売買、取引、誘拐」についてです。子どもをさらって、売りとばし、お金を手に入れるオトナが、大勢いるのです。

36 あわてんぼうのサンタ・クロース

第三六条は、「その他の搾取」についてです。子どもを利用してお金を手に入れようとするオトナが、あとをたち

ません。

37 アルコルの少年

第三七条は、「拷問、自由の剝奪」についてです。むごたらしい仕打ちなどから子どもは守られなければならないのに、兵役を強制し、従わない少年を牢獄にとじこめるオトナもいます。

38 少年兵

第三八条は、「武力紛争」についてです。一五歳にならないような幼い子どもは兵士にしてはならないのに、いくさに狂ったオトナたちは、どんな幼い子どもにも、銃をにぎらせてしまいます。

39 空の焚火

第三九条は、「リハビリテーションケア」についてです。戦乱やひどい仕打ちをうけた子どもたちは、手あつくいやされなければならないのに、ホーちゃんは、ストリート・チルドレンとして、まちかどで、寒さにふるえています。

40 夜空のおかあさん

第四〇条は、「青少年司法行政」についてです。法にふれたこどもは、人間の尊さなどに気づくようにみちびかれる権利をもっています。

41 月と太陽のねがい

第四一条は「高い基準の尊重」についてです。すべてのこどもは、こどものしあわせな生長をねがう世界的な約束ごととしての「こどもの権利条約」にするされた権利をあたえられなければなりません。国内法や国際法で、この条約以上の約束ごとがある場合は、そちらの方を尊重します。月と太陽の無限のいつくしみをこころにやどして、すべてのオトナたちが、こどもの幸福のために、真剣にはたらくことがのぞまれているのです。

原 子 修

児童の権利に関する条約

——各条項の非公式の要約——(ユニセフ)

■前文

前文は国連の基本原則、関連人権規約や宣言の一部の規定を想

起し、子どもが弱いために特別のケアや保護を必要としていることを再確認し、ケアや保護の責任が第一に家庭にあるとしている。前文はまた子どもが出生前、出生後に法的その他の保護を必要とすることや子どものコミュニティの文化的価値を尊重することの重要性、子どもの権利を実現するうえでの国際協力の重要性を再確認している。

■第一部

子どもの定義(一条)

18歳未満。国の法律がそれ以前に成人するとしている場合を除く。

非差別(二条)

権利は例外なくすべての子どもに適用される。国はすべての差別から子どもを守り、あらゆる適切な措置をとって子どもの権利を保護する。

子どもの最善の利益(三条)

子どもに関するすべての活動に際して、子どもの最善の利益を考慮する。国は親その他の責任者が適切なケアを提供できない場合は、子どもにケアを提供する。

権利の実現(四条)

国はできる限りのことをして、条約が定める権利を実現する。

親の指導と子どもの発達する能力（5条）

国は親や家族が子どもの能力の発達に適した指示を与える権利や責任を尊重する。

生存と発達（6条）

子どもは生存する固有の権利をもち、国は子どもの生存と発達を確保する義務を負う。

名前と国籍（7条）

子どもは出生時に氏名をもつ権利をもつ。子どもはまた国籍を取得し、できる限りの自分の親を知り、親に養育される権利をもつ。

アイデンティティの保護（8条）

国は氏名、国籍、家族関係を含む子どものアイデンティティを守り、必要な場合はアイデンティティを再確立する義務を負う。

親からの分離（9条）

子どもは親からの分離が最善の利益になるとみなされる場合を除いて親と暮らし、両親またはその一方と分離された場合はいずれの親とも接触を保つ権利をもつ。

家族の再会（10条）

親子は家族の再会や関係維持の目的ですべての国を去り、自国に入る権利をもつ。

不法移送と帰国（11条）

国は親や第三者が子どもを海外に誘拐し、拘禁するのを防ぎ、救済する義務を負う。

子どもの意見（12条）

子どもは自分の意見を自由に表明し、自分に影響するすべての問題や手続で自分の意見を考慮される権利をもつ。

表現の自由（13条）

子どもは自分の意見を表明し、国境を越えて情報を入手し、情報や思想を知らせる権利をもつ。

思想、良心、宗教の自由（14条）

締約国は親の適切な指導のもとで子どもの思想、良心、宗教の自由の権利を尊重する。

結社の自由（15条）

子どもは他人に会い、団体に参加し、団体をつくる権利をもつ。

プライバシーの保護（16条）

子どもはプライバシーや家族、住居、通信に干渉されず中傷、悪口から守られる権利をもつ。

適切な情報の入手（17条）

国は子どもが多様な情報源から情報や資料を入手し、マスメディアが子どもに役立つ社会的、文化的情報を流すのを奨励し、

有害な情報から子どもを守る措置をとる。

親の責任 (18条)

親は子どもの養育に共同の第一義的責任をもち、国はこの点で親を支援する。国は親の育児を適切に支援する。

虐待や放任からの保護 (19条)

国は親や子どもの養育に責任をもつものによるすべての形の不当な取扱いから子どもを保護し、虐待を防ぎ、犠牲者を守るために適切な社会計画を立案する。

家族のない子どもの保護 (20条)

国は家族環境を奪われた子どもを特別に保護し、適切な代替ケアまたは施設への収容を可能にする義務を負う。それに際しては子どもの文化的背景を考慮する。

原 子 修

養子縁組 (21条)

養子縁組を承認し、許可している国は子どもの最善の利益を考慮し、権限ある当局のみが養子縁組を許可できるようにして、子どもの安全を守る。

難民の子ども (22条)

難民の子どもや難民の地位を求める子どもを特別に保護する。国は権限ある機関と協力して保護や援助を与える義務を負う。

障害児 (23条)

障害児は尊厳をもって相応の充実した生活を送り、最大限度の自立と社会復帰を可能にするために特別のケア、教育、訓練を受ける権利をもつ。

健康と保健サービス (24条)

子どもは実現可能な最高水準の健康に恵まれ、医療を受ける権利をもつ。国は基礎保健や予防保健、公衆衛生教育、乳児死亡率の提言にとくに重点を置く。国際協力を促進し、すべての子どもが効果的な保健サービスを受けられるようにする。

収容状況の定期的審査 (25条)

国がケア、保護、療養のため施設に収容している子どもは、収容状況を定期的に審査される権利をもつ。

社会保障 (26条)

子どもは社会保険を含む社会保障の恩恵を受ける権利をもつ。

生活水準 (27条)

子どもは自分の身体的、知的、精神的、道徳的、社会的発達にふさわしい生活水準を受ける権利をもつ。親は子どもの適切な生活条件を確保する第一次的責任をもつ。国の責任には親やその子どもに対する物質的援助も含まれ得る。

教育 (28条)

子どもは教育を受ける権利をもち、国は初等教育を義務的かつ

無償にし、中等教育を奨励し、子どもが能力に応じて高等教育を受けられるようにする。学校の規律は子どもの権利や尊厳に合致するものにする。国際協力を促進してそれらの権利を実現する。

教育の目的（29条）

子どもの人格、才能、精神的・身体的能力を最大限に伸ばすことを目指す。子どもが自由な社会で責任ある生活を送れるようにし、子どもの親、子ども自身の文化的アイデンティティ、言語、価値や他人の文化、価値に対する尊敬心を育てる。

少数民族や先住民の子ども（30条）

少数民族や先住民の子どもは自分の文化、宗教、言語を尊重する権利をもつ。

余暇、レクリエーション、文化活動（31条）

子どもは余暇、遊び、文化・芸術活動に参加する権利をもつ。

児童労働（32条）

子どもは健康、教育、発達を脅かす労働に従事しない権利をもつ。国は最低就業年齢を決め、労働条件を規制する。

薬物の乱用（33条）

子どもは麻薬や向精神薬の使用やその製造や取引に利用されない権利をもつ。

性的搾取（34条）

国は子どもを売春やポルノへの関与を含む性的搾取や性的虐待から守る。

売買、取引、誘拐（35条）

国は子どもの売買、取引、誘拐を防止するために、あらゆる努力を払う義務を負う。

その他の搾取（36条）

子どもは第32、33、34、35条の規定以外の福祉のすべての側面に有害なすべての形の搾取から保護される権利をもつ。

拷問、自由の剝奪（37条）

子どもは拷問、残酷な取扱いや刑罰、不法な逮捕、自由の剝奪を受けられない権利をもつ。罪を犯したものが18歳未満の場合は死刑や釈放の可能性のない終身刑を科さない。自由を奪われた子どもは、成人と暮らすことが最善であると判断される場合を除いて成人から分離される。拘禁中の子どもは法その他の支援を受け、家族と接触する権利をもつ。

武力紛争（38条）

国は15歳未満の子どもが敵対行為に直接参加しないようにするため、可能なすべての措置をとる。15歳未満のものを軍隊に徴募しない。国はまた関連国際法にしたがって武力紛争の影響下

の子どもの保護と養育を確保する。

リハビリテーションケア (39条)

国は武力紛争や拷問、放置、虐待、搾取の犠牲になった子どもが回復し、社会復帰できるようにするために、適切な措置をとる義務を負う。

青少年司法行政 (40条)

法に接触した子どもはその年齢を考慮し社会復帰を目的として、人間の尊厳や価値の意識を高めるようなやり方で取り扱われる権利をもつ。子どもは弁護のために基本的保障や法的その他の支援を得る権利をもつ。司法手続や施設への収容は可能な限り避ける。

修 子 原

高い基準の尊重 (41条)

国内法や国際法が、子どもの権利に関してこの条約の規定よりも有用な規定をもつ場合は常にその規定を適用する。

■第2部

条約の実施と発効

第42〜54条は次の規定を含む。

- (1) 国は条約の規定を成人や子どもに広く知らせる義務を負う。
- (2) 10人の専門家からなる「児童の権利に関する委員会」を設

置する。委員会は締約国が批准から2年以内、その後は5年ごとに提出する報告を検討する。条約は20カ国の批准を得て発効し、続いて委員会を設置する。

(3) 国は市民が報告を広く利用できるようにする。

(4) 委員会は子どもの権利の特定の関連事項についての研究を提案し、評価の結果を関係国や国連総会に知らせることができ

きる。

(5) ユニセフなどの国連機関は「条約の効果的实施を促進し、国際協力を奨励する」ため、委員会の会合に出席することができる。それらの機関はまた国連の諮問機関の地位にあるNGOや国連機関を含む「権限がある」と認められる他のすべての機関とともに、委員会に対して適切な情報を提出し、あるいは条約の最適な実施に関して助言を求められることができる。